

【完結】 弟子零号の聖杯戦争！！

雪化粧

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、山で剣の修行をしていた藤村大河は山の中で奇妙な洞窟を見つける。そこに現れた者は!?

混乱させてしまったようなので、各クラスのサーヴァントと出典を書いておりますね。

セイバー：ギルガメッシュ (Fate/Prototype)

アーチャー：エミヤ (Fate/stay night)

ランサー：デイルムッド・オディナ (Fate/ZERO)

ライダー：アルトリア・ペンドラゴン (Fate/Grand Order)

コンカラー：アレキサンダー (Fate/Grand Order)

アヴェンジャー：ランスロット (Fate/ZERO)

???

???

目次

第一話「召喚するツス！」	1
第二話「朝食美味いツス！」	11
第三話「出番が来ないツス！」	19
第四話「正義の味方ツス！」	25
第五話「街の人達に大迷惑ツス！」	30
第六話「遠坂さんの家も大変そうツス！」	38
第七話「間桐さんの家はもつと大変な事になってたツス！」	45
第八話「なんだか怖いツス！」	51
第九話「こ、これってデートツスか？」	56
第十話「バカだ！ バカがいるツス！」	63
第十一話「アーチャー死す！ デュエルスタンバイ！」	71
第十二話「死神動く」	78
第十三話「なんだか、楽しいツス！」	83
Interlude	89
第十四話「楽しいツス！」	94
第十五話「聖杯問答？」	101
第十六話「イヤツス！」	108
Interlude	115
第十七話「暗黒神殿」	119
第十八話「かつこいいツス！」	125
第十九話「Sei personaggi in cerca d'autore」	133
第二十話「弟子零号」	141
最終話「藤ねえルート」	149

第一話「召喚するツス！」

その輝くような笑顔に何度も救われた。あの人がいたから、曲がりなりにも人間の真似事なんぞが出来たんだろう。

守れなかったもの。捨て去ったもの。切り捨てたもの。その価値に気付く事もなく、最後まで突き進んだ拳句、このザマだ。きつと、この姿を見たら、あの人は怒るに違いない。

なにをやっているんだ！ そう言つて、泣いてしまうかもしれない。あれで、結構繊細な所もあったからな……。

「それにしても……」

溜息が出る。まさか、こんな事が起こるとは思わなかった。

正義の味方を目指した十数年。守護者として、人類の後始末に奔走した幾星霜。

一度だつて、考えなかった。だつて、こんな事が起きると誰が想像出来る？

「ちよつと、アーチャー!! どこに居るんスカ!？」

ポニーテールを揺らしながら、彼女が私を呼んでいる。

まさか、あの頃よりも更に元気な声を聞く事になるとは思わなかった。あれで、若い頃より落ち着いていたのだという事実には衝撃を覚えたものだ。

活発な性格は変わらない。ただ、私が知っている彼女よりも若々しい。

「何か用か？ マスター」

「……そのマスターっていうの、いい加減止めて欲しいツスよ。背中が痒くなるツスー!」

「分かったよ、マスター」

「分かっちゃないじゃないツスカ! もう、意地悪ツスね!」

ああ、こんなやりとりを昔もしていた。

「なに、笑ってるんスカ!? わたしは怒ってるんスよ!」

「おお、恐い。頼むから、哀れな従僕を虐めないでほしいな」

「だから、虐められてるのわたしの方ツスよ!？」

そろそろ爆発する。後三秒……二、一、ドン！

「アーチャー!!!」

「ハッハッハ！ 今日も元気だな、タイガー！」

涙が出る程、このやりとりが嬉しい。

彼女の名前は藤村大河。私が生前、散々世話になっただけながら、恩も返さずに置き去りにした女性だ。

◆ 数時間前——。

藤村大河は山籠りをしていた。現役女子高生が山籠りをしていた。その時点で一般常識的観点から見るとおかしいのだが、彼女にとっては平常運転だった。

剣の修行は山籠りにかぎる！ それが彼女の主張だ。

「……お腹すいたよー」

哀しげにリュックサックの中を覗いている。

山道を走り回り、竹刀を振る。その結果、お腹が空く。実に自然な流れだ。彼女はそのまま、自然の流れに身を委ね、食料を食べ漁った。その結果、これまた自然の流れで食料が底をついたのだ。

当然の結果を前に彼女はシクシクと涙を流し、うなだれる。

「お腹が切ないよー」

山の動物達はそんな彼女に同情の視線を送る。そして、通り過ぎる。同情はしても、食料は恵まない。それが自然の摂理なのだ。

ただし、仏様は例外だ。

「チクショー……、ブツダさんには食料分けてあげる癖にー……。手塚治虫の漫画で読んで知ってるんだぞー……」

限界だ。さすがの彼女も悟った。山を降りよう。そして、ご飯を食べよう。

だが、ここで一つ大きな問題が発生した。

「……暗くて道が分からない」

今は夜だという事。そして、彼女はリュックサックに寝袋と食料以外、何も入れずに入山した事。

黙って朝まで待てばいいものを……。

彼女は空腹を我慢する事が出来なかった。光源一つ無い山道を勘だけで進んでしまったのだ。

結果、よく分からない場所に出た。

「うわー、すごい！こんな所に洞窟なんてあつたんスね！」

暗かったせいで、岩の中に突っ込み、その中を通り抜けた事に気付かなかった。

超常現象をアツサリとスルーして、彼女は生暖かい空気の流れる洞窟を歩く。

空腹を忘れる程の好奇心が彼女に冒険をさせた。

驚く程広い洞窟。大河は新聞の一面に自らの写真が掲載される光景を妄想した。

『現役美少女高校生が謎の洞窟を発見!!』

洞窟の発見程度ではニュースになどならない。だが、彼女はなると思った。

明らかに異様な空間。まるで、生き物の体内のような薄気味悪さが漂う洞窟を意気揚々と歩いて行く。

その姿は初めて訪れる遊園地にはしゃぐ小学生のようだ。

「おお、ゴールっスか!」

何時間も歩き続けた直後とは思えない程元気いっぱいいの声を張り上げ、彼女は広々とした空間に躍り出た。

その場所は明らかに異常だった。まず、広過ぎる。東京ドームがすっぽり入ってしまう程広い。そして、中央に『地球のへそ』^{エアーズロック}を思わせる小高い丘があり、その中央には禍々しい光の柱がある。

「おお、カッケーっス！」

その光景を見た第一声がコレだった。

「なんスか、コレ!? よく分からないけど、大発見ほくないッスか!」心の底から嬉しそうにはしゃぎ回る。

禍々しいオーラを発する光の柱を『渋谷のハチ公』や『上野の西郷さん』と同列に扱っている。

ある意味で大物かもしれないと思った者が一人。

「…………ふむ、何者かと思えば藤村の家の娘か」

「ほえ？」

まさか、声を掛けられるとは思っていなかった。

大河は慌てて振り返る。そこには一人の老人が立っていた。

「えつと……、お爺さんは誰ツスか？」

「誰ツスか……と聞かれれば、間桐臓硯と答えよう」

「間桐さんって、先週の町内ゲートボール大会で優勝した、あの!？」

「その間桐さんじゃ」

老人は力カと笑みを浮かべながら大河の下へやって来る。

「しかし、あまり感心出来んな。このような場所におなごが一人で来るなど……」

「あー……、ちよつと迷っちゃいました……」

「なるほど、迷ったか……。ならば、仕方がないな」

「えへへー。そうそう、仕方ないんすよ！」

「ああ、仕方がない。山で遭難したおなごが死体となって発見されても、それは仕方のない事だ。血と獣の菌型を付けた肉の一部を置いておけば、誰もが納得するじやろう」

「……えつと、すつごく物騒な事を言ってますん？」

「いや、至って普通の事を言っているだけだ」

「そ、そうかな……。なーんか、ヤバイ感じの事を言ってたようない……」

それは野生の勘とでも言うべきか、大河は目の前の老人に警戒心を抱いた。

ジリジリと近づいて来る分だけ後ろに下がる。

「これこれ、どこに行く？」

「いやー……、わたしはここいらで失礼するツスよ」

「それはいかん。いかんぞ、藤村の娘よ。ここを見られたからにはただで帰すわけにもいかん」

あ、ヤバイ展開だ、コレ。そう気付いた瞬間、大河は脱兎のごとく走りだした。出入口に向かって一目散に。

だが、何故か入って来た方の道が塞がっている。

初め、大河には何が道を塞いでいるのか分からなかった。だが、近

づくにつれ、それが生き物の集合体である事に気付いた。

「あつ……ああ、あ……」

言葉も出ない。以前、父親の股間にあったものを見た事がある。それとソツクリなイヤラシさの塊みたいな生き物がウジャウジャ壁を張っているのだ。

「ほっほっほ。逃しはせんぞ」

好々爺の如き笑みを浮かべ、危険なオーラを放つ臓硯に大河は涙目だった。

「エ……エツチなのはイヤツス!!」

とにかく、蟲の大群から離れようと走る大河。だが、どこからともなく蟲は湧いてくる。逃げれば逃げた先、立ち止まれば足元に蟲が現れる。

「ギニャアアアアアア!?!」

「ほっほっほ。ほれほれ、捕まっつてしまっぞ」

遊ばれている。捕まったら、明らかにマズイ事態なのだが、それでも尚、人生初の老人虐待にトライしたくなる程、大河はムカついた。

「このエロジジイ!! 絶対に許さないツスよ!!」

「ああ、許す必要はない。いきり立つ心根を折る事こそ至高よ」

「何言ってるか分かんないツス!!」

叫びながら、大河は気付いた。徐々に追い詰められている事実に!

「あ……ああ、ヤバいツス。これは明らかにヤバいツス」

大河は思った。

誰でもいいから助けて欲しい。

救世主でも、正義の味方でも、この際、仮面ライダーとかウルトラマンとかポケモンマスターでもいいから来て欲しいと!

その願いを汲み取るものがいた。

目の前で珍劇を繰り広げる少女の叫び声を禍々しき全開の光の柱の中で聞き届けた者がいた。

「だれか……、誰かわたしを助けてエエエエエ!!」

彼女は知らない事だが、この街には今、魔術師と呼ばれる存在が集

まりだしている。

彼等の目的は一つ。如何なる願いも叶う万能の盃……、『聖杯』を手に入れる事。

その為の戦いを彼等は『聖杯戦争』と呼ぶ。

彼等は『聖杯戦争』のシステムを使い、英霊と呼ばれる人類の上位に位置する存在をサーヴァントという枠に嵌めて現世に召喚し、使役する。

伝説に名を残す英雄達が日本の片隅で激突するという裏の世界の危険度MAXな伝統行事。

そこに本来、彼女が入り込む余地などなかった。なぜなら、彼女は魔術師ではなく、その才能も無かったからだ。

だが、ここに『聖杯戦争への参加表明を聞き入れ、マスターの選別を行う者』の本体がある。

そして、マスター自身の魔力を一切使わずとも召喚に事足りる程の潤沢な魔力が循環している。

結果、彼女の手我真紅の聖痕が浮かび上がった。そして、陣も無い状態かつ、詠唱すら一言も呟いていない状況で、突風が吹き荒れた。

「ば、馬鹿な!?!」

叫ぶ老人に突風の中心から白と黒の刃が走る。

「……実に乱暴な召喚だが、なるほど。化生の者に追われているは仕方がない」

突風が止み、大河の前に赤い外套を纏う男が現れた。

「出会いの問答も、名乗りすらも後回しになるが許してくれ、マスター。まずは目の前の害虫を処理するでしょう」

「……よもや、藤村の娘がマスターに選ばれるとは」「なに?」

男が老人の言葉に動きを止めた一瞬を突き、老人は地面に染みこむように姿を消した。

「イ、イリリュージョン!?!」

「ツチ、逃げられたか……」

男は忌々しげに老人の消えた地面を睨むと大河に向き直った。

「すまない、マスター。初仕事に失敗するのはサーヴァント失格だな」
「えつと……」

頭を下げる男に大河はドン引きしていた。
まず、格好が変だ。どんな趣味!? と叫びそうになる。

次に見た目が明らかに外人だ。日本語が通じるみたいでちよつと安心。

そして、言ってる言葉の意味が理解出来ない。やっぱり、日本語通じない人かとも思い、悲鳴を上げそうになる。

「……マスター?」

「あ、あの……、失礼するツス!!」

「お、おい、マスター!?!」

エロ生物の壁が消えた道に走って行く大河。だが、直ぐに立ち止まり、戻って来た。

「マ、マスター……?」

あまりにも奇抜な行動に男は困惑している。

「助けてくれてありがとうございます!」

「え? あ、ああ!」

ペコリと頭を下げる大河。

大河はお礼を言える女の子なのだ。

「……マスター。君は……」

「えつと……その、マスターっていうのはわたしの事ツスか?」

「ああ、それ以外に誰が……つと、君はもしかして一般人か?」

「一般人……? うーん、微妙ツスね。親が極道だから一般人とは少し違うかもツス」

「ご、極道……? そ、そうか……。だが、聖杯戦争の事は何も知らない。違うか?」

「正妻戦争? むかし、お父さんを巡ってお母さんと四人の女が争いあったという、あの!?!」

「いや、それはどんな状況だ!?! ……そうじゃなくて」

男は『聖杯戦争』について大河に簡単なレクチャーをした。
「なるほどなるほど」

大河は男の話の話を聞き終わると、さつき大河を密かに救った禍々しい光の柱を見て言った。

「よし、ぶっ壊そう!」

ひどい裏切りだ。さつき、助けてあげた恩を自覚も無く仇で返そうとしている。

「……短絡的過ぎるぞ。確かにそれも解決策ではあるが……」

「なら、何を迷うんスカ!」

これがあると街が大変な事になる。そう言われたからには街に根を張る任侠者として放つてはおけない。

「これを壊す為には強力な宝具が必要だ。私も用意出来くはないが……、あいにく魔力が足りない。魔術師ではない君からは魔力を貰う事が出来ないからね。加えて、仮に破壊したとして、その後、魔術協会と聖堂教会が雁首揃えて君を殺しにくるぞ」

「な、なんスカ? その物騒なんちゃら教会って……」

「要は魔術師の世界のマフィアだ。しかも、表世界のマフィアの質の悪さを何倍にも膨らましたような連中だ。ちなみに、君を殺した後は君の家族や友達も殺しかねない。そういう連中だと思ってくれればいい」

「じゃ、じゃあ、どうすればいいんスカ!」

涙目になる大河に男は言った。

「このまま私との契約を断ち、すぐに監督役の下へ駆け込む。それが最善の道だ」

「この物騒なのは?」

「残るな。だから、監督役に相談でもして街の外へ出る事を勧める」

「で、でも、それじゃあ街のみんなが!!」

「どうせ、他人だろう?」

男は冷たく言った。

「家族や友人だけなら逃してやれるだろう。それで満足するんだな」

「そ、そんなの——」

「君がどんなに頑張っても、誰かが犠牲になる。それが君自身や君の知人になるか、赤の他人になるかの違いだけだ。なら、君は君自身を

守るべきだろう」

男は淡々と彼女の取るべき選択を説明する。

その男の気づかぬ所で大河は拳を握る。

「ウルセエツス!!」

「ほあ!?!」

頬をグーで殴られた。あまりの事に言葉を失う外套の男。

「いいから、みんなを助けられる方法を教えるツス!! ほら、ハリー!!」

「ハリー!!」

「ひ、人の話を聞いていなかったのか? 結局、どちらかが……」

「どっちも犠牲にしない方法を取る!! それ以外は認めないツスよ!!」

「そんな無茶苦茶な道理は通らないぞ、マスター!」

「マスターじゃないツス!!」

大河は叫ぶように自らの名を口にした。

「わたしには藤村大河っていう、立派な名前があるんす! マスターとかいうこそばゆい名前じゃないツス!!」

その名を聞いた瞬間、男は顔を歪めた。

その顔があまりにも哀しそうで、大河は咄嗟に口元を押さえた。

「そ、そんなシユンとしなくても……。いや、わたしも怒って悪かったツス。だから、そんな泣きそうな顔をしなくても……」

「……シ、……いや、アーチャーだ」

「へ?」

「私の事はアーチャーと呼べ」

「お、おう?」

「分かったよ、マスター。君の方針に従おう」

拍子抜けするくらい素直な言葉。

呆氣に取られる大河。そんな彼女にアーチャーは言った。

「ツフ。君の覚悟を試したんだよ。いいだろう! 全てを救えと言ったな? サーヴァントには相応しいオーダーだ」

嬉しそうに男は言う。

大河は完全に置いてけぼりをくらっていた。

「ああ、いいだろう。君の言う通り、全てを救ってやろう。じやないと、君に認めてもらえないらしいからな」

「えつと……、そこまで怖かったツスか？」

「ああ、怖かった。この世でこんなに恐ろしい事があるのかと思うほどな！ まったく、召喚早々サーヴァント虐めとは実に恐ろしいマスターだ」

「い、虐めてなんかいないツスよ!! わ、わたしは優しいマスターツス!!」

それが二人の出会い。本来、二度と交わる筈の無かった二人の糸が絡み合う。

まだ、出会わぬ筈の二人。もう、出会わぬ筈の二人。

彼等の物語が今、はじまる——……。

第二話 「朝食美味いッス！」

薄暗い地下室でラップ型スピーカーから有名歌手の歌声の代わりに罅割れた老人の声が響く。懐古主義者が好む骨董品だが、遠くの場所に居る相手との会話を可能とする真正銘の魔術礼装である。電話の方がコストの面でも、効率の面でも、利便性の面でも優れているのだが、持ち主である遠坂時臣は敢えてこの魔術礼装を愛用している。現代科学の粋を集めた機械を使うなどナンセンス。

【時代が移り変わろうと、魔術師は旧き物、古き伝統を尊ぶべきだ】
それが彼の主張である。彼の魔術師としての弟子である言峰綺礼には不可解な心理だ。

『——というわけだ。まさか、大聖杯のある円蔵山地下で召喚を行う者が居るとは……』

「マキリか……、あるいはアインツベルンか。いずれにしても、大聖杯に細工をされた可能性がある以上、捨て置くわけにはいきませぬね」
『うむ。時期尚早かと思うが、サーヴァントを召喚し、調査に向かつて頂きたい。下手を打てば、聖杯戦争が根幹から崩れ去る可能性もある』

「承知しました。丁度、今宵は綺礼にサーヴァントの召喚を行ってもらう予定でしたから。……しかし、フフツ」
『どうしたのかね?』

微笑を零す時臣にスピーカーの向こう側で言峰璃正は眉を顰める。
「いえ、不幸中の幸いといえども言いましようか……。召喚における不安要素が取り除かれた事に安堵しているのですよ」

『不安要素……?』

「ええ、私が用意した聖遺物で召喚出来る《最強の英霊》を単独行動が可能スキルを保有するアーチャーのクラスで召喚してしまう憂いが無くなった。大聖杯に近づく暴挙は許し難い。だが、その点に関してのみ、感謝しよう」

時臣は璃正との通話を終え、傍らに佇む綺礼を見つめた。

「さて、聞いての通りだ。早速、召喚の儀式に取り掛かろう」

「かしこまりました」

◇

暗闇の中、呻き声をあげる男が一人。彼が無数の陰茎を横した蟲に体を弄られ、人ではないナニカに変えられていく苦痛に耐えていると、急に痛みが晴れた。

「雁夜。些か事情が変わった。お前には何としても勝ってもらわねばならん」

「……ッハ。顔色が随分と悪いな、臓硯」

挑発的な眼差しを向けると、いつもなら鼻で笑う老獪が苛立ちの籠った表情を浮かべ、杖で雁夜の背中をついた。すると、体内で蟲が暴れ始め、耐え難い激痛が走った。意識を失う事も許されず、脳内麻薬の分泌も抑制され、人間が感じ得る最大級の痛みが駆け巡る。

数時間にも、数日にも感じられる数秒後、臓硯は雁夜から杖を離れた。

「口を開けろ」

臓硯は雁夜が救いたいと望む少女の胎内で育った数匹の蟲を雁夜の口に押し込んだ。

朦朧とする意識の中、激しい嘔吐感に襲われパニックを起こす雁夜の口を他の蟲に閉じさせる。

「お前の中に桜とのラインを構築した。これで少しはマシなマスターになれるだろう」

体内の急激な変化に雁夜の意識は闇へ沈む。

目を覚ました時、そこは同じ場所だった。意識を失う前と異なる点は二つ。一つは無数の蟲が退去し、床に魔法陣が刻まれている事。もう一つは幼い少女がいる事。

「さく、ら……ちゃん？」

起き上がると、妙に体の調子が良かった。

「これは……」

「言っただろう。お前の中に桜とのラインを構築した。今、お前の中には桜の魔力が循環しておる」

「桜ちゃんの魔力が……？」

桜はいつもと変わらぬ諦観の表情のまま小さく頷いた。

「これより、お前にはサーヴァントの召喚を行つてもらおう。召喚陣と触媒は用意してある。後は呪文を唱えるのみ」

臓硯は召喚陣の前に雁夜を立たせた。陣の前には台座が置かれ、その上には小さな木片が置かれている。

「あれは？」

「アーサー王伝説は知っているな？」

「一応、一通りの伝承や伝説、逸話には目を通して」

「ならば、この木片の価値が分かるはずだ。これは件の伝説に登場する円卓の欠片。サーヴァントの召喚システムについては以前渡した資料にある通りだ。触媒を使えば、召喚する英霊を事前に選別する事が出来る。逆に触媒を使わなければ、召喚者の性質と似通った英霊が召喚される。前者のメリットは言わずもがなだが、後者にもそれなりのメリットがある。自らの性質とサーヴァントの性質が近い故に意思の疎通が図りやすい。前者の場合では、性質が合わない場合があり、それ故に内輪揉めを起こし、自滅する可能性もある。そこで、この触媒だ」

雁夜は妙に饒舌な臓硯に違和感を感じながら、円卓の欠片を見つめる。

「なるほどな……。これなら、両方のメリットを獲得する事が出来るって事か」

「その通り。ソレを触媒にする事で召喚される英霊は当然、円卓の騎士。アーサーにしろ、ランスロットにしろ、ガウエインにしろ、誰が呼び出されても英霊としては一級品よ。加えて、選別の縛りは円卓の騎士のみ故、その一級品の中から召喚者と最も相性の良いサーヴァントが選ばれる。さて、呪文は覚えているな？」

「当然だ」

「ならば、始めよ」

雁夜は一步、召喚陣へ近づいた。



サーヴァント召喚の儀式は魔術的儀式の中でも比較的簡素なもの

だ。令呪と召喚陣があれば、後は呪文を唱えるだけで完了する。

故に成功率を高める方法は限られている。召喚陣を描くインクには魔力を籠めた宝石を溶かした物を使い、呪文には遠坂家の祖の大師父の名を追加する。

悪足掻きのようなものだが、一世一代の大勝負だ。失敗の要因は可能な限り取り除かなければならない。

「さて、始めるか」

時臣は綺礼を壁際まで下がらせると、深く息を吸い込んだ。

予定では、今宵綺礼にアサシンを召喚させ、頃合いを見てから自身もサーヴァントの召喚を行う手筈だった。不届き者の為に順番が狂ってしまった。痛手という程では無いが、不快ではある。

「……いかな」

瞼を閉ざし、意識を完全に切り替える。人間としての遠坂時臣は死に、魔術師としての遠坂時臣が息を吹き返す。体内を巡るは酸素に非ず。大気中を漂うマナがその身を通り抜け、オドを生成し、循環する。全身の神経にヤスリを掛けるような慣れ親しんだ痛みを受け流し、右手を陣に翳す。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

吹き始めるエーテルの嵐に負けまいと、時臣は左手を右腕にそえる。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

召喚陣の向こう側には台座に置かれた触媒がある。嘗て、不死の霊薬を飲んだ蛇の抜け殻。それに導かれるは最強の英霊ただ一人。

喚び出す事が出来れば、その時点で勝利が確定する程の圧倒的な力の持ち主。仮に単行動のスキルを持つアーチャーで召喚されれば制御に骨が折れた事だろう。だが、その枠が埋まった今、憂う事は何一つ無い。

「Anfang」

時を同じくして、遠坂邸から少し離れた場所にある間桐邸の地下でも雁夜が召喚の呪文を唱えていた。

「告げる」

背後で蠢く蟲も、生気を感じさせない少女の瞳も、悍ましい気配を漂わせる老獺の視線も、吐き気がするような激痛も全て意識から遠ざける。

この瞬間、全てが決まる。失敗したら、この一年間が無駄になり、桜を救う事も出来なくなる。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ！」

不可視である筈の魔力が目に見える程の濃度に圧縮されていく。

そこに何かが現れようとしている。来る——ッ！

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

異なる場所で二人の男が同時に最後の一文を謳い上げる。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——
——！」

眩い光が眼球を焼く。物理的な衝撃を伴う魔力の波動と共に、召喚陣の中央から人影が現れた。

◇

「サーヴァント・アヴェンジャー。召喚に応じ、参上した」

降り立った英霊は昏い瞳を雁夜に向けた。基本のラインナップから外れたクラスを口にする。

「アヴェンジャー……？」

「ほう、復讐者のサーヴァントとは」

雁夜は呆然と己のサーヴァントを見つめた。己と同じ性質を持つ筈のサーヴァント。それが復讐者。その昏い瞳、醜悪なオーラから目を背けたくなる。

嘘だ。これは何かの間違いだ。そう、痼癢を起こしたくなる。

清廉潔白な騎士を望んでいたわけじゃない。そこまで、己を誇れる人間だとは考えていない。だけど、ここまで醜悪なのか？

「……お前の名は？」

「ランスロット。湖のランスロットで御座います」

その名は愛に狂い、王国を滅びへ導いた裏切りの騎士の名前。騎士物語の最大の汚点。

「お前が……、俺か」

「マスター……？」

「……なんでもない。それより、自己紹介をしないと。俺の名前は間桐雁夜だ。よろしく頼む」



「——聖杯戦争。至宝で酔わせ、英雄同士を殺し合わせる。実に度し難い……そして、素晴らしい」

黄金の甲冑を身に付けた赤い瞳の男が時臣を見据える。

「名乗れ、召喚者」

時臣は膝を折り、頭を垂れた。

「遠坂家五代目当主。名を遠坂時臣と申します」

「時臣、面を上げよ。我は英雄の中の英雄。王の中の王。最強の英霊ギルガメッシュである。この瞬間、貴様の勝利は確定した。栄光も、聖杯も貴様にくれてやる。だが、我の目的の邪魔だけはするな」

目論見通り、最強の英霊を引き当てた。しかも、暴君と名高き最古の王が聖杯を渡すと言った。良い意味で想定外の事に口元が緩みそうになる。

「……目的とは？」

確認しなければならぬ。決して、このサーヴァントの機嫌を損ねてはならない。

「戦いだ」

ギルガメッシュは口元を歪めて言う。

「この我こそが最強であると証明する」

「……かしこまりました。決して、王の邪魔立ては致しません事を誓います」

「話が分かるヤツだな。さて……、その男は何だ？」

ギルガメッシュは壁際に背を預ける綺礼を睨んだ。

「どうにも好かん、その顔」

苛立ちを覗かせる表情を浮かべるギルガメッシュに時臣は慌てた。

「彼は私の愛弟子に御座います。決して、王に無礼は働きません。むしろ、彼にもサーヴァントを召喚させ、王に助力を——」

「ならん」

ギルガメッシュは言った。

「その男は気に食わん。それに、貴様は言ったな。邪魔立てはしないと。その男がサーヴァントを召喚し、我に助力だと？ それでは我が戦うべき敵が減るではないか」

「……かしこまりました。彼の召喚は取り止めます」

予想外だ。まさか、敵が減るから召喚を止めろと言われるとは思わなかった。これでは何のために彼を弟子に取り、鍛え上げたのか分からなくなる。

だが、ギルガメッシュの機嫌を損ねてまで召喚を強行する事は愚策だ。この英霊の前ではあまねく英霊が劣等種に貶められる。それほどの力を持っている。

マスターに備わる透視能力が彼のステータスを時臣に知らせる。最強の英霊は最優のクラスであるセイバーで召喚され、あらゆるステータスがアベレージを超えている。負ける要因は一つもない。

「全ては御身の為すがまま、思うがままに……」

◆◆

それは運命ではない。

それは偶然ではない。

一人の少女が巻き起こした嵐に人々は巻き込まれていく。

「アーチャー……この味噌汁美味すぎるツスよ！ どうなってるんスカ!? わたしの好みにドンピシャツスよ！」

「ははは。喜んで頂けて従者冥利に尽きるよ、タイガ」

その事に少女自身も気付かない。少女に生前培った技術の粋を集めて朝食を提供しているアーチャーのサーヴァントも気付かない。

一方は舌に染み渡る美食に酔い痴れ、一方はその笑顔に酔い痴れている。

「アーチャー！」

「なんだ、タイガ？」

「美味しい朝食、ありがとう！ ご馳走様！」

「……ああ、お粗末さま」

幸福な笑顔を浮かべる二人の戦いはもうすぐ始まる。

第三話 「出番が来ないツス！」

その日はたまたま寝付きが良くなかった。いつもなら熟睡している筈の時間に目が覚めてしまった少女は傍らに母の姿が無い事に気付く。

「お母様……？」

父の姿が無い事は珍しくない。だけど、母はいつでも隣に居た。不安に駆られ、部屋を飛び出す。

普段、歩き慣れた廊下も夜の暗闇によって昼間と異なる不気味な様相を見せる。

「お母様……。キリツグ……」

少女は恐怖に怯えた。今にも泣き出してしまいそうな顔でゆつくりと歩き始める。戻って、空っぽの部屋で一人眠る事が恐ろしかったから。

両親の名を飛びながら廊下を歩き続ける。幸い、窓の外から月明かりが差し込み、薄つすらと先を見通す事が出来る。

歩き慣れた道の途中に両親の姿は無かった。ただ、見知った顔を見つける事が出来た。両親が忙しい時に時折相手をしてくれているメイドだ。

「このような夜更けにどうなさったのですか？」

「お母様が部屋に居ないの！ きつと、私に内緒でキリツグと一緒に遊んでいるんだわ！」

ほっぺを膨らませる少女にメイドは苦笑した。実のところ、彼女は少女と殆ど同い年だ。ただ、彼女はホムンクルスと呼ばれる人造生命体であり、鑄造された時に既に成人の肉体を持たされていただけの事。生まれてから生きる意味や目的を見出す人間とは違い、彼女のようなホムンクルスは初めに己の生をどう使うか決められ、それに沿うように肉体を生成される。

彼女の生きる目的は少女——、イリヤスフィールの身の回りの世話をする事。ただ、その為だけに生み出された。彼女はその事に不満を抱いた事など無い。むしろ、自分とは違い、様々な感情を発露す

るイリヤスフィールの姿に心を満たされてすらいる。

「では、わたくしもお供いたします。恐らく、奥方様は旦那様と御一緒に聖堂にて英霊召喚を行っている筈です。なんでも、予想より早くサーヴァントが揃いつつある為、急遽召喚の日時を早めたのだとか」
「英霊召喚……？」

メイドはイリヤスフィールの両親が何をしているのか正確に知っていた。ただ、その事を彼女に話してはいけなと誰にも命じられていなかった。

故にイリヤスフィールが望む答えを口にしてしまった。両親の居場所。両親の為そうとしている事。

「過去の英雄を召喚する儀式でございませす。既に三騎士のクラスが埋まってしまつて、皆様大慌ての御様子です」

メイドの話聞いたイリヤスフィールの顔に浮かぶもの、それは好奇心。英霊召喚という過去に偉業を為した英雄を召喚する大儀式は子供の好奇心を刺激するには十分過ぎる材料だった。

イリヤスフィールはメイドに聖堂へと案内させる。すると、扉を僅かに開いた先で父が陣を前に片手を突き出していた。

「——告げる」

いつもとは違う父の雰囲気。少女は息を呑みながら、父の背中を見つめ、その言葉に耳を傾けた。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

気が付けば、父の真似をしていた。遠くの魔法陣に向けて手を伸ばし、父の発した言葉を繰り返す。

ただ単に、かっこいいと思つたから真似をしたただけだ。それがどのような結果を生み出すかなど考えていない。子供が好奇心に乗せられて父親の真似をしただけに過ぎない。

その結果——、

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——
——！」

「なんじ、さんだいのことだまをまとうしちてん！ よくしのわより

きたれい！ てんびんのまもりてよ！」

拙い言葉で紡がれた呪文は誰にとつても予想外の結末を引き起こした。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは奇跡の存在である。本来、生まれる筈の無い人工生命体ホムンクルスが人間と交わり産んだ究極のホムンクルス。人間でありながら、ホムンクルスとしての側面を持つ、アインツベルン史上最高傑作とされている。

彼女には特別な力がある。次の「聖杯」として産み落とされ、生まれた瞬間に存在を弄られた彼女には「願望機」としての性質が備わっている。未だ、調整は不十分だが、その性質故に彼女は魔術を行使する際、理論を求めない。ただ、祈りを捧げるだけで魔術を完成させる事が出来る。

父親の真似事をしながら、彼女は世話係のホムンクルスに聞いた英霊という存在を欲した。

理由は——ただ、会いたいから。

生きた魔術回路とまで呼ばれる膨大な魔術回路によつて生み出される莫大な魔力と願望機としての性質が合わさり、彼女の好奇心が英霊召喚の儀式を侵食していく。

既に召喚準備を終え、呪文の詠唱を完了させつつあるマスターに刻まれた刻印が剥がれ落ちていき、代わりに少女の腕に真紅の聖痕が刻まれていった。

本来ならあり得ないイレギュラー。だが、聖杯戦争において、彼女以上にマスターに相応しい人間など存在しない。例え、大聖杯を穢す悪意が選定条件を歪めようと、彼女が望み、儀式に臨んだ以上、マスターになる資格を最優先で受け取るべきは彼女。

「な、何が起きている?！」

突然、令呪が消滅した事に慌てふためく父親の姿を無視して、彼女は聖堂内に足を踏み入れる。彼女の視線の先には一人の女が立っていた。

女もまた、彼女を見つめている。

「サーヴァント・ライダー、アルトリア・ペンドラゴン。召喚に応じ、

参上した」

凜とした表情でライダーはイリヤスフィールに手を伸ばす。

「問おう。貴女が私のマスターか」

その問いにイリヤスフィールは意識する前に頷いていた。

「そうよ。わたしがあなたを呼んだの！」

満面の笑みを浮かべるイリヤスフィールにライダーもまた、笑みを零す。

「我が愛馬は雷雲を呑むように駆け、我が剣は万軍を斬り払い、我が槍はあらゆる城壁を打ち破る。貴女の道行きを阻むものは、その悉くを打ち破ろう。ここに契約は完了した」

その光景を誰も阻む事が出来なかった。吹き荒れる魔力とライダーの発する圧倒的な覇気が口を開きかけた者達の言葉を禁じる。

契約は完了し、ここに最強の主従が誕生する。

「わたしはイリヤよ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。よろしくね、アルトリア！」

「ええ、よろしくお願ひします。妖精のように麗しき我が主よ」

◇

一人の少女が齎した変化は止まらない。蝶の羽ばたきがやがて竜巻を起こすように、人々は嵐の中へ吞まれていく。

冬木市郊外にある森の中で鶏を絞め殺している少年もその一人。彼もこれから英霊召喚を行う腹積もりだ。

必死になって書き上げた論文を一笑に付した教師を見返す為、彼は偶然手に入れた聖遺物を手に日本までやって来た。

資料片手に鶏の血で召喚陣を描いている。

「完成つとー！」

ウェイバー・ベルベットは会心の笑みを浮かべて完成した召喚陣を見下ろした。

上出来だ。形に歪みは無く、綴りにミスもない。後は呪文を唱えるだけでいい。

既に五体のサーヴァントが召喚されている事も知らず、残されているクラスがキャスターやアサシン、バーサーカーという一癖も二癖も

「ハハッ。そんなに緊張しないでよ。僕はアレキサンダー。アレクサ
ンドロス3世でもいいよ。勿論、他の名前でも構わない。クラスは
征服者……、どうやらラインナップからは外れたクラスみたいだ」

魅惑的な微笑みを浮かべ、ウェイバーの手を握り締める。

「よろしくね、マスター」

「よ、よろしくお願ひします」

その声はまるで鈴の音のように甘く響く。ウェイバーは顔を真っ赤にして、何度も頷いた。

「ところで、一つお願ひがあるんだけど」

「な、なに？」

コンカラーは言った。

「イリアス、どこかいない？ どうしても読みたいんだ」

「それなら多分、図書館にでも行けば……」

「なら行こう！ よし行こう！ すぐに行こう！」

「え、って、まだ夜だぞ!？」

「イリアスが僕を待っている！」

ウェイバーの手を引っ張り、コンカラーは走り出す。目的地も知らず、ただただ真っ直ぐ走り続ける。

その先に何が待ち受けているかも考えず、万人を魅了する微笑みを浮かべながら――。

第四話 「正義の味方ツス！」

アーチャーが現世に召喚されてから早一週間。街はいたって平和だ。まだ、サーヴァントが出揃っていないのだろう。

今の彼には魔力を補給する手段が無い。霊体化して、魔力の消費を極力抑えるようにしているが、元の器が他の英霊達と比べて小さい為、大規模な戦闘を二回もこなせばストックが底をついてしまう。

故に取れる手段は限られている。情報を集め、必殺の瞬間を待ち、全ての敵を一撃で仕留める。それしかない。

《彼女もこんな気分だったのかな》

生前、彼は今と違う立場で聖杯戦争に挑んだ事がある。その頃は魔術師として、未熟者どころか素人に毛が生えた程度のものであった。ひよんな事からマスターになってしまい、召喚したサーヴァントはセイバー。見目麗しい少女だったが、その正体は伝承に名高き騎士の王、アーサー・ペンドラゴン。彼女も彼と同じようにマスターからの魔力供給を受ける事が出来ないまま戦いに身を投じた。

彼女の苦勞が今になって痛い程よく分かる。

《いや、オレは恵まれている方だな。少なくとも、藤ねえは自分から死に行ったりはしないし……》

思い付きで山籠りをしたり、いきなり大聖杯をぶっ壊そうと宣ったり、猪突猛進かと思いきや、藤村大河は現状を意外な程冷静に受け止めていた。間桐臓硯にても足も出なかつた事をキチンと認め、同じような超常の力を持つ相手に無策で飛び込む事は無謀でしかないと納得している。

若き日の彼とは大違いだ。彼も危険な事だと理解はしていた。けれど、納得は出来なかつた。自分から危地へ飛び込んだ事も一度や二度じゃない。その時のセイバーの心情を思うと頭を抱えたくなる。

《……そう言えば、この辺を一緒に歩いたな》

過去の記憶は守護者として過ごした長い年月の間に摩耗してしまった。それでも、意外と覚えている事も多い。

多くの人に助けってもらった癖に、殆どの人の顔に霧がかかっている

る。そんな人でなしでも、義父きりつぐの事やセイバーの事、義姉イリヤの事、後輩さくらの事、そして、藤ねえの事だけは鮮明に思い出せる。

彼はここで生まれ、ここで育った。高校卒業後は一度も戻る事の無かった故郷。ふとしたきっかけでついつい感慨に耽ひたってしまう。

《いかな。切り替えねば……》

切り捨てた過去に継つぐ事など許されぬ。それに、今は為すべき事に集中しなければいけない。

思い浮かべるのは主たる少女の顔。彼女に不幸な顔など似合わない。いつも幸せな笑顔を浮かべていて欲しい。その為にも思い出に浸ひたったり、後悔している暇などない。

《……しかし、妙だな》

聖杯戦争の開幕を待たずして、間桐臓硯の手の者が襲襲い掛かって来る事を懸念していたのだが、襲撃のないまま今に至る。

マスターの実家は冬木市に根を張る極道組織。その影響力を警戒しているのかもしれない。

《雷画の爺さんは変わらないな》

◇ 山から降りた直後の事を思い出して、思わず笑ってしまった。

大聖杯の眠る洞窟を後にして、山から降りた大河とアーチャーは真っ直ぐに藤村邸へ向かった。

隣接する武家屋敷が未だもぬけの殻である事に安堵しつつ中に入ると、いきなり怒声を浴びせられた。

いきなり山籠りをすると行って飛び出したおバカな孫娘に藤村雷画はまる一日掛けて説教をした。終わった頃には隣で霊体のまま聞いていたアーチャー共々グツタリとしてしまい、肝心な事を話せないまま一夜が過ぎた。

翌日になつて、大河が雷画を含む、藤村組の幹部を招集した。また、突飛な事を言い出すのではないかと身構えていた強面の男達に大河は山で起きた事を説明した。

「……とうとう、黄色い救急車を呼ぶ日が来たか」

沈痛な面持ちで雷画は言った。

「ちよつと!?!」

「冗談だ」

フシャーと立ち上がる大河に雷画は笑い掛けた。

「それより、アーチャーとやら。居るなら顔を見せろ。それが礼儀だろう?」

普通なら信じない与太話。それを雷画は当たり前のように受け入れた。他の幹部達の中には半信半疑だったり、懐疑的な目を向ける者もいるが、あからさまに嘘と決めつける者もない。

アーチャーは少しだけ迷った。彼らに真実を告げる事は大河が決めた事。アーチャーにしてみれば、一般人である彼らに魔術や神秘について教える事はいらぬ危険を招く可能性もあり、気が進まない。ここで姿を見せなければ大河の一人芝居という事で決着する筈だ。

「アーチャー」

大河はまっすぐにアーチャーを見つめた。その揺らぎのない瞳を見て、アーチャーは降参だとばかりに霊体化を解いた。

殆どの者が驚いたり、戸惑ったりしている中で、数人の幹部と雷画は顔色一つ変えずにアーチャーを見た。

「……失礼した。あまり、私の存在や魔術について、一般の者に説明する事は——」

「バカモン!!」

雷が落ちた。目を白黒させるアーチャーに雷画は言った。

「そんな事より先にする事があるだろう。俺の名前は藤村雷画。大河の祖父で、藤村組の組長をしている」

「あ、ああ。私はアーチャー。マスター……、タイガのサーヴァントだ」

一気に幼い日へ立ち戻ったような気分。雷画は多少の事なら目を瞑るが、筋の通らない事をした時は本気で怒る。

「アーチャー……か、そいつは本名か?」

アーチャーは顔を顰めた。

「違います。ただ、サーヴァントは基本的に——」

「事情があるなら、事情があるの一言でいい! 言い訳をしようとする」

るな！」

「……は、はい」

理不尽過ぎる物言いなのに、反論する事が出来ない。

幼き日に刻み込まれたトラウマが今尚彼に対して反抗的態度を取らせてくれない。取るつもりもないが……。

「……ふん、随分と素直だな。いい年した大人がそんなんでどうする!!」

「ええ……」

どうしろと言うんだ……。

「まあいい。それより、さっきの大河の話は本当なんだな？」

「え、ええ。全て、彼女の語った通りです」

「そうか……」

突然、雷画が立ち上がった。他の幹部達も一斉に立ち上がり、アーチャーを取り囲む。

不穏な空気を感じ、大河が口を開こうとした瞬間、彼らは一斉に頭を下げた。

「感謝するぞ、アーチャー。よくぞ、我が孫娘を救ってくれた」

「……あ」

大河は口をぽかんと開けたまま凍りついた。

「出来の悪い孫だが、それでも俺にとつては命より大切な宝だ。よくぞ……、よくぞッ！」

「あ、頭を上げてくれ。私を召喚したのは彼女だ。彼女は自らの力で窮地を乗り切っただけの事。私は従者として当然の事をしただけなんだ。だから——」

「……すまん」

顔を上げると、雷画は幹部達に幾つかの命令を下して追い出した。どうやら、アーチャーの為に食事の席を設けるつもりのようなのだ。

断るのも失礼だと感じ、アーチャーは素直に受け入れた。



あの後、雷画はアーチャーに聖杯戦争の事を詳しく聞いてきた。

魔術協会や聖堂教会の事にも触れ、決して軽はずみな真似をしない

ようにと言い含めておいたが、要らぬ世話だった。彼らも聖杯戦争そのものをどうにか出来るとは考えなかった。代わりに有事の際、民間人を避難させる為の段取りを組み始めた。魔術的な事は分からないにしても、長年街に根を張り続けてきた藤村組には街の人々からの信頼という魔術協会にも、聖堂教会にも無い強みがある。それを活かして、精一杯出来る事をしようとしている。

《彼らの為にも……なんて、青臭い事を考えているな》

全てに絶望した。この世に真の平和などなく、万人を救う奇跡などない事を知った。それでも突き進んだ果てに信念すら歪めた。

それでも、目の前に燦々と輝く太陽の光を曇らせたくないと思っ
てしまった。

彼女の前だけでは、惨めな姿を晒したくない。だから、この泡沫の如き儚い夢の間だけは若き日の理想に立ち返ろう。

正義の味方を名乗ろう。

《——ッ。どうやら、動き出したみたいだな》

少し離れた場所からあけすけなまでの殺気が放たれた。どうやら、無差別に挑発行為を行っているらしい。

アーチャーは口元を歪めた。

《さて、存分に手の内を見せてもらおうぞ》

誰が相手だろうと容赦はしない。彼女の期待に応えるべく、無関係な人々に犠牲が及ばぬよう、あらゆる手段を使い、お前達を殺し尽くす。

正義の味方らしく——。

第五話 「街の人達に大迷惑ツス！」

市街地から少し離れた港の倉庫街。そこに一人の男が立っている。朱と黄の槍を握り、彼は待ち人の来訪を今や遅しと待っている。張り詰めた空気の中、一迅の風が吹く。彼の無差別な挑発行為に乗った英雄の一人が颯爽と現れた。

浮かべる表情は共に——、笑顔。

「待ちかねたぞ。どいつもこいつも穴熊を決め込む臆病者ばかりかと不安になっていたところだ」

槍の英霊は高揚する心を宥め、眼前に現れた全身鎧フルプレートの騎士に熱い眼差しを向ける。

軽装の彼と比べて、物々しい程の重武装。策を弄するタイプではなく、明らかに【戦う者】。

「得物を取れ！ その間くらいは待ってやる！」

既に臨戦状態。一足で互いの懐に飛び込める距離。それでいて、全身鎧の騎士は無手のまま。

主人からは《今の内に攻撃せよ》という命令が下されているが、それは騎士道に反する行い。

誇り高き騎士の決闘は正々堂々で行われるべきだ。

「——戯け」

一拍を置いた後、全身鎧の騎士は無手のままでランサーの懐に飛び込んだ。

驚きは一瞬。意識するより早く、左手に握る槍を頭上に掲げる。そこに見えない何かがぶつかった。

ランサーは理解した。なんとという勘違い。敵は既に得物を取り、万全の態勢を整えていた。

咄嗟に右手の槍を振りかぶるが、突き出す前に腹を蹴られた。まるで大砲が直撃したかのような衝撃と共にランサーの体が吹き飛ぶ。

槍を地面に突き刺して制動を図るが、気付けば三百メートルも飛ばされていた。

「奴は——ッ」

赤き髪の少年の主が悲鳴を上げると、まるで示し合わせたかのように二騎は波の反対側へ回り込み、その波に向かって駆け出した。

「おいおいおいおいおいおいおいおい!?!」

高波を蹂躪し、尚も疾走する二頭の魔馬。

「陸地の近くで戦い続けるのはまずいみたいだね」

そう言つて、更に沖を目指していく。

——瞬間、天上から黄金の光が降り注いだ。

「な、な、な、なんだ!?!」

それを見て、英雄達も目を見開く。降り注ぐ無数の光。それは全て宝具の輝きだった。

天を見上げると、そこに天空を闊歩する騎士の姿があった。

黄金の鎧を身に纏い、黄金の双剣を握り、黄金の光を背負う黄金の英霊が彼らを見下している。

「小手調べだ。この試練、乗り越えてみせよ」

その言葉は雷霆と暴風が吹き荒れる中でも不思議と響き、彼らの耳に届いた。

そして、始まる。一つ一つが最高位の英霊すら一撃で沈黙させる程の膨大な力を持つ宝具。それが雨霰となって降り注ぐ。

彼らの馬は天空をも翔け抜ける事が出来る。だが、そのあまりの弾幕の厚さに空への退避を許されない。針の穴を抜けるような精密な動きで二頭は死の嵐の中を駆け抜ける。

些細なミスが即座に存在の消滅と結び付く。だと言うのに、彼らのスピードは些かも落ちない。音速を遥かに超えた超スピードで走り続ける。

そして、彼らは気付く。

「……誘導されてるね」

後ろで悲鳴を上げ続けている哀れな主を気にも留めず、赤毛の少年は眩いた。

数秒後、唐突に死の豪雨が止んだ時、彼らは共に元の倉庫街へ戻つて来ていた。

そこには全身鎧の騎士によって仕留められたかと思われていたラ

ンサーの姿もある。どうやら、致命傷を避けていたようだ。

彼らは皆、一様に天を見上げています。この場において、他の誰よりも警戒しなければいけない相手。無数の宝具を雨のように降らせた黄金の英霊の一举一動を警戒している。

「——ッフ」

空中に当たり前顔をして立つ黄金の騎士は三騎の英霊を見下ろし、満悦の笑みを浮かべた。

「この戦い自体は良い。実に良い趣向だ！」

彼は一人一人を見定めるように見つめる。

「二つの至宝を巡り、誉れ高き英雄同士が覇を競い合うとは……、実に素晴らしい！ 何故、生前に思いつく事が出来なかったのかと悔しく思う程だ。我は今、嘗て無い喜びに感動している！」

まるで少年のような笑みを浮かべ、彼は言った。

「古今東西、あらゆる時代、あらゆる国、あらゆる戦場から招かれし英雄達よ!! 出会わぬ筈の者同士が出会い、交わる筈の無かった剣戟を交わす事が出来るこの戦いはまさしく【奇跡】。戦おう。精根尽き果てるまで、己の全てを出し尽くして、戦おうではないか!!」

喜悦に表情を歪めながら、彼は双剣の柄同士をくつつけた。すると、双剣は形状を歪め、一張の弓に変わった。

「だが、臆病者や策を弄する事しか出来ない雑魚には用がない。故、期限を設ける」

光の矢を番える彼に地上のサーヴァント達は一斉に構えるが、矢の先を向けられた先は彼らのいる場所ではなく、冬木市の中心にある大橋だった。

「これは試練だ。この宝具は七日の後に街ごと貴様等を呑み込む。如何なる宝具、如何なる魔術を使っても、抗う事は出来ない」

それが事実だと、彼を見たマスター達は確信した。マスターに与えられるステータス看破の魔眼が教えてくるのだ。彼の弓が評価規格外という超弩級の宝具であると。

「この街や無碍なる民を守りたければ、聖杯で望みを叶えたければ、死にたくなければ挑むがいい。そして……、死ね」

静寂が満ちる。

誰も口を開かない。征服者も、その主も、二槍の騎士も、遠くから
見ている弓兵や復讐者も言葉を失っている。

七日以内にこの英霊を殺さなければ、街ごと全てが消えてなくなる。
あの無数の宝具や評価規格外というランクを見て、それが単なる
偽りだと思ふ者はいない。

挑まなければ死ぬ。だが、挑んだとしても——、
「そうか、ならば貴様から倒すでしょう」

誰もが思った。この英霊と戦う事は一筋縄ではいかない。

だが、その英雄は二の足を踏む他の英霊達を尻目に馬から降りると
空を見上げた。

そして——、

「……ほう、大した気骨だ」

空に浮かぶ黄金の騎士に斬りかかった。

そのまま、二騎の英霊は刃を交えたまま、倉庫街の外れまで飛んで
行く。

高速機動が出来ない飛行宝具を停止し、黄金の英霊は微笑みを浮か
べる。

「ライダー……いや、騎士王よ。いつまでも無粋な仮面など付けるな。
我を殺したければ、死力を尽くせ」

「抜かしたな、セイバー!!」

ライダーの仮面が割れ、その美貌を露わにした。獣の如く殺意を燃
やし、不可視の剣を振り上げる。

「……まだ、軽い!!」

一撃で大地を引き裂くライダーの一撃を双剣の片割れで受けて尚、
セイバーは不敵な笑みを崩さない。

「そうか！ ならば、重くしてやろう！」

魔力放出のスキルによって、ライダーの剣が一気に圧力を増した。
片方だけでは受け切れず、セイバーはもう片方の剣を交差させる。

「嬉しいぞ、ライダー！ よくぞ、この戦いに参戦してくれた！」

セイバーはライダーの剣を巧みに受け流すと、そのまま彼女の首を

狙う。

咄嗟に体ごと捻り回避するライダー。そこへセイバーの膝蹴りが飛ぶ。それを予期していたかの如く、ライダーは不可視の剣で防ぐ。「これはどうだ？」

セイバーの背後に揺らぎが生じる。黄金に輝く水面から、複数の宝具が顔を出し、ライダー目掛けて飛来する。

「無数の宝具……いや、それは蔵か？」

至近距離から音速を超えて飛んでくるAランクオーバーの宝具の嵐を捌きながら、ライダーは目を細める。

「御名答。これは世界がまだ一つだった時代、我が集めた至宝を収めた蔵よ」

「……なるほど。では、御身は——」

戦場を徐々に市街地へ近づけながら、二騎の激突は激しさを増していく。

「我は人類最古の英雄王、ギルガメッシュである!!」

遂に新都の繁華街へ到達してしまった二騎。

深夜とはいえ、会社で残業しているサラリーマンや24時間営業のコンビニで働くバイト、ビルの軒下で鼾を掻いていた浮浪者はその空前絶後の光景を目の当たりにする。

地面はおろか、ビルの壁や街灯すら足場に使い、縦横無尽に駆け回る人外同士の殺し合いは幸か不幸か無人だったビルを三棟崩壊させても止まらない。

「ライダー!!!」

「セイバー!!!」

殺意は極限まで膨れ上がり、互いの目には相手の事しか見えなくなった。

——その瞬間を狙撃手は見逃さなかった。

彼らの位置から数キロ離れた所でアーチャーのサーヴァントは一節の呪文を唱える。

「I am the bone of my sword.
手の内に生み出される螺旋の刃を持つ剣が細く、細く、歪んでいく。」

一本の矢の如く圧縮された剣を弦に番え、アーチャーはその真名を口にしました。

「カラドボルグⅡ偽・螺旋剣——ッ」

空間を振じ切りながら矢はセイバーとライダーの戦場へ向かう。

だが、飛来する宝具に対して、どちらの英霊も危機感を感じさせる表情を浮かべていない。

「不快な真似を……」

その宝具をライダーが叩き落とそうとする寸前、セイバーが押し留めた。

「待て、騎士王」

セイバーが矢に向けて手を伸ばすと、その先に七枚の花弁が広がった。

トロイア戦争の折、大英雄の投擲を防いだ最強の守り。その原典の前に螺旋の矢は動きを止める。その瞬間、光が迸り、花卉を大きく軋ませた。

宝具に内包されている神秘を一気に放出させるサーヴァントの奥の手。アーチャーが必殺を目論んだ一撃はセイバーの花弁たてを二枚散らせただけで終わった。

「——ふん、くだらん真似を」

既に姿を眩ませたアーチャーに一切の関心を持たず、セイバーはライダーを見つめる。

「興が削がれてしまったな」

残念そうに呟き、セイバーは双剣を背中の鞘に戻した。

だが、ライダーは動かない。一見隙だらけに見えるが、油断して襲いかかれば一瞬で勝負が決する。そう、彼女の直感が囁き続けているからだ。

「今宵は楽しかったぞ、騎士王。また、相見える時を楽しみにしている」

そう言って、セイバーは姿を消した。霊体化したわけではなく、完全に存在を眩ませた。

「……七日後か」

セイバーが宣言した超弩級宝具の発動期限、それは彼女にとっても意味のある数字だった。

「その時は我が宝具の真髄を披露してやろう」

彼女が召喚されて六日。七日後には十三日間が経過する。その時こそ、彼女の最強の切り札が覚醒する。

第六話 「遠坂さんの家も大変そうツス！」

通信用の魔術礼装から響く言峰璃正からの苦言を遠坂時臣は沈痛な面持ちで聞いていた。

発端は昨夜のサーヴァント戦。ランサーによる無差別な挑発行為から始まった一連の戦いは倉庫街のみならず、新都の繁華街やビル郡にも多大な被害を与えた。

目撃者の数も多く、戦闘終了と共に聖堂教会と魔術協会が揃って隠蔽活動に奔走する事になった。

『——港の倉庫街が全壊した事で、貿易会社はもちろん、小売業者や物流業者にも多大な損害が出た。それに、ビル三棟が崩壊した事で幾つかの大企業が独自に調査隊を送り込もうとしている。警察組織や自衛隊まで動き始めている始末だ』

どちらの組織も国の中枢深くに根を張っている。それでも、隠蔽が儘ならない程の被害が出てしまった。

その大部分の責任が時臣の召喚したサーヴァントに起因する。倉庫街はともかく、新都に被害を齎したのは他でもないセイバーだ。

『時臣君。これ以上は庇い切れん』

父の代から親しくしている恩人の言葉を時臣は重く受け止めた。

かの王の不興を買わぬ為に臣下の礼を示し、行動を縛る真似は一切しなかった。その結果がこのザマだ。

セイバーの力があれば、勝利は揺るがない。だが、魔術師として最低限守らなければならないルールを破る事は遠坂家の沽券にも関わ

る。
「……申し訳ありません。サーヴァントにはキツク言い含めておきますので」

『頼むぞ。この手で君を罰したくはない』

「お心添え、感謝致します」

通信を終え、時臣は眉間に皺を寄せながら令呪に視線を落とした。

三度に限り、サーヴァントに対して如何なる命令でも従わせる事が出来る絶対命令権。

これを使い、セイバーに戒めの鎖を付与する。恐らく、彼も反抗するだろうが、結局はサーヴァントだ。令呪には逆らえないし、マスターを失う事の危険性は熟知している筈。安易に裏切るような真似はしないだろう。

「——ほう、令呪を使う気か」

時臣は目を見開いた。

いったい、いつからそこに居たのか分からない。セイバーは部屋の壁に背を預け、愉しげな笑みを浮かべていた。

「遠慮する必要はない。使うがいい」

「……英雄王」

自害すら強要出来る令呪の発動はサーヴァントにとって不快な事である筈。にも関わらず、彼の表情には余裕がある。

時臣はゴクリと唾を飲み込むと、励起状態の令呪を鎮めた。

「なんだ、使わないのか？」

時臣は静かに頭を下げた。

「御無礼を働いた事、伏してお詫び申し上げます」

その言葉にセイバーは鼻を鳴らした。

「つまらん。お前は実につまらない男だ。確かに、我に令呪など効かん。三つ全てを使い潰したところで指一本の自由すら奪えん。だが、そのくらいの気骨を見せて欲しかった」

「申し訳ありません」

「責めてはいないぞ、時臣。ただ、つまらん。そう言ったただけだ」

セイバーは時臣から視線を外すと、わざわざ扉を開けて出て行った。

去り際に、

「お前の意を汲んで、暫しの間は大人しくしておいてやる」

そう言い残して……。

時臣は不思議と空虚な気分陥っていた。まるで、父親に見放された子供のような心境になり、体が震えた。

「……私は」

◇

一週間前――。

セイバーを召喚した翌日、時臣は彼に頭を下げた。

「どうか、御身の力をお貸し頂きたい」

大聖杯の下で行われた英霊召喚。その調査を行う為にはサーヴァントの対策が不可欠であり、サーヴァントに対抗する為にはサーヴァントの力が必要だった。

機嫌を損ねないよう、慎重に言葉を選びながら調査への協力を要請すると、セイバーはあつげなく引き受けてくれた。

「大聖杯……。この戦いのシステムの根幹には我も興味がある。それに召喚者の頼み事とあつては無碍にも出来ぬ。何処へなりとも連れて行くが良い。貴様の身の安全は我が保証しよう」

その頼もしい言葉の通り、セイバーは大聖杯へ向かう道中、片時も時臣の傍を離れず周囲を警戒した。思いがけず好意的な態度に時臣は内心で驚きつつも嬉しく思った。

サーヴァントを使役する上で一番警戒しなければいけない事は裏切りだ。過去、三度の戦いの中でも自身のサーヴァントに反逆され殺されたマスターがいた。

人類最古の王という主人への忠誠心から最も縁遠い存在を召喚すると決めた時点で信頼関係を築く事など不可能だと考えていた。

故にこれは嬉しい誤算というものだ。

「随分と面倒な場所にあるのだな……」

山道から外れ、獣道を進む最中、セイバーはぶつくさと文句を言い始めた。

「申し訳ありません。今、道を開きますので……」

「構わん。それよりも蟲共が騒がしいな」

そう呟くと、彼の背後に黄金の波紋が生じた。そこから一本の剣が姿を見せる。

「穢らわしい」

剣を振ると、どこからか罅割れた悲鳴が轟いた。

刀身に極大の呪詛を纏う剣は蟲共の主が伸ばす触手を断ち、そのラインを辿って侵食していき群体に死を振りまいた。

「……マキリの老獺か」

「さっさと行くぞ」

数百年を生きた妖怪を事も無げに殺したセイバーは足を止める時臣に声を掛けた。

「……ええ、参りましょう」

地下に降りると、その生暖かい空気にセイバーは顔を顰め、二人分の清浄な空気の泡を創り出した。

水中や宇宙空間でさえ快適に過ごす事を可能とする宝具に感嘆の声を上げる時臣。

長い道のりの中、セイバーは時臣の反応を楽しむ為に様々な宝具を展開した。

堅物を飛び上がる程驚かせたり、真っ青になる程怖がらせたり、面白い反応を引き出す為に湯水の如く宝具を使った。

おかげで洞窟内はサーヴァントですら迂闊に立ち入る事の出来ない異界が出来上がってしまった。

「……え、英雄王。帰り道は大丈夫なのですか……?」

背後には無数の眼球や触手が蠢いている。その向こう側には最高級の宝石で作られた彫刻や落ちたら二度と這い上がれない大迷宮への入り口だとか、とんでもない物がゴロゴロと転がっている。

「案ずるな。帰りはもつと面白い事をしてやる」

「……か、感謝致します」

明らかに浮かない顔をする時臣を見て、セイバーは実に楽しそうな笑みを浮かべた。

「さて、そろそろ見えてくる頃合いか?」

「ええ、その筈ですが……ッ」

唐突に空間が広がり、その先に聳え立つ黒い光の柱を見て、時臣は言葉を失った。

禍々しい呪いの渦。清廉である筈の大聖杯が異常をきたしていた。

「……っ、これは」

真っ先に思い浮かべたのはここで英霊召喚を行った何者かの事。

「一体、何を……」

その隣でセイバーは舌を打った。

「度し難い……」

セイバーは蔵から幾つかの宝具を取り出した。

「ど、どうされるおつもりですか？」

「知れたこと。折角の血沸き肉踊る戦いの舞台に無粋な要素など要らぬ」

セイバーの目は大聖杯に起きている現象の正体を完璧に看破していた。

「まさか、破壊するつもりですか!？」

「戯け、それでは折角の戦いが始まる前に終わってしまうではないか。そうではない。それに、このままではお前の願いも叶わぬだろう」

そう言つて、セイバーは次々に宝具を展開した。

「コレの中では紛い物とはいえ、魔王が胎動している。それが聖杯を穢しているものの正体だ」

「魔王……?」

「この世全ての悪だ」

「……それはゾロアスター教の?」

「その紛い物だ。だが、紛い物なりに本物になろうとした結果、人類数十億を殺す呪いの塊に変化したようだ。まったく、人間という輩はいつの時代も変わらん。見たくないモノからは目を背け、背負いたくないモノは他者に押し付ける。どこまでも我侷な生き物よ」

蔑むようにセイバーは暗黒の柱の先を見つめる。

「その果てがコレだ。哀れなものよ。そうあれと望まれ、成った後は疎まれる」

暗黒の柱の中でナニカが悲鳴をあげた。

「この聖杯戦争に感謝する事だな、アンリ・マユよ。貴様の前には王がいる。我が人類の欲望を律してやる」

世界がまだ、一つだった時代。神々は人間という種を律する為の装置を創り出した。

人は弱い。自らの欲望さえ支配する事が出来ず、ふとした切っ掛けで同族すら殺す。

自己の幸福を願いながら、他者に不幸を押し付ける。だから、彼は君臨したのだ。人類最古の王として――。」「眠るがいい、悪性を望まれた者よ。この我が許す」暗黒の柱に黄金の光が広がっていく。禍々しさは神聖な輝きによつて払拭され、洞窟内を清浄な空気が満ちた。本来の機能を取り戻した聖杯を前に時臣は立ち尽くした。聖杯に干渉する事など、現代の魔術師には不可能な芸当だ。それを事も無げに……。

◆ 彼は律する側の者だ。令呪が効かぬ事など想定の内。それでも時臣にはソレしかなかった。縋っていた。

何もしなくても勝利が転がり込んでくる。それを見越して英雄王を召喚した筈なのに、まるで激流の中を流され続けているような現状に虚脱感を覚えている。

長年の研鑽も、代々伝わる魔術も、定石を踏まえて練った作戦すら必要とされない。

偉大なる王に必要とされない。挙句、つまらないと失望された。

まるで、子供が憧れのヒーローから侮蔑の視線を向けられたかのように時臣の心は苛まされた。

人は光を求めずには要られない。一度英雄王の輝きに目を奪われた者は逃れる事など出来ない。

「――私はッ」

時臣は扉を開いた。廊下の向こうに王の背中が見える。彼は立ち止まり、時臣の言葉を待った。

「セイバー!!」

「なんだ?」

「この戦いは私の戦いだ」

「それで?」

「これ以上、勝手な真似は許さない。戦いたいと言うのなら、戦いの場は私が用意する!」

「……そうか」

セイバーは振り向いた。そこにさつきまでの失望の色はない。
ただ、満足気な笑みを浮かべていた。

「ならば、期待しているぞ。我に相応しい決戦の舞台を用意せよ」

そう言つて、姿を晦ますセイバーに時臣は言った。

「おまかせを……」

第七話 「間桐さんの家はもつと大変な事になってたッス！」

血に塗れた男が歩いている。背中には男と少女。血は彼らのものだ。

数十分程前、突然二人の身に異変が起きた。体全体に奇妙なへこみが生まれ、夥しい量の血を吐いた。

「……私には手に負えぬ」

間桐雁夜と間桐桜の体内には間桐臓硯の眷属である蟲が入り込み、肉体と同化していた。その蟲が一斉に消滅したのだ。湖の乙女に魔術の手解きを受け、多少の心得はあるものの、ここまで肉体が欠損しては手の施しようがない。おまけにマスターである雁夜の魔術回路は完全に機能を失っていて、彼への魔力供給も止まっている。このままではいずれ消滅するだろう。そうなれば、二人の命が尽きてしまう。未だに命を繋ぎ留めていられるのも彼が常に治癒魔術をかけて続けているからだ。時間がない。彼に出来る事は一つだった。

新都の高台に位置する教会の前で彼は二人を降ろす。しばらく待つと、中から初老の男性が顔を出した。

「——よもや、サーヴァントがここを訪れるとはな」

深いシワの刻まれた顔を強張らせながら、言峰璃正は地面に転がる二人を見た。

「彼らは？」

「私のマスターとその庇護下にある娘だ」

「アヴェンジャーは地面に跪いた。」

「どうか、彼らを救って欲しい」

その言葉に璃正神父は言葉を失う。

言峰教会は聖杯戦争を監督する為に聖堂教会によって建てられた。その役目の一つに脱落したマスターの保護という名目も確かにある。だが、実際に教会を利用した者は未だ嘗て一人もいない。

しかも、サーヴァントが保護を求めるなど前代未聞。

「……それは出来ない。教会が保護する者はあくまでも聖杯戦争から脱落したものに限られる」

「ならば、この場で自害する。だから、どうか！」

彼は復讐者アヴェンジャーという忌まわしいクラスを得てまで現界した。それは叶えるべき願いがあるからだ。

それでも、彼は騎士だった。雁夜から召喚に至るまでの事情を聞き、桜の身に起きた悲劇を知り、その二人が何も為せぬまま死ぬ事を容認出来るほどの残忍さは持ち合わせていなかった。二人をこのまま死なせるくらいなら、己の願いなどどうでもいい。この仮初の命を捧げる事も厭わない。

必死に頭を地面に擦り付ける彼を見て、璃正は唸り声をあげた。

「……君が自害したとしても、二人を救う事は出来ない」

「何故……？」

「手の施しようがないからだ。むしろ、彼らは何故生きている？ 素人目にも死体にしか見えない。特に男の方は死後数ヶ月と言われても信じてしまう程だ」

言峰璃正も英霊という超越者が命を捧げてまで懇願する助命の言葉が無碍にたくはなかった。だが、聖堂教会の秘跡は肉体を救うものではなく、魂を救うためのもの。ここまで損壊した肉体を修復する事など不可能だ。

「……頼む。他に頼れる者がいないのだ」

「頼むと言われてもな……」

困り果てた表情を浮かべる璃正にアヴェンジャーはゆっくりと立ち上がった。

「……分かった。すまないな、迷惑をかけた」

他にあてなど無い。だが、ここに居ても二人を救う事は出来ない。

この上は他のサーヴァントと接触し、助命を請う他ないが……。

「——待て、マキリのサーヴァント」

マキリという言葉に覚えはないが、サーヴァントはこの場に彼一人。振り返ると、カソックに身を包む年若い青年が立っていた。

「綺礼……？」

綺礼はアヴェンジャーの足元に転がる雁夜の体に手を当てた。

「……なるほど、これは重症だ。だが、多少の延命措置ならば取れる」
「本当か!？」

綺礼は慈愛に満ちた微笑みを浮かべ、頷いた。

「私の部屋に連れて行こう。そこで処置を施す」

そう言うと、綺礼は雁夜の体を持ち上げて教会の方に戻っていく。

「ま、待て、綺礼!」

「どうしました?」

慌てて呼び止める璃正。綺礼は立ち止まり、首だけを彼に向けた。

「そ、その者はまだ脱落したわけではない。今、教会の中に入れるわけには……」

「父上」

綺礼は聖杯戦争のルールと倫理感の狭間で揺れている父親に微笑みかける。

「まだ、サーヴァントは出揃っていません。正式にスタートした後ならばともかく、今の段階でそこまで厳しい対応をする必要は無いのでは?」

「……一部の例外を認めれば、監督役としての地位の失墜にも繋がる。それは聖杯戦争に混乱を招きかねん」

「それでも、私には目の前で傷つく者を、そして、その者の為に頭を下げる者を無碍に扱う事は出来ません。ルールよりも尊ぶべきものは人としての倫理や道徳であるべきではありませんか? それが主の教えでもある筈です」

その慈悲に満ちた言葉に璃正は唸る。聖杯戦争のルールを監督役が破れば、参加者達を律する事も出来なくなる。それは聖杯戦争による被害の拡大を招く可能性がある。

そうなれば、数え切れぬ程の犠牲者が出る事だろう。

息子の真つ当な主張を聞き入れてやりたい。だが、それは後の悲劇を容認する事になる。そんな事は許されない。

「……駄目だ」

「そうですか……。では、こうしましょう」

綺礼は遠くにある新都のホテルを指差した。

「教会キョウを使わなければいい。ホテルの一室を借り、そこで治療しましょう。少し待っていてくれ、サーヴァント。今、車を取ってくる」

「お、おい、綺礼！」

「父上。人を助けない理由を考えるより、人を助ける方法を考える方が素敵だとは思いませんか？」

その言葉に璃正は何も返す事が出来なかった。

「……【われわれはみな汚れた人のようになり、われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである。われわれはみな木の葉のように枯れ、われわれの不義は風のようにわれわれを吹き去る】」

イザヤ書第64章6節にある言葉。その意味は義のありか。正しい事をしたからといって、義は得られない。義は主の内にあり、人は自然によつて義となる事は叶わず、主が人を義とするのだ。

璃正は自らの考えを誤りだとは思わない。だが、同時に綺礼の考えも正しいものだと感じている。

ならば、義はどちらにある？ その応えなど、ちつぽけな人間風情には分からない。ならば、主に委ねる他はない。

「——さあ、後部座席に二人を」

車を取ってきた息子に璃正は言った。

「……ホテルの部屋は取っておく」

「お願いします、父上」

車を走らせる事数十分。アヴェンジャーは自らの消滅が近い事を感じていた。

「もう少し耐えろ」

「……ああ」

ホテルの駐車場にたどり着くと、アヴェンジャーは隠蔽の魔術を自身に施した。

綺礼がルームキーを受け取り、部屋に到着すると二人をベッドに寝かせた。

「……さて、まずは間桐雁夜の方からだな」

それは実に奇妙な光景だった。綺礼の手が雁夜の体内に沈んでい

く。

「驚いたな。霊媒治療の心得があるのか……」

霊体を繕う事で肉体を治療する特殊な魔術によって、雁夜の表情は劇的によくなった。

「……魔術回路の修復は不可能だが、君に魔力を供給するラインの修繕程度ならば可能だろう」

言葉通り、少し経つとアヴェンジャーは雁夜から魔力を供給され始めた。

「見事な腕だ……だが、大丈夫なのか？ 今の状態で私に魔力を送るなど……」

「そこまで大きな問題はない。そもそも、彼は彼女から送られてくる魔力を君に送っているだけのパイプ役に過ぎないからな」

雁夜の施術が終わると、綺礼は直ぐに桜の施術へ移った。

陽が昇り、その陽が落ち、再び昇った頃、ようやく二人の施術は完了した。

「——私に出来る事はやった。当面は大丈夫な筈だ」

「かたじけない!!」

アヴェンジャーは涙を流した。綺礼が見ず知らずの筈の二人を救う姿、寝る間も惜しむその献身振りに感動していた。

「……では、約定通り私は」

自害するつもりで自らの愛剣を取り出すアヴェンジャー。すると、綺礼はその手を掴んだ。

「愚かな真似は止せ、アヴェンジャー」

「し、しかし、それが約定であつた筈……」

「それは父上との話だろう。私には関係の無い事だ」

綺礼は言った。

「勘違いをするな。彼らはまだ助かったわけではない。肉体の損傷がある程度修復する事は出来た。だが、命の危険が遠ざかったわけではない」

その言葉通り、施術が終わつたというのに二人が目を覚ます様子はない。

「どういう事……、ですか？」

「二命を取り留めたに過ぎないという事だ。だが、彼等の肉体と魂は常人と比べてあまりにも脆い。これ以上手を加える事は出来ない。彼等を救うにはそれこそ……、神せいはいの奇跡きはいに頼る他ないのだ」

アヴェンジャーは綺礼の言葉に目を見開いた。

「……私が救った者を死なせてくれるなよ、サー・ランスロット」

アヴェンジャーは頭を垂れた。

「感謝……、致します」



それが一週間程前の事。その後、アヴェンジャーは屋敷の地下に二人を連れ帰った。

「マスター……。そして、サクラ。待っていて欲しい。私が聖杯を手に入れる……。その時を」

誓いをここに……。

聖者によつて齎された奇跡を無駄にはしない。必ず、この哀れな者達を救ってみせる。

例え、如何なる者が相手であつても負けるわけにはいかない。

それが無数の宝具を持つ謎多き英霊であろうと、それが嘗て仕えた王であろうと……。

第八話 「なんだか怖いツス！」

拠点である郊外の森に聳え立つ城に戻ったライダーは弾丸と化した自らのマスターを受け止め、抱きかかえた。

「おかえり、ライダー！」

「ただいまもどりました、マスター」

雪のように白い髪。ルビーのような真紅の瞳。妖精のような愛らしい顔立ち。彼女がライダーのマスターだ。名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

イリヤスフィールはライダーの返事が気に入らず、プクーツと頬を膨らませた。

「マスターじゃないよ！ イリヤはイリヤだよ！」

そんな愛らしい仕草にライダーは負けを認める。

「申し訳ありません、イリヤ。どうか、機嫌を直して欲しい」

「じゃあ、お馬さんになって！」

「仰せのままに」

ライダーは四つん這いになると、イリヤを乗せて歩き出した。

「はいよー、ラムレイ！」

「ヒヒーン！」

この可愛らしいマスターをライダーがアインツベルンの城から攫ったのが数日前の事……。

◇

イリヤがサーヴァントを召喚した後、アインツベルンは大騒ぎになった。

彼女の両親やアインツベルンの当主は揃って令呪を捨てると迫った。父親にサーヴァントを預け、大人しくしている、と。

「イヤー！ イヤったらイヤ！ ライダーはわたしのライダーなの！ キリツグにもあげないの！」

だが、イリヤは譲らなかつた。自分のモノを誰にも渡したくないという幼子にありがちな我侷を口にした。

そして、他ならぬライダー自身がイリヤの主張を認めた。

「その通りだ。私のマスターは彼女であり、お前達ではない」

アハト翁はやむなくホムンクルス達にライダーの制圧を命じた。ライダーさえ大人しくなれば、後はどうとでもなる。そう考えた。

だが、サーヴァントにも比肩する力を持つ筈のホムンクルス達が束になってもライダーには敵わなかった。いや、敵にすらならなかった。

大聖杯冬木市から遠く離れた異国の地ではまともに供給を受ける事も出来ず、マスターからの供給だけでは現界を維持する事がやっとな筈にも関わらず、ライダーは十全に力を発揮した。

ライダーの内には竜の炉心と呼ばれる特殊な臓器がある。それは少量の魔力でも莫大な力を生み出す事が可能な魔力の増幅装置。それにイリヤの莫大な魔力が流れこむ事で現界はおろか、宝具の発動すら可能とした。

加えて、本来サーヴァントに貶められた英霊の力は大幅に劣化する筈なのだが、ライダーは通常よりも劣化が抑えられていた。

彼女の知名度が最も高い欧州で召喚されたからなのか、召喚者がイリヤ聖杯スフィールだったからなのか、召喚時に莫大な魔力を注ぎ込まれたからなのか、明確な理由は分からない。

一つだけ、確かに言える事がある。それはアハト翁にとって完全な誤算であった事。

複数の強力な宝具を持つ事自体は彼にとっても喜ばしい事だったが、だが、彼女にはそれらの宝具と比較しても遜色のない強力なスキルがあった。

それが《死者行軍》。

ライダーは死者の霊や精霊を操る事が出来る。精霊としての側面を持つホムンクルスも例外ではなく、彼女達は一斉に彼女に傳いた。

その光景を見て、アハト翁は愕然となる。自らが鑄造した者達ホムンクルスが手元から離れていく。まるで、真に忠誠を誓うべき王を見つけたかのように……。

「さて、行きましようか、マスター」

「うん！ つて、どこにっ？」

「我々の戦場へ」

彼女は無数のホムンクルス達を引き連れて歩き出した。

「ま、待て、お前達！」

アハト翁の叫びに耳を貸す者は一人もいない。鑄造中のホムンクルスと融合しようとしていた自然霊や廃棄された筈の者達もその軍勢に加わろうとしている。

「——待て！」

その行軍を止めたのは彼女のマスターの父親だった。

「何か用か？」

「イリヤを連れては行かせない！」

そう言つて、銃を構える姿は滑稽以外のなにものでもない。

「それでは私に傷ひとつつける事は出来んぞ、メイガス魔術師」

「……僕はその子の父親だ」

ライダーはおおまかに状況を理解していた。本来、召喚を行う筈だったのは目の前の男であり、イリヤがマスターになつてしまった事は手違いである事を。

それでも、一度契約を結んだ以上、他の者に仕える気はない。

「そこを退け」

「退かない！」

睨み合う二人。その間に挟まれたイリヤは泣いてしまった。

怖かったのだ。いつもと違う父親の顔、穏やかに接してくれたライ

ダーの苛立つ顔が……。

何者も泣く子と地頭には勝てない。なんとかあやそうとするが、口々に子供の世話をした事がないライダーには難しかった。

そこに一人の女が現れる。イリヤとそっくりな顔立ちの女がイリヤを抱きかかえ、頭を撫でた。

「大丈夫。大丈夫よ、イリヤ。怖くない。なーんにも、怖くない」

すると、イリヤの涙は引っ込んだ。母親に抱きつき、切嗣とライダーを睨む。

「二人共怖い顔イヤ！」

「うっ……、すまない」

「わ、悪かったよ、イリヤ」

揃って頭を下げる二人にイリヤは憤慨した様子のみまだ。

「……えっと、とりあえず落ち着かない？ イリヤも、切嗣も、ライダーも。ほら、お茶でも飲みましょう」

イリヤの母、アイリスフィールの提案に二人は渋々頷いた。

ライダー達が話し合いをしている最中、アハト翁はホムンクルス達への命令権を奪い返そうと画策したが、悉く失敗し、その果てに地下室で幽閉されてしまった。

その事をライダー以外が知らぬまま、話は進んでいく。

イリヤとライダーを説得する為に切嗣は賢明に言葉を重ねた。彼のこれまでの人生の中でこれほど多くの言葉を喋った記憶はない。それ程、必死だった。

「イリヤは魔術の事を何も知らない。戦いに参加する事は——」

だが、イリヤはいつの間にか眠ってしまい、聞いていたライダーの表情も冷め切っていた。

言葉が尽きてきた頃を見計らい、ライダーは言う。

「言いたい事はそれだけか？」

「なっ……」

気付けば夜が明けていた。数時間にも及ぶ説得は何の成果も挙げられなかった。

ライダーはイリヤ以外の主を持つ気などなく、目を覚ましたイリヤも切嗣とアイリスフィールが何を言っても譲らない。

その後も切嗣の怒声が何度も響き、最後には涙を流して懇願までした。それでも、二人の意思は少しも揺らがなかった。

「話がそれだけなら、私達は行く」

「ま、待ってくれ!!」

娘を連れ去ろうとする女に切嗣を縋った。

「……キリツグとやら。貴殿がマスターの身を案じる気持ちは分かった。ならば、ついて来るがいい。元よりマスターには傷一つ負わせる気など無いが、それならば安心出来よう」

結局、マスター権はイリヤが維持したまま、ライダー達は冬木に

入った。冬の城の地下に当主を置き去りにしたまま……。

◆ 今、この城にはアインツベルンの城から連れて来たホムンクルス達が跋扈している。ライダーの命令を受け、ホムンクルス達は独自に動いて日本までやって来た。

他にも現地コトに到着するまでの間に引き入れた亡霊達も蠢いている。

「あつ、サムライだ！ おーい、サムライ！」

「おや、これはこれは。相変わらず、仲睦まじい事で」

藍色の陣羽織を羽織った美剣士が《幼子を背中に乗せて四つん這いになってる主人》に些かの動揺も見せず挨拶をした。

「なかむつまじいって？」

「仲良しという事だ」

サムライの言葉にイリヤは顔を輝かせた。

「そうなんだよ！ イリヤとライダーは仲良しなの！ ねー！」

天真爛漫なマスターの笑顔にライダーも笑顔で応える。その姿に侍は目を細めた。

なんと…… ■ ■ ■ 光景だ。

「では、私はこの辺で失礼する」

「バイバーイ！」

ライダー
馬に跨がりながら手を振るイリヤに侍は手を振り返した。

「……くわばらくわばら。さて、仕事をするか」

第九話 「こ、これってデートツスか？」

昨夜の戦いで七騎中の四騎を捕捉する事が出来たが、アーチャーの顔色は芳しくなかった。彼は解析の魔術によって彼等の正体を正確に見破っていた。それ故に絶望的な気分に陥っている。

特にセイバーとライダーは最悪だ。

『……見た目は違うが、あれは間違いなく英雄王ギルガメッシュと騎士王アルトリアだ。しかも、明らかに私が知る彼等よりも強い』

生前体験した聖杯戦争で彼は彼等と出会っている。片や敵として、片や相棒として戦った。

ギルガメッシュにあそこまでの武勇は無かった筈。無数の宝具を繰り出す王ゲート・オブ・バビロンの財宝や世界を引き裂く乖離剣エニアだけでも厄介だと言うのに、唯一欠けていた白兵戦能力まで有しているととなると手がつけられない。

アルトリアにしても、宝具は聖エクスカリバー剣と風王結界インビジブル・エアだけの筈。それがライダーとして現界した為か、騎乗宝具ラムレインまで持ち出している。それに召喚の触媒に使われた聖剣アヴァロンの鞘もある筈だ。破壊力抜群の大軍宝具に抜群の機動力、更に究極の絶対防御まで持っている。

『どうしろと言うんだ……ッ！ ランサーとあの赤髪のサーヴァントだけならやりようもあるが……。あの二人に関してはお手上げだ』

英霊となった今でも彼等との実力は天と地ほどもある。必殺を見込んだ偽カラドボルグII・螺旋剣も完璧に防がれてしまった。あれ以上の高火力となると、それこそ彼女アルトリアの聖剣を持ち出すほかないが、ただでさえ消滅覚悟で挑まねばならぬ上、今の魔力供給を受けられない状態では生成途中で力尽きてしまう。

かくなる上はマスターを狙うしかないが、それも容易では無からう。

出来れば潰し合ってくれと助かる。幸い、アルトリアはギルガメッシュの暴虐を食い止めようと動いてくれそうだ。そこで上手いこと事を運べば……。

『……しかし、大きかったな』

彼の知る彼女はもう少し慎ましやかな体つきだった。

『つて、何を考えているんだ！ ええい、煩惱退散！ そうだ、セイバーはあの体つきだからいいんじゃないか！ ボンキュツボンなセイバーなど……つて、いやいや』

あの体つきは衝撃的過ぎた。一体、何があつたらあなるのかさっぱり分からない。そもそも、アルトリアは聖剣を抜いた日から成長が止まっている筈。

あんなナイスバディーになれるわけがない。

『偽物か！ ……いや、エクスカリバーにアヴァロンにラムレイ持つてて偽物は無いか』

アーチャーがけしからんわがままボディで登場したアルトリアの事で悶々としてしていると、マスターの声が聞こえてきた。どうやら、彼を呼んでいるようだ。

「———どうした、タイガ」

「あ、いたいた！ 実は必要な物があつて買い物に行かなくちゃいけないくて……」

今、二人は藤村雷画が所有する物件の一つに身を寄せている。藤村組を極力巻き込まない為だ。

新都の少し外れにある一軒家で、生活に必要な物は揃えられていた筈。

「そのくらいなら私が買ってくる。今、街は非常に危険な状態なんだ。君を無闇に外出させるわけにはいかない」

「で、でも……」

何故か、大河は顔を赤らめた。

「どうしたんだ？ まさか、風邪か!? そ、それはいけない。今直ぐベッドに———」

「ああいや、違うツス。あの……その……」

歯切れの悪い大河にアーチャーは首を傾げた。

「風邪じゃないならどうしたんだ？」

「あーもう、ニブチン！」

大河はぼそぼそと小声で買いに行く品の名称を口にした。途端、

アーチャーの顔も真っ赤になった。

そして、真っ白になった。

「あ……そ、そうだな。必要だな。う、うん、仕方無いな」

女性の体質上避けようのない事態だ。だが、家族同然の女性のそういう部分をあまり知りたくなかった。いや、使っているに決まっているのだが、想像出来なかった。

「さすがにアーチャーにもどれを買えばいいかとかは……」

「分かる筈ないだろ!!」

家事全般をつつがなくこなすアーチャーにも出来ない事や知らない事は山程ある。

「……分かった、商店街に行こう。だが、くれぐれも用心してくれ。薬局……、でいいのか？」

「……ツス」



徒歩十分の場所にある出来たばかりのデパートを二人は歩いていく。

瞬時に対応が出来るよう、アーチャーも実体化した状態だ。長身かつ、白髪かつ、褐色の肌。目立つ事この上ない容貌のアーチャーに道行く人々の視線が突き刺さる。

「……ううむ、そこまで私の顔は変なのか？」

「変というか……、変わってるのは間違いないツスね」

「……それを変というのだよ、マスター」

ガツクリと肩を落とすアーチャーに大河は苦笑いを浮かべる。

「でも、かつこいと思うツスよ？」

「え？」

ちよつと嬉しそうなアーチャー。

「なんとというか、ホストみたいで！」

「ホ、ホスト？」

さつきよりも更に落ち込むアーチャー。

「……はやく、家に帰ろう」

若干、泣きそうな顔で言うアーチャー。

「えつと……、ほら、元気出して欲しいなー！　そ、そうだ！　美味しいパフェのお店があるの！　そこ行ってみないツスか？」

うなだれるアーチャーの背中を押しながら大河は言った。

「い、いや、君の安全の為に寄り道をしている暇は……」

「甘いもの食べて、嫌なこと忘れるツスよ！　ホラホラ！」

大河がアーチャーを連れ込んだのは今女性誌で話題沸騰中の人気カフェテリア。甘くて美味しいパフェが特徴のお店。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「二人でお願いします！」

席に案内されると、大河は自分とアーチャーの分のパフェを注文した。

「……君はいつも強引だな」

「えー、そうツスか？」

本当に変わらない。悩んだり、困ったり、悲しんだりしている時、彼女はいつも強引に立ち直らせる。

「なんか、アーチャーの中のわたしって、大分失礼なイメージが固まってるないツスか？」

ジトつとした目で見られ、アーチャーは誤魔化すように咳払いをした。

「さて、何のことやら」

「あー、あからさまに誤魔化して！」

騒いでいると、店員がパフェを運んできた。

大河は何故かパフェよりも店員に視線を送っている。

「あー、やっぱり藤村じゃん！」

「オ、オトコ!？」

ポカンという音と共に大河の頭に大きなコブが出来上がった。

「次、そう呼んだら殴るからね？　ネコ！　私は蛍塚ネコ！　ドウーユーアンダースタン？」

「殴ってるじゃん……、既に！」

アーチャーは彼女に見覚えがある気がした。遠い昔、会ったことがあるような……。

「それで、そっちのハンサムは誰なの？ 彼氏？」

「ち、違うわよ！ こ、この人はアーチャーって言って、それでえっと、うちで一緒に暮らしてるだけのアレなの！」

「同棲してんの!？」

「ち、ちが……わないけど、違うよ！」

「違わないじゃん！ うわー、零くんが泣くぞ、これは……」

「もう、違うって言ってるでしょ！ このトンチンカン！」

「ト、トンチンカン？」

段々、大河がヒートアップし始めた。ネコの方もまずいと感じたらしく、宥めようとするがうまくいかない。

「もう、怒った！ おもてに出ろい！」

「あー……ちよつと、待て、タイガ」

立ち上がろうとするタイガの腕を掴み、アーチャーは咳払いをした。

「喧嘩はよくないな。友達なんだろう？ 仲良くするべきだ」

内心、苦笑しながらアーチャーは大河を諭した。

昔、同じ事をそっくりそのまま彼女に言われた事がある。クラスメイトと喧嘩した時の事だ。

《士郎！ 喧嘩はダメよ。友達なんですよ？ 仲良くしなきゃ！》

大河は言葉を詰まらせると、渋々椅子に座り直した。

その様子にネコは感心した様子を見せる。

「……あー、うん。からかって悪かったね、藤村」

「もういいよ……。それより、どうしてネコはこんな所でバイトしてるの？ お店は？」

「今日は定休日。だから、知り合いの手伝いしてんのよ。っていうか、あんたこそ、こんな時間にこんな場所に居ていいわけ？ 学校は？」

「へへーん。今は長期休暇中です。ちよつと前まで同じ学校通ってたんだから分かるでしょ？」

「そーだった、そーだった！ いやー、学校辞めてそんなに経ってない筈なんだけど、忘れてるもんだねー」

話の花が咲き始めた頃、店長がゴホンと咳払いをした。

「あ、いっけね。仕事に戻るわ。ゆつくりしていきなよ、藤村。それから、えつと……、アーチャーさん？」

「ああ、ありがとう」

二人の会話を聞いている内にアーチャーは彼女の事を臆げながら思い出した。

確か、彼女の実家は酒屋だった筈だ。そこで彼はバイトをしていた。

色々世話になった筈なのに忘れていた事を申し訳なく思う。大河とは学生時代からの親友同士で、急性アルコール中毒か何かを起したとかで自主退学したそうだ。

「うう……、なんかごめんなさい。もう、ネコのヤツ……」

「いや、構わないさ。それにしても、普段の君はそう喋るんだな」

召喚された時から今に至るまで、彼女はいつも語尾に「ツス」という言葉をつけている。可愛らしいが、どうにも違和感がある。

「いや、アーチャーは一応年上なわけだし……」

敬語のつもりだったのか……。アーチャーは少し驚いた。

「別に気にする必要はない。君が喋り易い口調で喋ってくればそれでいいさ」

「……そ、そう？ わかった！ じゃあ、普通に話すね」

ネコの置いていったパフェを食べながら、アーチャーは大河から色々な話を聞いた。

聖杯戦争とは全く関係の無い、学校での生活や友達との事を……。

彼の知らない藤村大河を教えてもらった。

思いがけずのんびりとした時間を過ごした二人がカフェテリアを出た頃にはすっかり空が茜色に染まっていた。

「いかな。暗くなる前に帰ろう」

アーチャーは大河の手を引いて歩き出した。すると、近くのゲームショップの扉が開き、中から一人の少年が出てきた。

「———ったく、どうして僕がこんな使いつ走りみたいな事を……。しかも、ゲームだなんて、くだらない」

その少年を見た途端、アーチャーは険しい表情を浮かべた。少年の

方も急に目を見開き、アーチャーを見た。

「サ、サーヴァント……?」

「え? どうして、その事を……」

アーチャーは咄嗟に大河を背中に隠した。

「……マスター。敵が現れた」

第十話 「バカだ！ バカがいるツス！」

どちらも動くことが出来なかった。夕暮れ時とはいえ、周囲には大勢の人がいる。アーチャーの見た目と緊迫した雰囲気につられて徐々に増えてきてさえいる。

「なになに、女の子の取り合い？」

「うっわー、どっちも外国人？」

「あつちの人、カッコいい！」

「えー、白髪じゃん。結構歳かもよ？」

「えっ、あの女の子、どう見ても高校生くらいよね？ つ、通報するベキ？」

「あつちの子、結構可愛くない？」

「女の子みたい！」

「あれって、藤村さんじゃない？」

「嘘でしょ。あの冬木の虎に彼氏!？」

気が付けば人だかりが出来上がっていた。

「お、おい……」

少年は意を決した様子で口を開いた。

「場所を移さないか？」

「……そうだな」

アーチャーもその意見に賛成だった。このままでは戦う云々以前の問題だ。どうやら、タイガの事を知っている者も居るらしく、このままでは情報が駄々漏れだ。

だが、一つ問題がある。

「……取り囲まれているな」

取り巻きの殆どが女性で、色恋沙汰に色めき立っている。これでは身動きが取れない。なんという食いつきの良さ。まるでピラニアだ。

というか、通報しないで欲しい。アーチャーは切に願った。曲がりなりにもサーヴァントが警察に捕まるなどあってはならない。他のサーヴァント達に示しがない。

「——ほう、こんな場所にサーヴァントがいるとはな」

突然、頭上から降り注いだ声に少年はビクリと体を震わせた。その声に聞き覚えがあったからだ。

だが、すぐに首を傾げた。ここはデパート。別に吹き抜けではなく、少し高いとはいえ、頭上には普通に天井がある筈だ。

「ん？ んん!？」

声の方に顔を向けると、何故か神輿に乗ったセイバーがいた。

「……………え？」

「え、神輿？ え？」

アーチャーとタイガも目の前で起きている事に理解が追いつかない。

野次馬根性全開の取り巻き達も目を点にしている。

「ふっふっふ、なんだ？ その惚けた反応は！ 英雄王の凱旋であるぞ！ ええい、頭が高い！ 控えい！ 控えおろう！」

少年を除く全ての人間が察した。

——あ、この外国人、時代劇を見たな。

実に愉しそうに神輿の上でふんぞり返っている。

神輿の下では見覚えのある学生服を来た男子十人が汗を流しながら「ワッセイ！ ワッセイ！」と叫んでいる。

「……………な、何してるの？ 零ちゃん」

「おお、三代目！」

どうやら、タイガの知り合いが混じっていたようだ。

「いや、この方が神輿を見たいと言うのでな。祭り用の神輿を出したのだが、乗ってみたいと言うのでね。こうして、友人達と担ぎ上げている次第だ」

言っている言葉の意味が分かるが全然理解出来ない。

「いやいや、神輿って人が乗っていいものなの!？」

「はっはっは！ 小娘よ、教えておいてやる」

英雄の中の英雄、王の中の王……………である筈のバカは言った。

「神輿とは神が座する騎馬なのだ。故にこの我が乗る事は至極当然の事なのだ！」

「……………という事だそうだ」

「へー……そうなんだー」

呆気に取られるタイガ。

アーチャーと少年は呆れたような表情を浮かべている。

——このバカは何を言ってるんだ？

二人の心は一つだった。

「で、でもでも、デパートに神輿で入るのは店の人に迷惑なんじゃ……」

「案ずるな。このデパートの経営権ならさつき買い取った！」

そう言つて、セイバーは近くの家電量販店を指差した。

その店頭に置かれたテレビでお昼のニュースが流れている。冬木市のローカル番組《冬木ニュース》。

キャスターの男が原稿を読み上げている。

「たつたいま入ったニュースです。冬木市内の大型デパートのオーナーが今日付けで替わり、名称も変更される事になりました。新しい名称は《ギルガメッシュ》というものだそうで、これは古代メソポタミア文明の——」

開いた口が塞がらない。

「つまり、このデパートは我の物だ！ 従つて、神輿で入場しても何の問題も無い！」

「嘘だろ、お前!?!」

「何やってんだ!?!」

少年とアーチャーは同時に叫んでいた。

「え、神輿でデパートに入りたいからデパートを買ったつて事?」

「逆だ。デパートを買ったから、その祝いに神輿で行進している最中だったのだ」

「じゃ、じゃあ、どうしてデパートを買ったの?」

「知れたこと。……我はこの時代をいたく気に入ったのだ」

「え?」

セイバーは語りだした。

「——漫画、ゲーム、アニメ、玩具！ この時代の人間が創り出した娯楽は実に素晴らしい！ 週刊少年ジャンプなど、思わず聖杯に来

週号を読ませてくれと願いそうになった程だ！」

「おいバカ止めろ！」

どこまで本気なのか分からないが、そんな事に聖杯を使われるなど溜まったものじゃない。

「金なら腐る程あるが、いざ買いに行くとなるといろんな店をハシゴしなくてはならない。それは面倒だ。故に、このデパートを買ったのだ！」

「……ええ」

店ごと買い占める。誰もが一度は妄想した事がある筈だ。だが、それを実戦する馬鹿野郎はそうそういない。

しかも、それをデパートで……。

「——ん？ んん!? おい、小僧。その手に持っている物はなんだ？」

呆れていると、セイバーは神輿から飛び降りて、少年の荷物を奪い取った。

「お、おい、それはコンカラーに頼まれた物で……」

「コンカラー……、あの小僧か。つぶ、《スーパーファミコン》を買うとは……」

セイバーは神輿に向き直った。

「神輿はもう良い。撤収せよ！ これが給料だ」

そう言って、零観に分厚い札束を押し付けるとセイバーは輝くような顔で少年達に言った。

「さあ、行くぞ！」

「どこに？」

「決まっていよう。貴様らの拠点へだ！」

「いやいやいやいやいやいや」

「マツケンジュー邸だったな。さっさと行くぞ！ おい、アーチャー！

貴様も来い！」

「なんで知ってんの!？」

「我は全知全能なのだ。分かったら黙って歩け！ ウエイバー・ベルベットー！」

答えになつてない。ウェイバーは真つ青な顔で喚き立てるが、「やかましい」と殴られ、アーチャーに向かって放り投げられた。

「担いでこい」

「……あ、ああ」

流されていいものか迷ったが、下手に逆らい戦闘になるのもまずい。

アーチャーは氣を失った氣の毒な敵マスターを抱えながらセイバーの後を追った。

「キヤー、お姫様だっこよ！」

「なんか耽美ー！」

「つていうか、あつちの神輿王子も超イケてない!？」

周囲の声から必死に意識を逸らす。聞いていると心が折れそうになる……。

◇

マッケンジー邸に到着した頃には空はすっかり暗くなっていた。

家主に断りもなくズカズカと家の中へ入って行くセイバー。

「お、おい！ ちよつと待てよ！」

ウェイバーが慌てて後を追う。アーチャーとタイガは顔を見合わせた。

「つ、ついて来ちゃったけど、どうする？」

「……あの様子では戦いにはならないと思うが」

アーチャーは首をひねった。

彼の知る英雄王も常人離れた性格だったが、あのセイバーも中々のものだ。

「悪い人じゃないっぽいけど……、変わった人っぽいね」

「ああ、そうだな」

あの英雄王が道化を演じるとは考えにくい。つまり、アレは恐らくヤツの素だ。

「我々も入ろう」

虎穴に入らずんば虎兇を得ず。完全無欠最強無敵の英雄王だろうと、勝たなければいけないのだ。

降って湧いた戦闘以外での接触の機会。少しでも情報を引き出してみせる。

アーチャーは気を引き締めて玄関の扉を潜った。

「お邪魔します」

「お、おじやましまーす」

二人が入ると、階段の上を見上げていた老婆が「あらあら」と頭を下げた。

「今日はお客様がいっぱいね。ウェイバーちゃんったら、友達を呼ぶなら連絡してくればいいのに。ゆつくりしていつてちようだい」

そう言って、キッチンの方へ老婆は歩いて行った。

階段を登ると、扉が一箇所開いていた。中に入ると、あの赤髪の少年とセイバーが睨み合っていた。

「……さて、始めようか」

両者の間には不穏な空気が漂っている。

「な、何が始まるの……?」

タイガは不安そうに呟いた。

「まずは桃太郎電鉄で勝負!」

「乗った!」

セイバーはスーパーファミコンのカセットを掲げた。

そこには《桃太郎電鉄Ⅱ》と書いてある。

「……つと、これは四人対戦が可能だったな。我と貴様、そして、アーチャー。後一人……、少し待っている!」

そう言って、セイバーは窓から外に飛び出していった。

「え!? お、おい、どこに!」

どこからか取り出した黄金の船で空の彼方へ飛んで行くセイバー。

「フ、フリーダム過ぎるだろ、アイツ……」

ウェイバーは頭を抱える。

「つぶ、王として、あの奔放きは見習うべきかもしれないね」

赤髪の少年はクスクスと笑った。

「……うわぁ」

その笑顔にタイガは見惚れてしまった。

「あ、あのー！」

ズンズンと近づいていき、タイガはその手を握る。

「お名前を教えてください！」

「お、おい、何してるんだ!？」

アーチャーは慌てて二人を引き剥がしたが、タイガはジタバタ暴れながら赤髪の少年に近づこうとする。

「これは魅了か!? 貴様……ッ」

タイガに投影した対魔力を持つ小さな首飾りを掛けながら、アーチャーは少年を睨みつけた。

その眼光を受け流し、少年は魅惑的なほほえみを浮かべる。

「ふふ、君のマスターも可愛いね。けど、ちよつと無防備過ぎるな。言っておくけど、僕は悪くないよ? ただ、顔が良すぎるだけなもの」

「あれ……、わたし、今どうしたんだっけ……?」

首飾りの対魔力の効果で魅了の効果が遮断され、タイガは正気を取り戻した。

当惑するタイガに少年は微笑みかける。

「はじめまして、お嬢さん。僕は僕はアレキサンダー。アレクサンドロス3世でもいいよ。勿論、他の名前でもね」

「アレキ……サンダー……?」

「お、おい! おいおいおいおい! 何をいきなり名乗ってるんだ!？」

あっさりと言名を明かしたアレキサンダーにアーチャーが驚くよりも早く、ウェイバーが絶叫した。

「何をつて、名前を聞かれたから答えたまでさ」

「いやいや、敵だぞ! この子もマスターで、僕達の敵なんだぞ!？」

「あはは。プリプリしないで落ち着きなよ、マスター。ほら、リラックスリラックス」

「お前のせいだああああ!!」

ウェイバーが叫ぶと同時に部屋の中に二つの影が飛び込んできた。

「待たせたな! 四人目を用意したぞ!」

セイバーが言った。彼の隣には見覚えのある女性が幼子を抱えて立っている。

「つて、ラ、ララ、ライダー!?!」

ウェイバーはムンクの叫びのようなポーズを取って悲鳴を上げた。そこにはセイバーと激戦を繰り広げたライダーの姿があった。

「あはは、変なかおー」

彼女に抱えられている白い髪の少女はケタケタと笑った。

その少女を見て、アーチャーは言葉を失った。

彼女もまた、彼の記憶に色濃く刻まれた人物の一人。姿形も彼の記憶と殆ど変わらない。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。彼の生前の義姉は彼の生前の相棒に抱かれ、満面の笑顔を浮かべていた。

「では、今度こそ始めるとしよう。《桃太郎電鉄》を!」

「……………どうしてこうなった?」

ウェイバーの眩きが虚しく響いた。

第十一話 「アーチャー死す！ デュエルスタンバイ！」

—— 聖杯戦争。それは万能の願望機たる《聖杯》をめぐる魔術師同士の血塗られた戦いである。

彼等は各々サーヴァントを召喚し、使役し、戦いくさに臨む。

七人のサーヴァントとそれを使役するマスターは最後の一組になるまで戦い続けなければならない。

今また、聖杯を巡り、サーヴァント同士の熾烈な戦いが始まろうと
していた……。

「ハイ、それでは！ 第四次サーヴァント大激突！ チキチキ、聖杯戦争を始めたいと思いまーす！」

緊張感に包まれた室内。戦いはイリヤスフィールの開戦の合図によつて幕を開いた。

それぞれ、持ち得る所持金は1000万円。彼等はその限られた資産を元手にあらゆる手段を尽くして財を為さなければならない。

「こんばんはー！ 司会のイリヤスフィールでーす！」

華やかな笑顔で茶菓子を掴みながら戦いの行く末を見守っているマスター達とマツケンジール夫妻に挨拶をするイリヤスフィール。

「いよいよ始まりました、第四次聖杯戦争！ 今回はココ！ マツケンジール邸からお送り致します！」

凄すごいテンションだ。実に楽しそうだ。

ウェイバーは思った。

—— もう、何もツツコむまい。

マツケンジール夫人が淹れてくれた渋めの緑茶を啜りながら決意を固めた。

「ツフ、この我に挑んだ事、後悔させてやるぞ雑兵共！」

ギルガメッシュ……とは文字数の関係で入力出来なかったギル社長が他を挑発するように言った。

「あはは、そういう事言ってるヤツに限って負けちゃうんだよねー」

アレクサンダーもアレクサンドロスもイスカンドルさえ入力出来ず、泣く泣くせいふく社長になった彼は腹いせとばかりに小馬鹿にしたような態度でギル社長を煽る。

「そもそも、貴様が誘ってきたんだろが……」

デフォルトのうらしま社長で妥協した弓兵は疲れたように言った。

「……ところで、これから我々は何をするんだ？」

そもそも何故ここに現れたのが一切不明のライダーは困惑の表情を浮かべている。

「さつきから言っているだろう、桃太郎電鉄だ！」

「だから、そのモモタロデンテツとはなんなのだ？」

「君は呼ばれた理由も知らずについて来たのか？」

うらしま社長が問う。

「我がマスターの望みだ」

そのマスターは他のマスター達とお菓子を摘み始めている。

「……テレビで見て、一度やってみたいと言っていたのだが」

「ライダー！ 負けちゃダメだからね！」

イリヤスフィールは敵マスターである筈のタイガの膝の上で両手を上げて言った。

「い、いいのか、あれは？」

「構わない。彼女に手を出せば、死ぬのは貴様等のマスターの方だからな」

「なに……？」

彼女の発した不穏な言葉にうらしま社長は険しい表情を浮かべる。

「おっと、乱痴気騒ぎは許さんぞ。今宵、闘志は全てコレに捧げてもらう」

睨み合う二人にギル社長がコントローラーを掲げて言う。

「……との事だ」

肩を竦めるライダーにうらしま社長は空恐ろしいものを感じた。

違う。彼が知っている彼女ではない。見た目の違い以上に決定的ななにかがある。

タイガには一定ランクまでの魔術や呪詛を退ける首飾りを渡して

あるが……。

「おい、無駄な事は止せ」

ライダーが言った。

「貴様がマスターの下へ行こうとしたら、その瞬間に貴様の首を断ち切るぞ」

それが冗句の類では無い事は冷徹な眼差しが示している。そして、その時、彼では彼女の一撃を防ぐことなど不可能である事も彼には理解出来てしまった。

彼女がここに来た理由。それは発言通り、マスターが望んだからなのだろう。そして、それを許した理由は一つ。

ここに居る三体のサーヴァントを同時に相手取ったとしても、確実にマスターを守り切る自信があるからに他ならない。

「……乱痴気騒ぎは止せと言った筈だが？」

セイバーが苛立ちに満ちた声を上げる。

「ただの警告だ。それより、さっさと始めようじゃないか。その……えっと、モモタロデン……テツ？ とやらを」

「桃太郎電鉄だ！」

一見おちやらけて見えるが、これは間違いなく聖杯戦争だ。

一歩間違えればマスター共々殺される。死にたくなければ、戦うしかない。

「アーチャー……頑張つて！」

タイガの声援に彼は親指を上げて答えた。



「ふざけるな!!」

セイバーの怒声が轟く。

「貴様、またしても私の物件を!!」

「あはは。もうかりまっカード。もう一枚！」

「やめろおおお!!」

現在、八十九年目の十月。戦いはヒートアップしていた。

インフレにつぐインフレによって、社長達の資産はほぼ全員億を超え兆の領域に達している。

神懸ったサイコロの出目やカード他によって首位はギル社長。だが、彼の黄金率スキュルに対して、未来の征服王は名前に恥じぬ征服振りを披露した。

次々に繰り出される《のつとりカード》、《もうかりまっカード》がギル社長の所有する物件を彼色に染め上げる。

「……また現れたな銀次」

総資産ぶっちぎりの最下位であるうらしま社長は何度も何度も現れるスリの銀次に溜息を零す。

何故か他の社長の下へは現れず、資産三桁の彼を狙い撃ちだ。

「……とびちりカード」

「このクソ野郎!!」

そこへライダーがとびちりカードを発動。幸運A+のライダーの一撃が幸運Bのギル社長にアレの包囲網を敷く。

「……ツク、なんという光景だ」

うらしま社長は嘗て憧れた少女がアレを全国にバラ撒く光景を見て、密かに傷ついた。

「ええい、動けなくともカードは使える！ ぶつとびカードだ！」

ホールインワン。最強の英雄は運命さえ味方にした。

「フハハハハッ！ これが我と貴様等雑兵との格の違いというものだ！」

「今更目的地に入ってもねー。よし、これで東京の物件全部乗っ取り完了っつと」

せいふく社長は元の値段よりも安く相手の物件を買い取れる《もうかりまっカード》で着々とギル社長の物件を征服していく。

「こんどはキングデビルだど!?!」

うらしま社長は泣きっ面に蜂状態。

「今ので移動カードは尽きたな。よし、二枚目だ」

またしても全国にアレが降り注ぐ。ギル社長の周囲四マスにもプヨヨンと落ちてくる。ついでにうらしま社長の周りにも降り注ぐ。

「——き、貴様等アアアアアア!!」

「クソツ、私の所にまで……」

そうして年数が重なっていく。

ついに到達した九十九年目。戦いは三竦み状態。ちなみにうらしま社長はキングボンビーとキングデビルの集団を引き連れ火の車状態だ。

物件数ではせいふく社長が優勢だが、総資産ではまだギル社長に分がある。だが、妨害カードで二人に追い縋ってくるライダーも油断ならない。

火花散る闘争。

「冬眠カードだ」

ライダーの放った一撃にギル社長が言葉を失う。

「まさか、ここでソレを!?!」

青褪めるせいふく社長。

「貴様にも冬眠カード」

最後の一年。二人は何も出来ない状態に陥った。

「いくぞ、たいらのまさカード」

ライダーを除く三者の頭に雷鳴が轟く。

「ま、まさか、貴様!?!」

「こ、この時の為にアーチャーを追い詰めたのか!?!」

「ひ、ひどい」

たいらのまさカードは全員の持ち金を文字通り平らにする。

借金地獄の者には救いを、億万長者には苦痛を与える恐怖の一枚。

全員の金額が一気に均一化される。それでも辛うじて億を残す事に成功したギル社長とせいふく社長は次なるライダーの一撃に表情を凍りつかせる。

「いくぞ、マルサカード」

総資産の四分の一を徴収する魔の^{ジョー}カードがついに切られた。しかも、元大金持ち二人にそれぞれ二枚。

一気に赤文字の世界へ落とされた二人は売り飛ばされていく自らの物件を切ない表情で見つめた。

そして、三月が到来。勝者はライダーに決まった。

「……ッフ、この程度か」

嘲笑するライダー。三人の敗者は言葉も出なかった。

己の黄金率に奢り、只管金策に走り続けたセイバー。

他人の物件を乗っ取る事ばかりに集中していたコンカラー。
延々と底辺で転がり続けたアーチャー。

常に策略を練り、必勝を見据えていたライダーの敵ではなかった。

「もう一度だ……」

セイバーは声を震わせながら言った。

「もう一度勝負しろ!!」

「構わんぞ。何度でも打ち負かしてやろう」

ライダーはやれやれとばかりに肩を竦める。

「……私は」

「あ、貴様はもういいぞ。弱過ぎて相手にならない」

辛辣過ぎるセイバーの言葉にアーチャーは切ない表情を浮かべた。

「ア、アーチャー、元気を出して!」

「タイガ……」

タイガはアーチャーの手を握ると、セイバーを睨んだ。

「なんだ、小娘。自らのサーヴアントを蔑まれた事が不服か?」

「不服だよ! アーチャーの仇はわたしが討つ!」

「……つふ、その意気や良し! いいだろう、挑むがいい。だが、小娘

如きが英雄共の跋扈する戦場^{ももてつ}で果たして生き残る事ができるかな?」

「あはは。手加減してあげるべきかな?」

「受けて立つ!!」 ◇

数時間後、そこには打ち拉がれる英雄達の姿があった。

「……ライダー。なんか、がっかり」

「ウグツ」

「コンカラー。お前、あれだけ大口叩いといて……」

「……はは、僕はまだまだ未熟なんだね」

勝者の少女は自らの従僕に勝利の栄光を捧げる。

「勝ってきたよ、アーチャー」

まるでゲームシステムそのものが彼女の為に動いているかの如く、
全ての要素が彼女を勝利に導いた。

その圧倒的な強さにアーチャーは微笑んだ。

「……ああ」

なんで、聖杯戦争中にゲーム大会なんてやってるんだろう、オレ達……。

唯一生前もゲームに慣れ親しんでいた筈の近代の英雄の癖にボロ負けしたアーチャーの心の叫びは誰に聞かれる事もなく、彼に虚しさだけを与えて消えた。

第十二話 「死神動く」

歴史に名を馳せた英雄達がゲームの勝敗に一喜一憂する。そんな楽しくも奇妙な時間も終わりを迎えた。

「まさか、本当にゲームをするだけで終わるとはな……」

ライダーとセイバーが空の彼方へそれぞれの騎乗宝具で消えた後、アーチャーは疲れたように呟いた。

「……お前は どうするんだ？」

ウェイバーは唯一居残っているアーチャーを警戒している。

「そう構えるな。私もマスターが眠ってしまったからね。ここらでお暇させてもらうよ」

大河はアーチャーの背中で静かに寝息を立てている。彼女を起こしたくない。それに、ここでコンカラーと事を構えても旨味がない。見た目は荒事など無縁な美少年だが、その正体はアーサー王と勝るとも劣らない知名度を持つ大英雄。

彼は以前の戦いで黒馬に騎乗していた。あれが恐らく彼の宝具だろう。だが、それ以外の宝具を持っていないという確証は無い。コンカラー征服者というイレギュラーなクラスで召喚された事も分析を困難にしている。

「では、君も今宵は休むといい。いろいろ……、疲れただろ？」

「……ああ」

アーチャーは大河を背負い、昼間買った物を手に夜の街を歩いた。

「……むにや、アーチャー。えへへ、勝ったよー」

背中で寝言を言いながら幸せそうな笑みを浮かべるマスターにアーチャーは頬を緩ませた。

「藤ねえはやっぱ強いな」

トランプや麻雀みたいなポーカーフェイスがモノを言うゲームには滅法弱い、スゴロクゲームや格闘ゲーム、レースゲームで彼女に勝てた事は一度もない。

別にルールの裏をついたり、周到な策略があるわけじゃない。純粹に強いのだ。まさに天賦の才というヤツだろう。

「まさか、英雄王やセイバーにまで勝つとはな」

アーチャーは歩きながら過去に浸っていた。良くない事だと思いつながら、それでも彼女との思い出を振り返ってしまおう。

幼い日、義父に連れて来られた武家屋敷。その隣家に住んでいて、ちよくちよく遊びに来る女性に最初は振り回されっぱなしだった。

とにかくパワフルで、優しくて……。

「……藤ねえ」

そういえば、屋敷の蔵や彼の部屋には彼女が持ち込んだガラクタが山のように積み重なっていた。おもちゃや雑誌、健康器具、よく分からない置物。

特にこれといった趣味もなく、物を増やす必要性を感じない彼の部屋が空虚だった事は一度もない。殺風景だと知人によく言われたものだが、とんでもない。彼だけなら、殺風景どころか伽藍堂になっていた筈だ。

部屋は己を映す鏡。からっぽな彼の部屋は空虚になりがちで、それを彼女は我慢出来なかったのだろう。

度々、遊園地や山に連れて行かれた事もある。それも全て、彼の心を満たしたいから……。

「……ごめんな」

彼女はからっぽだった彼に色々なものを与えてくれた。なのに、何も返してあげる事が出来なかった。

「……ん、アーチャー？」

「む、起こしてしまっただか？」

つい零してしまった言葉を聞かれたかと焦るアーチャー。すると、大河は彼の頭を優しく撫でた。

「よくわかんないけど、元気だしてね」

「……ああ」

再び寝息を立て始める大河。

アーチャーはその背に感じる重みを噛み締めた。

彼女を不幸にしてはならない。

彼女を泣かせてはいけない。

彼女の為にも負けるわけにはいかない。
悔いている暇などない。

「……安らかに眠る主を守りきれるか？」

漆黒に濡れた鎧を身に纏う禍々しき騎士がその手に魔剣を握り襲い掛かって来た。

「トレース・オン
投影開始」

虚空に浮かび上がる三本の剣。それぞれが尋常ならざる魔力の籠った宝具である。

だが、魔剣の一振りはそれらを容易く打ち砕いた。

「ほえ!? な、何事!？」

「すまない、マスター。敵が現れた」

三本の宝剣が創り出した刹那の一瞬、アーチャーは真横に跳躍した。その反動で大河は目を覚ます。

すまなそうに謝りながら、アーチャーはその魔剣を解析する。

無^ア毀^ロなる湖^ン光^ダ……、嘗て、最高の騎士と謳われたサー・ランスロットが握っていたとされる聖剣。その実力はかの騎士王すら上回るという。

「……なるほど、最悪だな」

主を背負った状態ではまともに交戦する事など出来ない。だが、彼女を降ろすわけにもいかない。相手の殺意は彼だけではなく、彼女にも向けられている。隙あらば、ヤツは迷うことなく大河を殺す。それが分かるからこそ、アーチャーは憎悪に満ちた表情を浮かべる。

「トレース・オン
投影開始」

眼前まで迫る魔剣の前に十を超える聖剣魔剣を並べ立てる。それすら逃げる為の一瞬を稼ぐ事で精一杯。一瞬にして粉碎されてしまった。

だが、それで十分。此方の目的は無傷での撤退。その為の準備は整った。

アーチャーが逃げ込んだ場所は以前の戦いでセイバーとライダーによって破壊されたビルの傍。ここは昼間でも聖堂教会の手で人避けがされている。

「……あれは。ヤツが何故……？」

アーチャーが発動した宝具。それは彼にとってあまりにも馴染み深過ぎるものだった。

その疑問が彼の追跡の足を止めた。まるで、自らの罪を目の前に突きつけられているような気分だった。

「ほう、騒がしいと思って来てみれば」

立ち尽くす彼の下に新たな殺意が現れる。赤と黄の二槍を構え、美貌の英雄が立っていた。

「負傷しているとはいえ、サーヴァント同士が出会った以上は戦うのが運命^{さだめ}。いざ、尋常に勝負！」

「……ツハ、舐めるな！」

激突する二騎のサーヴァント。

彼等を見つめる目が一つ。

そして、その目を見つめている者が一人。

「……さて、まずは一人目だ」

戦場から少し離れた場所にあるホテル、そこから更に遠く離れた高台で双眼鏡を覗きこむ男の眩きと共にホテルが揺れる。

従業員や宿泊客も大勢眠っている筈のホテルが赤く燃え、崩れていく。

幾百の悲鳴が轟き、戦いに集中していたランサーも驚愕に目を見開く。そこをアヴェンジャーは見逃さない。

何者かに爆破されたホテル。多くの人命が失われた。にも関わらず、首謀者の標的は銀の流体に守られて生き延びた。だが、彼の手の甲から赤い光が失われた。

「戦いの最中で余所見などするな、戯け」

一人目の脱落者はあまりにも呆気なく敗退した……。

第十三話 「なんだか、楽しいツス！」

言峰璃正は頭を抱えていた。先日のビル三棟が陥落した事件に引き続き、テロリストによる冬木ハイアットホテルの爆破。加えて、連続猟奇殺人の横行。まだ、メディアは報道していないが、それも時間の問題だ。神秘の漏洩こそ防げているが、このままでは聖杯戦争を続ける事が出来なくなる。いくらなんでも、暴れ過ぎだ。

前回の聖杯戦争もナチスだとか、帝国陸軍だとかが介入して来た事で荒れに荒れたが、幸か不幸か政府中枢が動いたおかげで情報統制などは容易だった。その頃の政府高官は全て墓の中。第二次世界大戦の影響でほぼ一新されてしまった今の政府に協力を求める事は出来ない。内部に潜り込んでいる聖堂教会や魔術協会の工作人員にも出来る事が限られている。

「このままではまずい……」

今日で聖杯戦争は開戦から三日目に突入する。四日後にはセイバーの宝具が発動してしまうから、それまでに決着をつけてもらわなければ己の身も危ない。だが、焦りから各陣営が積極的に動き、今以上の被害を出す事も容認し難い。

「……かくなる上はルールの抜本的見直しが必要かもしれない」

璃正は教会の奥の礼拝堂に設置した魔術装置の下へ向かった。



「……おい、なんのつもりだ？」

アーチャーは眉間に皺を寄せながら来訪者を睨みつけた。

「分からんか？」

「分からん！」

セイバーのサーヴァント。英雄の中の英雄であり、王の中の王であり、間違いなく最強のサーヴァントである英雄王ギルガメッシュが両手に山程のゲームソフトを抱えてアーチャーと大河の新居の扉を叩いたのだ。

セイバーはやれやれと首を横にふる。その相手をバカにしたような腹の立つ態度にアーチャーは料理中である事も合わさって苛立つ

た。

「ゲームをしに来たに決まっているだろう」

「なんでさ!?! なんて、ゲームをしに来るんだ!? サーフアントだよな!?!」

まるで友達の家遊びにきたような感覚で現れた最強の敵にアーチャーは唾を飛ばす勢いで叫んだ。

あまりの大声に耳鳴りがして、セイバーはうんざりしたような表情を浮かべる。

「言っておくが、貴様と遊ぶ為に来たわけじゃない。我は貴様の主にようがあるのだ」

「……会わせると思うか?」

無言のまま、両者の間で火花が散る。

すると、そこに新たな来訪者が現れた。

「おーい、アーチャー! 遊びに来たよー!」

そこにはラムレイに乗ったライダーとイリヤの姿があった。その後ろには大勢の野次馬が跋扈している。

アーチャーは絶句した。セイバーですら、ドン引きの表情を浮かべている。

「おい、ライダー。貴様、そのまま街中を?」

「ん? ああ、ラムレイの事か? 当然だろう。イリヤを歩かせるわけにもいかん」

新居は新都の外れにある。とは言え、アインツベルンの森からここまで黒馬に乗った美女と美少女が歩いていたら目立つ。それはもう、見てみぬ振りなど不可能な程目立つ。一キロ先からでもダツシユで見に来る程目立つ。よく見たら、最近の事件を報道する為にやって来た報道陣の姿もある。今、彼女達は全国中継のテレビに映り、お茶の間に話題を提供している真っ最中というわけだ。

「嘘だろ、お前等……」

もはや、拠点がバレたというレベルじゃない。アーチャーは少し泣きそうになった。まさか、英霊となった今になって、しかも全国ネットでこんなバカ共とテレビ出演する事になるとは思わなかった。

「あ、あの！ あなたはあの女性とお知り合いなのですか!？」

熱意溢れるキャスターの女性にマイクを向けられたアーチャーはテレビの向こう側のマダムが鼻血を吹き出す爽やかスマイルを浮かべて言った。

「知らない人です。いやー、馬に乗って街中を闊歩するなんて、不思議な人ですね」

「あ、あはは。では、あなたは?」

マイクを向けられたセイバーは何を思ったかテレビカメラの前でキメ顔を作り始めた。

「ふふ、見ているか愚民共。これがテレビカメラというヤツなのだ。我もいよいよお茶の間デビューというわけだな。ふ、ふふ……」

嬉しそうに歌まで歌い始める始末だ。無駄に美声なものだから腹が立つ。

「……楽しそうだな。結構な事だ。じゃあな」

扉を力強く閉めた。

「おい、待て！ 我は昨日の決着をつけに来たんだぞ！ ええい、開けぬというなら開けるまで！ 開け、ゲート・オブ……」

「やめろおおお!! 開けるから、それはやめろおおお! 全国ネットに何を流すつもりだ、貴様!!」

テレビカメラの前で宝具を解放しようとする底抜けの馬鹿野郎を慌てて中に引き摺り込む。

「おい、アーチャー！ イリヤがどうしても言うから来てやったぞ。さて、中にタイガはいるな?」

来てやったじゃねーよ。来るなよ。帰れよ。

嘗て憧れた少女の蛮行にアーチャーは思いつく限りの罵倒の言葉を脳裏に並べ立てた。

「……えっと、どちら様ですか？ 失礼ですが、人違いをしていますよ」

「ほう、ここで我が剣の錆になりたいと……」

「ようこそいらっしやいませ、馬鹿野郎!」

報道陣の女性が「やっぱり、知り合いじゃないですか!」と叫ぶ声

を無視してラムレイから降りた二人を中に入れる。
すると、ラムレイが光になって消えた。

開いた口が塞がらない。野次馬達の口も塞がらない。キャスターの女性も塞がらない。

「イリユージョン!!!」

アーチャーは叫んだ。全身全霊を掛けて叫んだ。

「凄いでしよう! いや、実は彼女は海外で売り出し中の手品師でして! 今の馬の消失トリック! 分かった人いました? 目の前でパツと消える! まるで、魔法みたいでしょう? 今度、日本でも彼女のショーが開かれるかもしれません。その時はどうか御鼻屑に!」
もはやヤケクソである。だが、そのアーチャーの演説に感謝の言葉を零した者が大勢いた。

サーヴァント^{バカ}の蛮行をどう隠蔽しようか悩んでいた聖堂教会や魔術協会の工作人員達である。

人間、手品と言われてしまうと大抵の不思議な事はそれで納得してしまうものだ。今頃、画面の向こうでは彼女の馬が消えたトリックをあれこれ議論している事だろう。

「いやー、私も手品が得意でしてね! その関係なのですよ! ほら、何も無い所から剣が一本、二本!」

干将莫邪の投影を手品として披露する事になるとは……。

「彼女のショーは後日告知などあると思いますので! それでは、失礼します」

感心しているキャスターの女性に手を振りながら家の中に戻るアーチャー。外では凄い盛り上がりだ。

並べ立てた嘘八百。種など無い本物の魔術を手品として公開する今の姿を生前の師が知ったらと思うと恐ろしい。

などと考えていると、外で歓声が巻き起こった。

嫌な予感がする。そつと、霊体化して外を見る。そこには……、第三のバカがいた。

「おい、マジで勘弁してよ。テレビカメラあるじゃん……」

真っ白になっているマスターを引き連れ、絶世の美少年が道行く

人々に笑顔を振り撒いている。

征服王の名に恥じぬ圧巻の光景だ。彼の後ろには彼が道すがらファンにした有象無象が列をなしている。

「たのもう！ 日本では、訪問の時にこう言うんだよね？ たのもう！ 昨夜の決着をつけに来た！ かいもーん！」

アーチャーは扉を開いた。そして、キャスターの女性につつつかれる前に急いで二人を中に叩き込んだ。

外では怒号が飛び交い阿鼻叫喚の地獄絵図が出来上がっていく。

「……ああ、味噌汁を作っている最中だったな」

アーチャーは現実から目を逸らす事にした。

居間で早速ゲームに興じている仲良しグループを尻目にキッチンへ向かう。

「よし、さっそくやるぞ！ ふふふ、今日は負けんぞ、タイガ！ 我が英雄王としての誇りに掛けて、貴様を倒す！」

「負けちゃダメよ、ライダー！ わたしのサーヴァントは他の誰よりも強いんだから！」

「ほら、マスター。僕を応援してよ！」

「あー、はいはい。がんばれがんばれ。……僕はこの街に何しに来たのかな」

昨夜、ゲームで大河に負けた事がよほど悔しかったのだろう。セイバーは闘志を燃やしている。

ライダーはイリヤにせがまれるままコントローラーを握り、コンカラーはマスターの少年を困らせている。

平和だ。聖杯戦争で殺し合う仲とは到底思えない。

歴史に名を馳せた英雄達にこぞって戦いを挑まれた大河はつい笑みを浮かべてしまった。

「よーし、かかってこいやー！ 負けないぞー！」

楽しい事は楽しむべきだ。今、彼等と興じるこの時間は彼女にとって間違いなく楽しいものだった。

「さあ、今日はテトリスを持ってきたぞー！」

「あ、僕達はロックマンX2持ってきたよー！」

「それは勝敗がつかんだろう」

「えー、わたしもそれやってみたいなー！」

「イリヤが望むなら」

「聖杯戦争ってなんだっけ……」

アーチャーもまた、少しだけ昔を思い出して微笑んだ。

こうして、サーヴァントを交えた団欒が嘗て彼の家にもあった。

昨夜のランスロットとの戦いで消費した魔力を回復する必要もある。今日の夕食は豪華にしよう。アーチャーは腕によりをかけた。

I n t e r l u d e

屍が積み上がっている。老いた者、若い者、女、男、そこにはあらゆる死が重なっていた。

その上で嗤う影がある。

「ハツハツハア！ 愉しいなー！ 最高に愉しい！」

小物染みた下衆な笑みを浮かべ、ソレは久しぶりの生を楽しんでいる。

「COOL！ 最高だ！」

悪魔があげる歓喜の声に応える者が一人いる。彼は悪魔と共に死を愉しんでいた。

治癒魔術を掛けられ、致命傷を受けても死ぬ事が出来ない状態の幼子にいくつの針を突き刺せるか実験中の彼。実験台にされた少年は動く事も出来ず、さりとて正気を失う事も魔術によって禁じられ、ウニのように無数の針が突き刺さっている。その出来栄は素晴らしく、もはや新たな針を突き刺す隙間も無い程だ。彼はその作品を《ウニ人間》と名付け、ガラスのケースに閉じ込めた。彼が飽きるまで、少年が死に逃避する事は許されない。

その横には全身の肌を削がれ、あちこちにサインペンで落書きをされた《人体模型》というタイトルの少女がいる。更にその隣には両腕両足を切り取られ、代わりに犬や猫の脚を繋ぎ直された《キメラ》がいる。

山になる程積み重なった失敗作の肉を材料達に食べさせながら、彼は新たな作品のアイデアを考える。

「なあ、次は何を作るんだ？」

悪意の塊が問う。

「うーん、ちよつと考え中。家具とか楽器でも作ってみようかな？」

「それはいいね」

「……なあ、アンタも何かアイデアねーの？」

彼はこの地獄てんごくに連れてきて来れた天使あくまの創り上げる死体アートに興味がないわいた。

「オレか？ オレのアイデアか……」

悪魔は悪意を総動員した。人類が行使出来る悪行。その殆どをや
りつくした。粗方の苦痛を再現して味わった。

だから、ソレも彼と同じく新鮮さが足りないと感じていたところ
だった。

「……そうだなー。ちよつと、趣向を変えてみるか？」

◆◆

遠坂凜は苛立っていた。友人が行方不明になったのだ。一人や二
人じゃない。今日、いつものように登校して来た2組の生徒は彼女を
含めて十人ちよつと。他のクラスも似た感じだ。

先生達が登校して来ない生徒の親に電話をしたけど、全て留守番電
話。

授業どころじゃなかった。先生達は慌てふためき、生徒達を体育館
に集めた。何の説明も無く、生徒達は只管体育座りを続けた。時計の
針の動きを目で追いながら、周りの囁き声を聞く。皆、不安がってい
る。

数時間後、体育館に大勢の人が流れ込んできた。生徒達の保護者が
迎えに来たのだ。凜の母親の姿もあった。酷く狼狽えている。

「大丈夫ですか？」

少女が問う。すると、彼女の母である遠坂葵は気丈な笑みを浮かべ
た。魔道に生きながら、魔術師では無い彼女は些細な異変に対しても
過敏に反応する。なのに、娘の不安を払拭しようと必死に勇気を振り
絞っている姿はとても健気で愛おしい。

実のところ、生まれた時から魔術師であった凜の視点から見ると、
母のそういう姿はどこか奇妙で、間に見えない壁があるように感じる
事がしばしばだった。でも、最近、少しずつだけど、普通の人の感覚
というものが理解出来るようになり、その壁も少しずつ薄くなってい
ると実感している。

彼女の反応こそが当たり前であり、凜は彼女のような普通の人が恐
れる世界の住人なのだ。だからこそ、此方側の人間として責任を持た
なければいけない。

《余裕をもって優雅たれ》

それが遠坂家の家訓だ。恐れられる者であり、外れた者である事を自覚し、それでも尚、余裕を持ち優雅に振る舞えという意味。とても難しい事だけど、いずれ遠坂家の当主となるなら、この家訓を実践し続けなければならぬ。

凜は母親の手を握った。

「帰りましょう、お母様」

元気いっぱい笑顔を作る。彼女を安心させる事。それが今の彼女に出来る責任の取り方だ。そして――……。◆

夜の9時半過ぎ。私は寝た振りをして、コッソリと禅城の屋敷を抜け出した。人目につかないように慎重に目的地に向かって足を運ぶ。脳裏に浮かべるのは親友の笑顔。男子にしよっちゅう虐められ、その度に私は彼女を助けている。私は彼女のボディガードとなり、彼女が授業で分からない事があると言うと、喜んで知識を分け与えた。その見返りとして、彼女は私に普通の人の在り方を教えてくれた。

「コトネ……」

禅城の屋敷の人に聞いた事だけど、近隣の街では行方不明者が続出しているらしい。コトネの一家も行方不明者の中に名を刻んでいる。おまけに冬木市内で断続的にテロ行為が行われ、警察は正に血眼と化した様子で街中を駆けずり回っている。幸い、赤いランプとけたたましいサイレンの音で位置が分かるから避けるのは容易だった。

きつと、彼等にこの事件を解決する事は出来ない。この時期にこれほど大規模な異変を起こす者など聖杯戦争のマスターか、その関係者に決まっている。このまま放置したら、コトネと永遠に会えなくなってしまう。かと言って、戦いの真つ最中で忙しい筈のお父様を頼るわけにもいかない。

今、コトネを助けられるのは私しかない。上手く敵の情報を探る事が出来れば、お父様にも褒めてもらえるかもしれないし、ここは頑張るどころだ。

「絶対に助ける」

決意を言葉にして、私は走り続けた。目指す先は山一つ向こうにある冬木の街、聖杯戦争の舞台だ。

走り始めて三十分。正直言って、少し冬木までの道のりを舐めていた。山に入る前から息切れ状態だ。せめて、もう少し早く出て、バスを使えば良かったと後悔している。まあ、今は街中厳戒態勢だから、子供一人でバスに乗ろうとしたら呼び止められてしまいそうだけども……。

「……へ、へこたれないんだから！」

何とか奮起して再び歩き出す。しばらくすると、妙な感覚が奔った。ポケットに仕舞ったお父様からの贈り物が荒々しく動き回っている。これは魔力を探知する魔道具。これが反応しているという事は近くに魔術の痕跡があるという事。

「反応が大きくなってる……？」

ゴクリと唾を呑み込む。立ち止まっているにも関わらず、魔道具の反応が徐々に大きくなっているのだ。それはつまり、魔力の発生源が私の下に近づきつつあるという事。

身が竦む。腹立たしい程に私は恐怖を感じている。恐れられる側に立っている癖に恐れるなんて情け無いにも程がある。震える足を力の限り叩き、無理矢理動かす。今はとにかく隠れよう。近くの民家の敷地に入り込み、息を潜める。

魔道具の震えがどんどん大きくなり、やがて、一人の男が現れた。若くて、とてもハンサムな人。彼は一直線に私の隠れている場所までやって来た。

「……誰よ、あなた

肌が粟立っている。逃げなければいけないと分かっているのに、脚が動かない。まるで、地面に縫い止められてしまったかのように……。

「ついて来てよ」

その言葉と共に突然吹き付けられたガスを私は思いつきり吸い込んでしまった。平衡感覚が失われ、酷い眩暈に襲われる。

シュツという音と共に再びガスが噴出され、私はそれを吸い込み意

識を手放してしまった。そして、次に目が覚めた時、私は地獄に居た

第十四話 「楽しいツス！」

ざわついている。さつきまでテトリスで一喜一憂していた聖杯戦争の参加者達がキツチンを覗き込みながら囁き合っている。

「すごいノリノリだな」

セイバーは鼻歌混じりで鍋を振っているアーチャーに呆れている。「しかし、良い香りだ……」

ライダーはお腹を押さえた。それでも漏れ聞こえる腹の虫の鳴き声にイリヤスフィールは苦笑いを浮かべている。

「ライダー。恥ずかしいよ、もう……」

「つていうか、サーヴァントが料理つて、どうなんだ？」

ウェイバーは慣れた手つきで料理の盛り付けを行うアーチャーに困惑している。

「人それぞれだとは思うけど、現代の調理器具をあそこまで巧みに扱うとは……。ちよつと、欲しくなっちゃうな」

「あ、あげないツスよ!」

不穏な事を口ずさむコンカラーに大河は慌てた。

そうこうしている内に調理が完了したらしく、アーチャーは満面の笑顔で振り返った。

良い笑顔過ぎて全員がちよつと引いた。

「待たせたな! 夕食の時間だ!」

アーチャーはもはや諦めていた。敵であるサーヴァントが戦いもせず、ゲームに興じている現実と戦う事を諦めた。

だから、料理に励んだ。調理実習三年間無敗記録の保持者にして、世界中を旅して回る途上で一流ホテルのシェフ達とメル友になった彼の全身全霊を掛けた料理。

「……貴様等がゲームで勝敗を決めようとするのなら、オレは料理で貴様等を打ち倒してみせよう。」

ちよつとキメ顔を浮かべ、内心でそんな事を考えながらアーチャーは盛りつけた料理をテーブルに並べていく。

「……た、食べてもいいのだな?」

ライダーは目を血走らせている。

「ステイ！ ステイよ、ライダー！ 両手でフォークを握っちゃ駄目！ 淑女としての嗜みがなくなってないわ！」

記憶の中では箸を上品に使っていた筈なのだが、目の前で獣の如く料理を睨みつけているライダーの姿に気品は一切感じられなかった。「ツハ、貧国の王はこの程度の料理で我を失うか……。哀れなものだな」

「いや、これは結構いい線いってると思うよ？ 僕の専属料理人にしてもしもいかなって思うくらい」

さつきテトリスで連敗したウサを晴らすかのようにライダーを嘲笑うセイバー。対して、コンカラーは熱い眼差しをアーチャーに向けている。

「ねえ、僕のものにならない？」

あざといくらい可愛らしい表情を浮かべて勧誘するコンカラー。

「駄目って言ってるツス！ アーチャーはわたしの！ わたしのだから！」

「えー。それはアーチャーが決める事だよ？ ねえ、一晩だけ貸してくれない？ それでも彼が心変わりしなかったら諦めるからさ」

「何をする気ツスか!？」

色っぽい表情を浮かべるコンカラーに大河は危機感を募らせ、ワイングラスを並べているアーチャーの前に立ち塞がった。

「ガルルルル!!」

唸り声をあげる大河の頭にポンと手を乗せ、アーチャーは言った。「そう必死になるなよ、マスター。私は君以外に付き従うつもりがない。君以外のマスターなど考えられない」

そのキザったらしいセリフに免疫の無い大河は一瞬で真っ赤になった。

その様子があまりにも可愛らしく、アーチャーは頬を緩ませた。

「……ああ、これは無理そうだね」

残念そうにつぶやくコンカラー。割と本気で勧誘していたのだが、アーチャーの反応に自分の不利を悟った。

「ええい、アーチャー！ いいから、そろそろ食べさせろ！」

もはや幻滅の域に達した獣にアーチャーは泣きたくなった。

「もうちよつと上品になれんのか、君は！ ワインを注いで乾杯したらすぐだ！ もう少し待て！」

そう言つて、大河を席に戻してからそれぞれの前にワイングラスを並べ終えたアーチャー。彼がワインを注ごうとすると、突然セイバーが待ったをかけた。

「おい、貴様！ どういうつもりだ？ 事と次第によつては我が宝具をここで……」

「落ち着け腹ペコキング。凡愚ながら、それなりの品を用意したアーチャーに我なりの敬意を払つてやろうと思つたまでだ。それに貴様も飲みたかろう？ 神代の酒を」

そう言つて、セイバーは己の蔵から黄金の酒瓶を取り出した。それをアーチャーに渡す。

「天上の美酒だ。それを注ぐがいい」

「断る」

「なに!？」

まさか断られるとは思つていなかったセイバー。

「私は葡萄酒や葡萄ジュースに合う料理を作つたのだ。天上の美酒を振る舞うのは結構な事だが、それは食後にしてもらおう」

「ツク……、この我の慈悲を無碍にするとは……。ええい、ワインなら良いのだな!? ならば、こつちだ！」

今度は翡翠の酒瓶を取り出した。

「ワインだ！ これなら文句あるまい！」

「……ああ、間違いなくワインだな。しかも、これほど香り高いものはお目に掛かつた事がない」

「当然だ。本来、人の身で飲む事など許されぬ楽園のもの。存分に酔い痴れるがいいぞ、お前達」

「おい、御託はいいからさっさと注げ」

気持よく蘊蓄を垂れようと思つていたセイバーにライダーがかみつく。

殺気立つライダーが持ち上げたグラスにアーチャーは「あ、はい」とワインを注いだ。

全員のグラスにワインと特製ぶどうジュースを注ぎ終わったアーチャーは大河の隣に座る。

「それでは乾杯といこう」

「ふむ、ならば音頭は英雄王たる我がー」

「いただきます!! これでいいな!? よし、食べるぞ!」

ワイングラスを掲げて口を開きかけていたセイバー。

それをガン無視して料理に齧り付こうとするライダー。

その瞬間、空気が凍りついた。別にセイバーが怒って出した殺気が原因でも、ライダーの非常識にも程がある振る舞いが原因でもない。

言峰教会の方角から魔力の波動が放たれたのだ。

「ど、どうしたの?」

ただ一人、状況が分からずにいる大河はみんなの様子がおかしい事に気づき困惑している。

「監督役による緊急招集だ」

ウェイバーが言った。

「……どうやら、食事は中止だな」

セイバーは立ち上がりながら呟いた。

「くだらん。監督役の招集など無視すればいい」

そう言っつて、ライダーは食事を再開しようとするが、セイバーの殺気によって止められた。

「この招集は私のマスターも一枚噛んでいるらしい。行くぞ」

「何故、貴様のマスターの思惑に私達が乗らねばならんのだ?」

「決まっている」

セイバーは言った。

「奴は我に相応しき戦場を用意すると言った。だから、それまでの間は大人しくしていた。約束をしたからな」

そこにさっきまで呑気に笑い合っていたセイバーはいなかった。代わりに絶対的な覇者としての彼がいた。

「拒否は許さん。さあ、聖杯戦争を再開するぞ」

逆らえば殺す。彼の瞳はそう宣告していた。

ライダーは舌を打つと立ち上がる。イリヤスフィールを抱き上げ、惜しむようにアーチャーの手料理を眺めた。

コンカラーとアーチャーも続く。大河は場の空気が一変した事に気づきながら、目の前で湯気を立てている料理を哀しそうに見つめた。

「……待つて欲しいッス」

「拒否は許さんと言った筈だが？」

さつきまでとは一転してしまった彼の態度に怯えそうになるが、それでも大河は言った。

「あ、アーチャーが折角作ってくれたんす。だから……、無駄にしないで欲しいッス」

「……そうか」

セイバーは舌を打つと椅子に座った。

「はえ？」

戸惑う大河。

「おい、どういうつもりだ？」

ライダーが問う。

「……勝者の言葉には逆らえん」

「セイバー……？」

大河は不思議そうに彼を見つめる。

「未だ、我は貴様に勝てていない。その貴様が初めて口にした命令だ。それもまた、無碍には出来まい。これだけ食べたら出掛けるぞ」

「……っふ、そうだな。勝者には従わねばならん」

ライダーは再びお腹を鳴らしながら席についた。

「あはは。英雄王ギルガメッシュに騎士王アーサー、それに征服王ほく。三人の偉大な王に同時に命令を下した人間なんて、現在過去未来、どの時間軸を探しても君くらいなものだと思うよ」

楽しそうにコンカラーは言っただけで席に座った。

「ある意味大物だな……」

ウェイバーは乾いた笑みを浮かべながらコンカラーに続く。

「では、今一度乾杯といこうか。音頭は勝者たる君に頼むよ、マスタ―」

「えつと……、うん！」

アーチャーに促され、大河はぶどうジュースの入ったグラスを持ち上げる。

「かんぱいー！」

楽しい宴会。それは彼女にとって生涯忘れられないものになる。

例え、その後に待ち受けるものがなんであれ、その時の彼女は間違はなく幸福だったのだ。

だからこそ……、彼女は選択した。

◇

月明かりに照らされた教会内。そこにアーチャーは大河と共に訪れた。セイバー、ライダー、コンカラー、イリヤスフィール、ウェイバーも一緒だ。

残るサーヴァントの影は無く、代わりに使い魔がいる。

「……よく集まってくれた」

監督役である璃正神父の声が響く。

「少々、急を要する事態が発生した。よって、もったいぶった挨拶は省略させていただく。現在、諸君らの悲願へと至る道である所の聖杯戦争が重大な危機に見舞われている」

璃正の言葉によれば、聖杯戦争の舞台である冬木が群衆の注目を浴び過ぎているとの事。

それに際してのルール変更の告知が主だった。

サーヴァント戦を深夜0時から夜明けまでに定め、場所も聖堂教会が指定するフィールドを使う事。

大規模な破壊工作などは禁止。

そして、昼間は全員で一つの事件を解決へ尽力する事。報酬は令呪一画。

セイバー、ライダー、コンカラーの三名には不満などないようだ。実際、いつでもどこでも真っ向勝負で勝ちを狙える彼等にとって、このルールの変更は些細なことでは済まないだろう。

アーチャーにとっては戦術面を考えると迷うところだが、街の被害が最小限に抑えられる事や拒絶する事で大河が罰則を受ける事を考えると異議を唱える事は出来なかった。

「さて、君達に解決してもらいたい事件についての詳細を伝えておこう。新聞やニュースなどで知っている者もいると思うが、ここ最近失踪事件が相次いでいる。被害者の多くが幼子であり、下手人は調査の結果魔術師である事が分かった……」

璃正はサーヴァントやマスター、そして使い魔達を見回してから言った。

「目的は知らないが、これ以上聖杯戦争の存続が危うくする要素は容認出来ない。君達にはコレの排除を頼む。それでは、諸君の健闘を祈る」

第十五話 「聖杯問答？」

監督役による緊急招集を受けた日の翌朝、タイガ達は冬木市市民会館前に集合していた。

「それじゃあ、犯人探しに出発よ！」

イリヤスフィールがライダーに肩車をされながら言った。

「ふふふ、事件の真相は我が解き明かす」

昨日、聖杯戦争を再開すると宣言していたセイバーは虫眼鏡片手にノリノリだ。

「犯人探しと言っても、どこから探せばいいんだ？」

ウェイバーはもはや敵同士が普通に待ち合わせしている事に何も突っ込まなかった。

「聖堂教会がわざわざ参加者に捜査を命じるくらいだ。恐らく、犯人は聖杯戦争の参加者だ」

アーチャーの言葉に大河が驚きの声をあげる。

「参加者って、マスターやサーヴァントがやってるって事!？」

「それ以外に考えられん。わざわざ監督役が我々を捜査に動員する理由など」

手掛かりはない。分かっている事は犯人が聖杯戦争の参加者である可能性が高いという事のみ。

「ふはははは！ いいか、犯人探しの基本を教えてやる！」

楽しそうにシャーロック・ホームズを読んで齧った俄仕込みの探偵知識を披露するセイバー。イリヤとタイガが楽しそうに聞いている手前、アーチャーとライダーも止められない。

コンカラーはセイバーが持ってきた単行本を読むのに夢中。

「……いつ、出発するんだ？」

ウェイバーの呟きに応える声は無く、彼等が出発する頃には正午になっっていた。

「そう言えば、お前等は聖杯に何を願うんだ？」

結局、捜査を始める前に腹拵えをする事になり、近くのファミリーレストランにやって来た一行。

ウェイバーはハンバーグを食べながらおもむろに問いかけた。
なんとなく、気になったのだ。

「そういう貴様の望みはなんだ？」

まずいまずいと笑いながらコンンスープを啜るセイバーの言葉に
ウェイバーは墓穴を掘ったという表情を浮かべる。

「背を伸ばす事だよね？」

「違うよ!! 勝手に決めるな!!」

コンカラーの口を塞ぐウェイバーに「じゃあ、何を望むの？」とい
りや。

「ぼ、僕は正当な評価を得るために参加したんだ」

「正当な評価って？」

大河が聞くと、ウェイバーは時計塔で受けた不当な仕打ちについて
語り始めた。

折角寝ずに書き上げた論文。それをよりにもよって授業中に取り
上げ、笑い者にした教師。

彼は立ち上がった。魔術師の才能は血で決まるのではないという
主張を記した論文の正しさを証明し、教師の鼻をあかすために。

聞けば聞くほどみみっちい。

「そ、それで聖杯戦争に？」

大河でさえ、その理由はあんまりだと思った。

「そっだよ!! 悪いか!？」

「悪くないけど……」

大河とイリヤは呆れている。コンカラーは腹を抱えて笑い、ライ
ダーは端からウェイバーに興味がないらしく延々とパスタを食べ続
けている。

「……鼻をあかすか」

セイバーとアーチャーだけが表情を変えずにウェイバーを見てい
た。

「な、なんだよ……」

彼等にも馬鹿にされると思っていたウェイバーはセイバーとアー
チャーの反応に戸惑った。

「ウェイバー・ベルベット。君の望みは生き残りさえすれば叶うだろう」

「え？」

アーチャーの言葉に首を傾げる。

「ああ、貴様は勝者になる必要が無いな。もう少し成長すれば、貴様を笑う者はいなくなる」

「……て、適当な事言っただけで内心馬鹿にしてるだろ」

真剣な表情で何を言うかと思えば……。

不貞腐れたようにウェイバーが言うと、セイバーは笑った。

「信じる信じないは貴様の勝手だ」

そう言っただけで、セイバーは笑っているコンカラーを見た。

「それで、貴様は何を願う？」

「僕？ 僕は……、とくに無いかな」

「なんだと？」

コンカラーはコーラを口に含みながら言った。

「もつと大人になった僕なら受肉でもして、再び世界を征服しようとしたかもしれない。でも、今の僕はそれほど聖杯を求めていないんだ。こうして、一時の夢を楽しむだけで満足してしまう。ある意味、マスターが召喚してくれた時点で僕の望みは叶ってしまったているんだ」

「コンカラー……」

召喚される事自体が望み。そうした例は珍しくない。アーチャーの経験した聖杯戦争では戦いそのものを望み参加するサーヴァントもいたし、彼自身も目的は聖杯というより、聖杯戦争に召喚される事で《機会》を得る事が目的だ。

「そういう君は？ 僕としては英雄王の抱く願望に興味があるんだけど、聖杯に何を願うつもり？」

話を振られたセイバーは鼻を鳴らした。

「聖杯自体には我も興味など無い。万能の願望機など無くとも、我に叶えられぬ望みなど無いからな」

そう言った後に彼は笑みを浮かべた。

「だが、この戦い自体は素晴らしい。そうだな、貴様と同じだ。我も召喚された時点ではぼ望みが叶っていると見える。群雄割拠の時代を生き抜いた英傑達と矛を交える機会なんぞ、そうそう無いからな」
クククと笑うセイバーにウェイバーは呆れた。

「戦鬪狂かよ」

「そう邪険にするな。英雄の性というものだ」

コーラを一气飲みし、「たまらん」と満面の笑みを浮かべ、セイバーは十回目のおかわりをしようとしているライダーを睨んだ。

「おい、腹ペコキング。貴様はどうだ？ 何を願い、参加した？」

「……モキュモキュ」

「一端、喰うのを止めろ！ 貴様も王ならば、もう少し上品にだな……」

眉間に皺を寄せるセイバーにライダーは舌打ちをした。

「まったく、静かに食事も出来んのか、貴様等」

イラツとする物言いだ。セイバーの皺が一層深くなる。

「それで、願いだつたな。私も特に無い」

「え？」

意外そうに声を上げたのはアーチャーだった。

彼の知る彼女は確かに願いを持って聖杯戦争に参加していた。その願いは尊くも悲しく、愚かなものだったが、その祈りを持って戦う彼女に憧れた身としては、ライダーの言葉を捨て置くことが出来なかった。

「本当に無いのか？」

「《聖杯》に託す願もいなどない。私の今の目的はイリヤを勝者にする事だけだ」

嘘をついているようには見えなかった。彼女は心から聖杯を無用と考えている。

そんな馬鹿な……。アーチャーはライダーから目をそらす事が出来なかった。

彼女と彼が知るアルトリアとの違いは今までも幾つかあった。だが、これはあまりにも……。

「それより、私はお前の願いに興味がある」

そう言つて、ライダーが見たのは大河だった。

「え、わたし?」

ライダーは頷いた。

「イリヤも気になつてきているのだろうか? この話題になつてから、ずっと彼女を見ているじゃないか」

「……ええ、とつても興味があるわ」

それはまるで天使■ ■のような微笑み。とても愛くるしくて、とても優しく、何故か大河は既視感デジャヴュに襲われた。

「わ、わたしは……」

大河は言つた。

「ただ、この街を守りたいだけ……。この街に生きる者として、この街に根を張る極道の娘として、なによりー」

ノイズが走つた。何かを喋ろうとして、その瞬間脳が揺さぶられた。気持ち悪い。吐き気がする。

「ご、ごめん。トイレ行つてくる!」

「タイガ!」

タイガは慌てたようにトイレに駆け込む。慌てて追いかけようとするアーチャーをイリヤスファイルが止める。

「ちよつと、アーチャー。デリカシーが足りないわよ? わたしが見てくるわ」

そう言つと、彼女は立ち上がつて大河を追いかけた。

「ま、待て、イリヤ」

彼女の背を追いかけようとして、ライダーに腕を掴まれた。

「まあ、イリヤに任せておけ」

「……私のマスターに何か仕掛けたのか?」

体調の急変。それはイリヤスファイルと彼女の質問が切つ掛けだった。

殺意を向けるアーチャーにライダーは嗤つた。

「私達は何もしていない。それにこれからも彼女に何かするつもりはない」

「なに……？」

その言葉はあまりにも不可解だった。聖杯戦争において、マスターを殺す事は定石の一つだ。それをイリヤとアルトリアが否定するなど、彼の常識からは考えられない事だ。

「そう、不思議そうな顔をするな。彼女はあくまで迷い込んだだけの一一般人だ。巻き込まれただけの人間に手を下さなければ勝てない程、私達は弱くないというだけの事だ」

それは強者としての自覚と自信によるもの。確かに、彼女ならばそれだけ言っても大言壮語にはならない。

だが、妙に違和感を感じる。まるで、汚泥が絡みついてくるかのよう
に得体のしれない恐怖を覚える。

そう、それはまるで……、

「おい、いつまでくだらん事を話しているんだ？」

セイバーが口を挟んだ。

「女二人が便所に行ったただけだぞ。その程度で騒ぐな戯け共。それより、午後からは本格的に調査を開始するぞ。やはり、捜査の基本は聞き込みだ」

有無を言わさぬ語気で話を変えるセイバー。アーチャーとライダーの不穏な空気を払拭すべく、ウェイバーも乗っかかる。

「聞き込みって、そんなの聖堂教会が粗方済ませてるだろ」

「貴様、この我に意見するつもりか？」

睨まれて、ウェイバーは慌ててコンカラーに縋り付いた。

「あはは、あんまり僕のマスターを怖がらせないでくれないか？」

コンカラーは微笑みながら言った。笑顔なのに、不思議と寒気がする。
る。

「可哀想に、怯えてしまったじゃないか」

「べ、別に怯えてなんか！」

顔を真っ赤にして反論しようとするウェイバーの口に人差し指を当てるコンカラー。

「強がりは無駄だよ、マスター。君って、かなり分かり易いからね。それと、聞き込みが全くの無駄って意見には反対だな」

「ど、どうしてだよ？」

ウェイバーが聞くと、コンカラーは言った。

「そもそも、聖堂教会は本格的な調査なんてしていないと思うよ」
「え？」

不思議そうな顔をする主にコンカラーは微笑みかける。

「彼等はいくまでも傍観者だ。この街の守護者でも、聖杯戦争の参加者でもない。加えて、この時期にこの地で大量の失踪者を出すなんて、参加者以外にあり得ない。人の身では決して敵わない英霊を従えるマスターを止めるために進んで自分の身を投げ出す事なんてしない。そんな事をする聖者がいるなら、そもそもこの聖杯戦争自体を止める為に動いている。こうして聖杯戦争が続行している時点でそんな聖者はいないという事さ」

「な、なるほど……」

「マスターの相手は同じくマスターにしかな務まらない。失踪事件の犯人を見つける事も、捕まえる事も僕達にしかな出来ないわけさ」

コンカラーは言った。

「そういうわけだから、地道に頑張ろうよ、マスター」

第十六話 「イヤツス！」

犯人捜しは思うように進まなかった。なにしろ手掛かりが少な過ぎる。魔術の痕跡を辿ろうと試行錯誤を繰り返しているけど、いまいち成果が上がらない。

今はウェイバーくんの提案で川を調べているところ。そこから糸口が見つかるといいけど……。

「ねえ、タイガ！」

「わっ!? な、なに?」

川の水を採取しているウェイバーくんの背中を見てみると、急にイリヤちゃんが飛び掛ってきた。

「喉乾いちやったー」

「ありやりや。じゃあ、ジュースでも買ってくるね」

「わたしも一緒に行くー!」

さすが外国人。スキンシップが実に情熱的。サーヴァント達がゲームに興じている間、ずっとわたしが相手をしてあげたからか、随分と懐いてくれたみたい。

背中に抱きつく《子泣きじい》が落ちないように手を回し、わたしはアーチャーに声を掛けた。

「ちよつと、ジュース買ってくるね!」

「それなら、私もついて行こう。二人だけでは危険だ」

「えー、いいよ別に。すぐ近くの自動販売機で買ってくるだけだし」

「しかしな……」

難色を示すアーチャー。すると、セイバーさんが蔵から何やら綺麗な宝石を取り出した。

「おい、タイガ」

放り投げられた宝石を慌ててキャッチすると、彼はそれを首にかけろとジエスチャーした。

言われた通りに掛ける。

「それを身に付けておけ。一回限りだが、如何なる災厄からも貴様を守る」

「い、いいの？」

「駄目なら渡さん。貴様に死なれては困るからな」

「困るって……?」

セイバーさんは微笑んだ。

「貴様にはまだ負け越しているからな。我が勝つまで死ぬ事は許さん」

それっきり、セイバーさんは持参した小説を読み始めた。

既に捜査開始から三日が経過している。初日こそ張り切っていた彼だけど、二日目からは飽きてきたらしく、暇さえあれば読書に没頭している。シャーロック・ホームズシリーズにハマってしまったみたい。

コンカラーくんも彼と背中を合わせて別の小説を読んでいる。彼はイーリアスにご執心だ。

「これがあれば安心だよな？」

宝石を指でつつきながら言うと、アーチャーは渋い顔をした。

「しかし……」

「アーチャー」

尚も渋るアーチャーにライダーさんが言った。

「しつこい男は嫌われるぞ」

その言葉に彼はシヨックを受けた表情を浮かべた。

「それじゃあ、ちよつと行ってくるね！」

わたしはイリヤちゃんを背中に抱えたまま走りだした。

アーチャーの気持ちは嬉しいけど、彼は少し過保護過ぎる。たまには息抜きをさせて欲しい。

四六時中《心配オーラ》を向けられ続けるのは結構キツイ。

「飛ばすよー！」

「わーい！」

イリヤちゃんと二人つきりになると、大分肩の力が抜けた。

近くにある筈の自動販売機に向かって走ると、心が晴れやかになった。

「イリヤちゃんは何が飲みたい？」

「うーん。今の気分はオレンジジュースかなー」

「オレンジね」

自動販売機に到着すると、私は大変な事に気がついた。

その自動販売機にはオレンジジュースが無かったのだ。その事を彼女に伝えると、途端に癩癩を起こした。

「ヤダヤダ！ わたしはオレンジジュースが飲みたいの！」

「わー、わかったよ！ 他の自動販売機を探そう！」

慌ててなだめすかしながら、他の自動販売機をあたる。ところが運の悪い事にどれも外れ。

「ねー、どうしてもオレンジジュースじゃなきゃダメ？ リンゴジュースとかコーラじゃ……」

「ダメなの！ ダメダメ！ わたしはオレンジジュースがいいの！」

気が付けばみんなのいる場所から随分と遠ざかってしまった。

「……ねえ、君達」

漸く、オレンジジュースが売っている自動販売機を発見して喜んでいると、急に声を掛けられた。

どこか軽薄そうな男の人。年齢はわたしよりも少し年上に見える。

「な、なんスか？」

「ちよつと、道を聞きたいんだけど」

ホツとした。いつの間にか人気のない場所に来ていたから、変な人に絡まれてしまったのかと思った。

「いいツスよ。どこに行きたいんスか？」

「地図を見てもよく分からなくてね。……ここなんだけど」

そう言つて、彼はポケットから地図を取り出した。その一点を指さしている。

よく見ようと彼に近づくと、わたしは咄嗟に飛び上がった。

「あれ？」

足払いに失敗した彼は戸惑っている。

前言撤回。どうやら、変な人に絡まれてしまったみたいだ。

彼の瞳を見る。そこには値踏みするようなイヤラシさが垣間見えた。

「悪いけど、ナンパはお断りだよ」

伸ばしてきた手を蹴りあげ、そのまま彼の脇腹を蹴り飛ばす。手加減はしたから怪我はしていない筈。

「行くよ、イリヤちゃん」

わたしは返事を聞かずに走りだした。

気づけばみんなが待つている川辺の近くまで戻って来ていた。

「すごいよ、タイガ!」

疲れ果ててイリヤちゃんを降ろすと、彼女は興奮したように瞳を輝かせていた。

「ビシッ、バシッって、魔術師でもないのに!」

「えへへ、これでも武闘家だからね」

「すごいすごい! ねえ、わたしにも出来るかな? こう、バシッと!」

さっきのわたしの真似をして蹴りのポーズを決めるイリヤちゃん。

「もっと、脇を締めて。こうだよ!」

褒められて嬉しくなり、わたしはついつい藤村家に代々伝わる門外不出の藤村殺法を一つ伝授してしまった。

夢中になっていると遠くからアーチャーが駆け寄ってきた。

「遅いじゃないか」

「あはは、ごめん。ちよつと、イリヤちゃんにキツクの仕方を教えてて」

「キツク……?」

困惑しているアーチャーにイリヤちゃんはニヤリと笑い、教えたばかりのキツクを放った。

「といやー!」

可愛らしい掛け声と共にアーチャーの股間を蹴り上げる。

ところが、アーチャーは悲鳴一つあげない。

「……タイガ。それに、イリヤ」

ゾクツとした。彼の顔を見上げると、そこには笑顔があった。ただ、笑顔なのに凄く怖い。

「淑女としての嗜みについて、一つ説教してやる必要がありそうだな」

結局その後、ウエイバーくんの調査が終わるまで延々と私達はアーチャーのお説教を聞かされ続けた。

涙目になるわたし。すると、イリヤちゃんがわたしの脇を小突いた。

「タイガ。日本では武道の先生をシシヨーって呼ぶのよね？」

「そ、そうだけど……」

「じゃあ、わたしもタイガの事、シシヨーって呼んでもいい？」

「し、師匠？ わたしが……？」

「うん！ シシヨー！」

その響きはとても心地よいものだった。

師匠。なんと甘美な……。

「もちろんいいよ！ じゃあ、イリヤちゃんはわたしの弟子一号って事だね！」

「弟子一号か……。うん！ わたし、弟子一号！」

そんな風にわたし達が楽しく話していると、ウエイバーくんは落胆した様子で川の調査の結果を口にした。

結局、今日も進展無し。明日で四日目だ。

あれ？ 何か忘れているような……。



「明日で七日だな」

帰り際、セイバーさんがつぶやいた。

「ここまでか……、存外悪くない時間だったか」

その言葉の意味をわたしは思い出した。

アーチャーから聞いた話だ。彼は六日前の晩、宝具を発動した。それは七日以内に決着がつかなければ全てを破壊するもの。

その期限がついに明日切れる……。

「セイバーさん……？」

そんなの冗談に決まってる。数日一緒に過ごして、彼の人となりは分かったつもり。

悪い人じゃない。それどころか、陽気でやさしい。そんな人が街を……何の罪も無い人達を殺す筈がない。

「今夜、我は監督役が指定する戦場で待つ。我が宝具を止めなければ、挑むがいい。さもなければ、明日、この地は滅び去る事になる」

「ま、待ってよ！ 冗談なんだよね!」

「冗談?」

わたしの叫びに対して、セイバーさんは苛ついた表情を浮かべた。尻込みしそうになるけど、わたしは必死に声を振り絞った。

「セイバーさんは戦いが好きだから、みんなのやる気を出させる為に大げさに言っただけなんだよね?」

「タイガ」

セイバーさんはわたしに今まで見た事のない冷たい視線を向けた。

「我が嘘をついた事があるか?」

「で、でも……、だって!」

「この街の者を見捨てるつもりなら、そのまま愚かな妄想に浸っている。その果てで貴様が如何に後悔しようが我には関係がない」

「だって、まだ犯人を見つけてもいないんだよ!? 捜査はどうなるの!?!」

セイバーさんは嗤った。とても、とても怖い笑顔を浮かべた。

「知りたいのなら、我を倒してみろ」

「え?」

「我が宝具からこの街を救い、尚この街に忍び寄る悪意を打ち払いたくば、貴様が挑め」

「どういう事……?」

まるで、犯人を知っているかのような物言いだ。

「前に言った筈だぞ、我は全知全能だと」

「知ってたって事……? なら、どうして……」

「これも言った筈だ。存外、悪くない時間だったと……」

「セイバーさん……」

セイバーさんはいつものように微笑んだ。

「先に言っておいてやろう。知れば、貴様は確実に後悔する。それでも、真実を求めるのなら止めはしない。その力の限りを我にぶつけることだな」

それだけを言い残すと、セイバーさんはわたし達に背中を向けた。
「待ってよ！ わたしに勝つって言うってたじゃない!？」

返事は返ってこなかった。彼は背中を向けたまま歩き去り、そのまま姿を消した。

取り残されたわたし達は互いに顔を見合わせた。

「どうしよう……」

「どうするって……、アイツと戦うしかないだろ」

ウエイバーくんが言った。

「だって、相手はセイバーさんだよ!? 一緒に、いっぱい遊んだ友達だよ!？」

「友達じゃない」

そう言ったのはアーチャーだった。

「タイガ。奴はあくまでも私達の敵だ。ライダーとコンカラーも。それを忘れるな」

「敵じゃないよ！ だって、あんなに楽しかったじゃない!!」

気づけば涙が溢れていた。

「友達だよ!! 一緒に笑ったり、遊んだりする人を友達って言うんだよ!!」

「タイガ……」

イリヤちゃんが蹲るわたしの頭を撫でた。

「少し休んだ方がいいわ」

不思議な感覚。まるで、闇の中に沈んでいくかのような気分。わたしは意識を失った。

I n t e r l u d e

ランサーのマスターだった男は恋人と共に縛り付けられていた。逃げ出そうにも、生命活動ギリギリまで魔力を絞り取られている為に魔術を使う事も出来ない。

ただ、この屈辱を与える目の前のサーヴァントを睨む事しか出来ない。

「すまないな。だが、君もマスターになると決めた時点で覚悟は決めていた筈だ」

アヴェンジャーは彼と彼女から供給される膨大な魔力をマスターとその姪の治療の為に使いながら言った。言峰綺礼の尽力によって一命を取り留めたものの、二人は予断を許さない状態。聖杯戦争が終結するまで、その生命を繋ぎ留めておく為には定期的に治癒魔術を掛ける必要がある。

ランサーを討伐した後、彼が直前に見ていた《崩落するホテル》に向かって走り、そこで魔術を行使している男女を見つけ、拉致した。彼等と半ば強引にラインを結び、魔力の貯蔵タンクになってもらっている。時計塔のエリートと言えど、湖の妖精から直接魔術の手解きを受けた彼と比べれば稚児同然。抗う事は出来なかった。

ネットワークだった魔力の問題が解決した事でアヴェンジャー次なる行動を思案している。ランサーが脱落した後、他の陣営は監督役から命じられた任務を遂行する為に街中を駆け回っている。一見すると不意打ちが容易に見えるが、あの四騎のサーヴァントを同時に相手取る事など自殺行為でしかない。だが、今宵必ず機会が訪れる。セイバーの宝具発動を阻止するためにライダー達がセイバーと戦う筈だ。最強のセイバーといえど、三騎のサーヴァントと戦えば無事では済まないはず。どちらが生き残っても、彼等は満身創痕になっている事だろう。そこを狙うつもりだ。

問題となってくるのは最後の一体。恐らく、街を騒がせている失踪事件の犯人は未だ姿を見せない七体目のサーヴァントだ。キャスターか、アサシンか、あるいはバーサーカーかもしれない。彼自身や

コンカラーのように基本のラインナップから外れたイレギュラーの可能性もある。いずれにしても、表舞台に引き摺り出す必要がある。万が一、一騎打ちで敵わない相手の場合、セイバー達を倒した後では厄介な事になる。マスター達の為にも敗北は決して許されない。

セイバー達が犯人探しに奔走している間、彼も手掛かりを探し歩いていた。その結果、一人の男にあたりをつけた。街中で頻繁にナンパをしていた軽薄な男だ。魔力を使った形跡があったわけじゃない。ただ、その目を見た瞬間、彼はその男を《人殺し》だと判断した。嘗て生きた戦場で、人を殺す快楽に取り憑かれたものを何人も見てきた。あの男はそうした者達と同じ目をしている。

「待っていてくれ、マスター」

アヴェンジャーはケイネスを魔術で眠らせると、夜天の下で動き出した。使い魔に波長を合わせる。すると、脳裏に使い魔の視界が映り込んだ。

現在の時刻は20:00ジャスト。セイバー達の戦いが始まる前に敵の正体を暴き出す。

フオー・サムワンス・グロウリー
「己が栄光の為でなく」

彼の姿が変化していく。またたく間に一人の可憐な少女に変身したアヴェンジャーは容疑者の下へ向かった。

男は街灯の下で道を歩く若い女性を品定めしていた。アヴェンジャーはただ彼の前を通り過ぎるだけで良かった。それだけで彼は動いた。

「ねえ、君」

男は雨龍龍之介を名乗り、道案内を求めてきた。怪しまれないよう、多少抵抗する素振りを見せると、彼は警戒心を解く為に世間話を始めた。

見事なものだと感心する。彼の言葉は実に巧みだ。そうと知らなければ、気付かぬ内に心を開いてしまう。彼に口説かれた女性は旧来の恋が実ったように錯覚する筈だ。

アヴェンジャーは彼の思惑に乗ることにした。恋する乙女を演じ、彼が導くまま、街を歩いた。

脆弱な肉体。少し力をこめるだけで容易く肉塊に出来る。だが、彼がマスターだという確証がない。姿を隠している第七のサーヴァントを視界に収めるまで、仮初の恋人を演じるとしよう。

◇

アヴェンジャーが第七のサーヴァントの搜索に出掛けた直後、間桐邸の地下では一人の少女が目を覚ましていた。

「……アサシン」

少女が呼び掛けると、暗闇にぼんやりと白い骸骨の面が浮かび上がった。

まるで、《死》そのものが実体を持ったかのような、その存在こそが第七のサーヴァント。

アヴェンジャーが探し求めていた筈の姿なき最後の敵は彼がさっきまでいた空間内になかったのだ。

「アヴェンジャーを今失うわけにはいかん。隠れて追跡し、万が一の場合は援護せよ」

髑髏は少女の命令に応え、闇に溶けていく。

残された少女は寝息を立てているケイネスとその恋人であるソラウを見下ろした。

少女が浮かべるにはあまりにも不釣り合いな禍々しい笑みを浮かべ、その体に指を這わせる。

「良い素材だ。あやつが戻ってくるまえに仕上げてしまおう」

そのまま、少女の指が女の皮膚を突き破り、肉をかき分け内部へ侵入していく。その激痛を受けて、ソラウは目を覚ます。

だが、その口が開く事はない。既に肉体の支配権は少女に移っている。

「良い顔だ」

少女の指が動く度に脳髓を焼くような痛みが走る。涙を浮かべる事さえ許されず、ただ弄られ続ける。

やがて、少女が指を離すと、女はその傷口を見て意識を失った。傷口から男性の陰茎を模した芋虫が這い出て来たのだ。しかも、一匹や二匹ではない、ぞろぞろと湧き出てくる。

女はその激痛で再び目を覚ましてしまう。そして、気付く。内側から食べられている事に……。

「上質な素体のおかげで十分な量を確保する事が出来たな」

女は皮膚と骨を残して全て蟲に変えられた。その内の一匹を眠り続ける雁夜の口に運ぶ。そして、ケイネスの口にも。

「さて、お前達にも働いてもらうぞ。休息は十分にとれたはずだ」

第十七話 「暗黒神殿」

地獄とは人が創り出した概念だ。今の世の地獄に対するイメージはダンテ・アリギエーリの神曲による影響が大きい。

人は死後、地獄に落ちる。それは宗教に縁の浅い者でさえ心のどこかで信じている。

どんなに品行方正で清貧な生き方をしても、人は後ろめたさを感じる生き物だからだ。

その罪悪感が悍ましい世界を空想させる。いずれ、己の罪を精算する為の場所を求め、それに相応しい痛みや苦しみを夢見る。

結局、《地獄》も《地獄のような光景》も創り出すのは人間だ。

「……はは」

アヴェンジャーはこの光景を前にも見た事がある。

全てが終わった跡。誰一人救えず、誰一人守れず、ただただ、失われたモノに涙を流す事しか出来ない。

そこに死者は一人もいない。だが、生者も一人としていない。

「ははは……ッ、アツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

楽器がある。家具がある。他にもたくさん。

全て、人間を材料にして作られている。

もはや、人としての原型など一切留めていない。なのに、彼等は生きていく。生かされている。生かされながら、殺されている。

「なんとという事だ……、なんとという事だ!!」

アヴェンジャーは喜んだ。

この世にはこれほどの悪がいる。それがどれほど嬉しい事か他人には到底理解出来ないだろう。

「……ああ、私などよりもずっと罪深い」

裏切り者。不埒者。痴れ者。多くの罵倒を浴びた。それだけの事をして来たのだから、仕方のない事だ。

口元が歪む。

「騎士として、許し難い蛮行だ」

穢れに満ちた剣を振り上げる。

「哀れな者達よ。必ずや、君達の無念は私が晴らす」
彼は復讐者。彼の望みは罪を濯ぐこと。騎士の誇りを取り戻すこと。

悲劇の主人公とヒロインを救うよりも、この地獄を造り上げた悪を滅ぼす方が騎士の名誉を取り戻すのに相応しい。

「だから、待っていてくれ」

アヴェンジャーは地獄の底へと進んでいく。殺してくれと懇願する者を無視して、助けてくれと縋る者をはね除けて、彼は自らの騎士道を貫くために突き進む。

そこには一人の聖女がいた。両腕両足をもがれ、石版に埋め込まれながら呻き声をあげる白い髪の女。

その前にあの男が立っていた。アヴェンジャーが第七のサーヴァントに關係する者だと当たりをつけていた男。

アヴェンジャーをこの地獄に連れて来るなり、手錠を掛けるだけで奥に引っ込んでいた彼は楽しそうに拷問器具を見繕っていた。

「あれ？ あんた、誰？」

アヴェンジャーは微笑んだ。

「……そうだな。正義の味方とでも名乗っておこうか」

◆◆

もうすぐ、日付が変わる。静かな夜。黄金の鎧を纏うサーヴァントが円蔵山の麓にある柳洞寺の山門に立っている。

ここが監督役の指定した戦場だ。

「時臣よ」

セイバーは背後に控える自らの召喚者に笑い掛けた。

「楽しかったぞ」

その言葉に時臣もまた、微笑む。

「それは何よりでございます」

時臣はセイバーが現世の娯楽にうつつを抜かす事を終始咎めなかった。それは彼が約束を守ってくれているからだ。

戦場を用意するまで、大人しくしている。戦闘を望み召喚に応じた彼にとって、それが如何に意にそぐわぬ事か彼の記憶を夢で見た事で

知ったからだ。

彼は超越者として世界に君臨していた。神々が人の世を裁定する為に地へ使わせた者、英雄王・ギルガメッシュ。

誰もが彼に傳く世界。彼は常に退屈していた。

その退屈を紛らわせたのが彼の親友であるエルキドゥ。彼との出会いが退屈を持って余していた王を冒険に駆り立てた。

友と共に駆け抜けた黄金の日々。彼の隣には常に親友の影がある。この戦いは彼にとって、あの日々の冒険の続きなのだ。

だからこそ、時臣は彼の望む事に何も口出しをしなかった。ただ、彼の為に戦場を整えた。王が思うがままに戦えるよう、この地の周辺から人を余さず退去させてある。

「どうか、御身の心行くままに」

世界を支配した王。そのカリスマは魔術の世界にどっぷりと浸かり続けてきた堅物をも虜にした。

「我が召喚者よ。よくぞ、我をこの戦いに招いてくれた！ そしてー」

セイバーは眼下に立つ英雄達を見下ろした。

「よくぞ来たな、歴戦の英雄達よー」

この六日間。彼等と過ごした時間は確かに楽しかった。

現世の娯楽は素晴らしく、飽いてる暇など無かった程だ。

それもここまでー

「天を見よ！ 滅びの火は満ちたー」

セイバーが指差す先、そこには黄金の光が浮かんでいる。《眼》の良者は気付く。それが衛星軌道上にある事を。

午前0時、そこに最後の火が灯る。

「この街を守りたければ、祈りを叶えたければ、我と決着をつけたければ挑むがいい！」

彼の背後の空間が揺らぐ。黄金の水面から顔を出す無数の宝具はどれもAランクを超える一級品ばかり。

それが彼の示す、彼等との日々に対する返礼。

今宵、最強の英霊は一欠片の慢心も無く、一欠片の油断も無く、全

身全霊を戦いに注ぎ込む。

「さて、行こうか、ブケフアラス！ 蹂躪を始めようじゃないか！」
コンカラーは愛馬の首を撫で、爛々と瞳を輝かせる。

偉大なる人類最古の王。彼が夢見た世界の全てを手に入れた霸王。
これ以上、蹂躪のし甲斐がある相手などいまい。

彼の愛馬にして、英霊であるブケフアラスもまた、その闘争心を燃え上がらせている。

「さて、回り道をさせてくれた返礼をしてやらねばな、ラムレイ」
ライダーは竜を思わせる全身鎧を纏い、魔馬の腹を蹴る。その仮面の内側で禍々しき形相を浮かべながら、剣に纏わせていた風の守りをラムレイに纏わせる。

そこから数キロ離れた場所ではアーチャーが弓を構えている。

「……英雄王よ。生前に出会った君はまさしく暴君だった。苦い思いを散々させられたよ」

アーチャーはこの一週間を思い出して微笑む。

「君のおかげで藤ねえは凄く楽しそうだった。その君が戦いを望むなら、私も全霊でお相手しよう」

今日までの楽しかったとさえ思える日々が異常なら、この戦いもまた異常だ。

そこに恨みも怒りもない。なのに、手を抜く気など一切起こらない。

「……ああ、これが英雄の戦いなのだな」

その果てに求めるものなどない。その戦いこそが求めるものなのだ。

それが英雄と呼ばれる者達の戦場。セイバーが望んだもの。戦いという者を人という種が延々と続ける理由。

人を殺す事は悪であり、糾弾されるべきだ。

それは戦争も例外ではない。多くの人間を殺し、英雄と呼ばれた者も結局は罪人なのだ。

それでも、人は剣をとる。

「幼い子供は些細な事で喧嘩をするものだ。でも、それは大人になっ

ても変わらない……。そういう事だな」

それが人の本質なのだ。互いの意思をぶつけ合う為に言葉や体を使う。

エスカレートしてしまえば悲劇を生み出すだけの災厄になり下がるそれも、人が人である為に欠かせないものなのだ。

それを躍起になって取り除こうとしてもうまくいく筈がない。

散々迷い、尚至れなかつた答えにこんな喜劇のような状態で気付く事になるとは……。

「正義の味方……か、笑ってしまふな」

それを目指すなら、まずは《人》を知らなければいけなかつた。

それが《正義の味方》の第一歩。それを教えてくれる人はとても近くにいた筈なのに。

英雄達はそれぞれの思いを胸に動き出す。

この日、全ての決着がつく。



戦いの音が聞こえる。イリヤスフィールの魔術で眠らされた大河は自宅のベッドで目を覚まし、二人から事の経緯を聞いた。

アーチャー達はセイバーと決着をつけにいった。出発した後起こされた理由は彼女自身も分かっている。

「止めちゃいけない事なのかな……」

涙を浮かべる大河にウェイバーは困り果てた。

彼女が至って普通の……。とは言い難いかもしれないが、魔術の世界とは無縁に生きてきた事はこの一週間でよくわかった。

芯が強くて、心優しい、普通の女の子に殺し合いを肯定させる言葉など思いつかない。

「タイガはやさしいねー」

ウェイバーが悩んでいると、イリヤスフィールに先を越された。

「思ったとおりだよ」

ニコニコと笑顔を浮かべる小さな妖精。ウェイバーは少しホツとした。彼女ならうまく大河を慰める事が出来るだろうと。

だから、咄嗟に動く事が出来なかつた。

「……は？」

腹部に深く突き刺さる刃。痛みが遅れてやってくる。

なんらかの魔術を仕込まれたのだろう。彼の意識は一瞬で闇に呑まれた。

第十八話 「かつこいいツス！」

最初にマスター達へ及んだ危機を感知したのはコンカラーだった。主の受けた苦痛がラインを通じて彼に届く。

「ローローマスター!!」

コンカラーの表情が歪む。今直ぐにマスターの下へ駆けつけなければいけない。だが、既に戦闘が始まってしまっている。

セイバーの性格上、一度始まった戦いを中断してくれる筈がない。降り注ぐ無数の宝具。ブケファラスの疾走を止めれば、瞬く間に肉塊へ変えられてしまう。

如何にセイバーと言えども、三対一では一方的な勝負になると思っていた。ところが、蓋を開けてみれば有利である筈のコンカラー達が押されている。

あの化け物染みた戦闘力を持つライダーと打ち合いながら、コンカラーを逃さない為に宝具の豪雨で檻を構築し、遠方から飛来するアークチャーの狙撃を盾の宝具で完璧に防ぎ切っている。

隙が全く無い。次元が違う。まるで、神に挑んでいるかのようだ。「ブケファラス!!」

それでも、この戦線から離脱して主の下へ向かわなければいけない。彼の命が一秒毎に弱まっていく。

縦横無尽に飛び交う宝具の嵐は掠るだけで消滅を免れない凶悪なものばかり。

だが、幸か不幸かセイバーはコンカラーに対して逃がさない程度の注意を向けているだけだ。

さすがに包囲網を抜けようとしたら気付かれて、仕留める為の攻撃にシフトするだろうがローロー、

「マスターを助けに行くぞ!!」

コンカラーは天を仰ぐ。

「偉大なる我が父よ、御身の力を貸し与え賜えローロー、雷霆招来!!」

雲一つ無い空に一筋の亀裂が走る。その彼方より、白き雷が降り注ぐ。

「……未だに、私をそう呼ぶのだな」

ライダーは不機嫌そうに呟いた。

「今の貴様は騎士王で間違いなからう。例え、それが仮初のものであろうと、貴様はその姿を選び、その在り方を真似た。ならば、何も問題などあるまいよ」

セイバーの言葉にライダーは舌を打つ。

「……お前は姿形がいくら違ってても、やはり嫌なヤツだよ」

ライダーは言った。

「そう嫌うな。我は貴様の事を気に入っている。よくぞ……、逃げも隠れもせずに参戦してくれた。一度口にした言葉を違えば、我の王としての威厳に水を差す事になる」

「戯言を……。貴様だけは何としても排除しなければならぬ。ただ、それだけの事だ！」

「ならば、全霊をもって挑め！」

「そのつもりだ！」

二人の王の戦いは苛烈を極めていく。さつきまでの戦いが単なる遊びだったかのように、天候を掻き乱し、大地を焦土に変え、それでも尚、際限など無いかのように疾く、重く、激しく剣を振るう。

片や相手を滅ぼす為に、片や相手を律する為に――……。

◇

コンカラーがマスターの下に辿り着いた時、既にアーチャーが到着して傷を負ったマスター達の治療に当たっていた。

「アーチャー！ マスターは!?!」

「……不幸中の幸いというやつだな。二人共急所を外している」

手当が終わったらしい。ウェイバーと大河は穏やかな寝息を立てている。

「治癒魔術の心得が？」

「そんなものは無いさ。それに近い事が出来る宝具を使った」

「あはは……、便利だね」

主が無事だった事に安堵の表情を浮かべるコンカラー。だが、直ぐに気がついた。

「二人……?」

嫌な予感がした。

「ねえ、イリヤはどこ?」

「……奪われた」

怒気を滲ませてアーチャーは言った。

「アサシンだ。二人にトドメを差す直前だった……」

アーチャーは近くの机から宝石を取り出した。

「まったく、こんな事だろうと思った」

その宝石は以前、セイバーが大河に渡した宝具だった。

「身に付けていなかったのかい!」

「ああ、そのようだ。起きた後、返すつもりで外したのだろう」

アーチャーは宝石を眠る大河の首に掛けた。すると、ゆっくりと彼女のまぶたが動き始めた。

「タイガ!」

アーチャーが声を掛けると、大河は目を覚ました。

「……あ、れ?」

自分が眠っていた事、目の前にアーチャーとコンカラーが武装した状態にいる事に戸惑っている。

「わ、たし……どうして……、あつ」

急速に記憶が蘇る。

刺されたウエイバー。そこに現れた骸骨の仮面を被る黒衣の男。

男は彼女にもナイフを突き立て、更にその首へ凶刃を向けた。

そして……、

「イリヤちゃんは!」

大河はアーチャーを見た。意識を失う直前、彼が現れたのを覚えて
いる。

「すまない……」

「うそ……」

イリヤが攫われた。魔術師ではない大河にも、ここ数日の間に知った知識を下に推測する事は出来る。

攫われたマスターがどんな目に合うか……。

「助けに行かなきゃ!!」

飛び出そうとする大河の襟をコンカラーが掴む。

「はい、ストップ。どこに居るのか見当でもついているの?」

「わ、わかんないけど……、でも!!」

必死な表情を浮かべる大河。

イリヤの身に危険が迫る。その事を想像すると寒気がする。首を切り落とされそうになった時よりもずっと怖い。

「……じゃあ、わたしもタイガの事、シシヨーって呼んでもいい?」

彼女と過ごした一週間が脳裏を過る。

「イヤだ!! イリヤちゃんにもしもの事があつたら……、そんなの絶対にイヤだ!!」

大河は泣き喚いた。コンカラーに離してくれと懇願した。

その騒ぎでウェイバーも目を覚ます。

「……なにごと?」

アーチャーは手短かに事情を説明した。

「アサシンか……」

ウェイバーは慌てふためく大河を見て、少し冷静に考える事が出来た。

今の段階で彼らが把握しているサーヴァントはセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、コンカラーの五体だった。それぞれのマスターも遠坂時臣、藤村大河、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、ウェイバー・ベルベットだと判明している。

残る二体のサーヴァントとは未遭遇。その内一体は確実に御三家の一画である間桐のものだ。

「コンカラー」

ウェイバーは大河を掴んでいるコンカラーに声を掛けた。

前よりも背が高く、顔も精悍になっている。恐らく、以前聞いた二つ目の宝具を使ったのだろう。魅了のスキルがダウンする代わりに神性とステータスが永久的に上昇するものだ。

「なんだい?」

「今から間桐邸に強襲を掛ける。出来る限り不意を突きたいから、僕が先行して、令呪を使うよ」

「え?」

その言葉にコンカラーだけではなく、大河やアーチャーまでもが困惑の声を発した。

「な、なんだよ……、その変な反応は」

「いや……、どうして間桐邸なんだ?」

アーチャーの問いにウェイバーは逆に首を傾げた。

「後、サーヴァントが判明していないマスターの内、拠点が判明している場所がそこしかないからだよ。完全なバクチになるけど、モタモタしている時間はない。間桐邸が違うなら、そこからは街中を虱潰しで探すしかないんだ。正解でも不正解でも、とにかく動かないと間に合わなくなる」

「どうしちやっただの、マスター。なんか、すごくかつこいいよ」

以前までの彼ならともかく、頬を赤らめながら乙女みたいな仕草をされると若干気持ち悪い。

ウェイバーはゲンナリしながら言った。

「別に……、あんなチビっ子が危ない目に合うのってなんか……アレだと思っただよ! ほら、そこをどいてくれ!」

魔術師として失格だが、それでも思ってしまったのだ。敵なのに、魔術師なのに、助けたいと……。

傍若無人な王様達とお姫様に振り回され、過ごしたこの一週間は本当に楽しかった。英雄達がこぞって戦いを先延ばしにする程、誰にとっても楽しい一週間だった。

陰湿な魔術世界では味わえない穏やかな時間。

「それにアイツは僕を刺したんだぞ! やり返してやらなきや気が済まないね!」

そう言っ出て行こうとするウェイバーの腕を大河が掴んだ。

「待って!」

「なんだよ? 言っておくけど、お前は連れて行かないぞ。令呪も使

えない以上、お前に出来る事は何もない」

冷たく言い放つウェイバー。その本音が分かってしまいが故に大河は涙を流した。

「……連れて帰って来てね？」

「当たり前だろ」

外へ飛び出していくウェイバーを大河は追わなかった。ついに行けば邪魔になる。それを理解出来てしまう自分が腹立たしい。

「……大丈夫だ、マスター」

アーチャーは言った。

「彼はいずれ偉大になる素質を持っている」

「……ずいぶん、詳しいんだね」

まるで彼の未来を知っているかのようなアーチャーの口振りにコンカラーがつぶやく。

「彼とよく似た人物を知っているだけだよ。誰からも慕われ、大きな力を持つようになる。本人の望んだものとは違うかもしれないがね」
「ふーん……。そっか、見てみたいな」

コンカラーは微笑んだ。

「願いなんて無かったけど、あの英雄王や君がそこまで太鼓判を押すなら、マスターの歩む道を見守りたくなっちゃったよ」

「きつと、彼は君の期待を裏切らないよ」

アーチャーの言葉にコンカラーは頷いた。

「さっきの彼は凄くカッコ良かった。……さて、そろそろかな」

ここは深山町にある藤村の家。ここから間桐邸までの道のりは魔力で強化した魔術師にとってそう遠くない。

コンカラーは大河を見つめた。

「待っててよ。必ずお姫様を助けだしてくるからさ」

「……うん。お願いね、コンカ……。ううん、アレキサンダー」

コンカラーがニッコリと微笑むと同時に光が走った。令呪による強制召喚だ。

「さて、私も援護に回ろう」

アーチャーは弓を投影すると、窓から屋根に上った。

そして――、視た。

「……あれは」

間桐邸に立ち上る暗黒の光を……。

第十九話「Sei personaggi in c
erca d' autore」

アーチャーはその闇の光を以前にも二度目撃していた。その暗黒を最初に目撃した日、彼は全てを失い、二度目に目撃した時は……。

「投影開始」

創り上げる。あれが本格的に活動を開始すれば手遅れになる。

ウェイバーの推理は正しかった。アサシンのマスターは間桐であり、おそらくは《あの老獪》も動いている。

「イリヤ……」

投影した宝具を弦に番えながら、囚われている筈の少女の泣き顔を想像してしまう。

苦悩がその手を絡めとる。一度救えなかった少女。もしかしたら、救えるかもしれない大切な人。

彼の心はいつの間にか生前の頃……それも、まだ未熟だった若い頃の状態に戻っていた。心を鉄に、体を剣に、ただ悪夢の元凶となるものを取り除く装置に戻るには少しの時間が必要だった。

その僅かな時が全ての明暗を分けた。

◆ 間桐邸に立ち上った闇が一気に広がり、彼の意識は途切れた。

「……そして、わたしは目を覚ました。

いつ眠ったのかも、今どこで寝ていたのかも分からない。

「起きろー、タイガー！」

「え？ え？」

目を開けると、そこにはたくさんの人があった。

「まったく、藤ねえは……。寝るならせめて炬燵じゃなくて、布団で寝てくれよ」

知らない男の人が困ったように言う。

「先輩！ 藤村先生はずっと待っていてくれたんですよ！」

知らない女の子が怒っている。

「はいはい、そこまでにしてやってよ桜。そいつもそいつなりに色々頑張ってたわけだし」

知らない女性が二人を宥めている。

「ねえ、タイガ」

知っている女の子がたった数時間見ない内に急成長を遂げていた。

「折角、シロウが帰って来たんだよ？ はやく起きてよ！」

「イリヤ……ちゃん？」

「もう、寝ぼけてるの？」

目を擦りながら周りを見る。

知らない場所で知らない人達に囲まれている。だけど、何故か気持ちが悪く落ち着く。

まるで、漸く居るべき場所に帰ってくる事が出来たような気分。

「……大丈夫か？」

赤毛の男性が心配そうに私を見つめる。

「あ……っ」

何故か、彼と会えた事が嬉しくなった。

涙が溢れる。

「士郎!! もう!! もう!! 全然帰って来ないから、お姉ちゃんは心配してたんだぞ!!」

気が付けば、そんな言葉を口にして、彼に関節技を決めていた。

「イテエエエ!! 痛い!! たんまたんま!!」

「タンマなど聞かん!! ええい、このお姉ちゃん泣かせ!! 絶対に許さんぞ!!」

周りの人は私達を見てやれやれと肩を竦めている。まるで、それが日常の一コマであるかのように……。

「それにしても、お姉ちゃんは安心したよ! どこかで危ない事でもしてるんじゃないかって、ずっと心配してたんだから! これからはどうするの? また、ここで暮らすの?」

「……いや、ちよつと用事を片付けに来ただけなんだ。そうだ、知り合いを紹介するよ。入って来てくれ!」

士郎は部屋の外で待っていたらしい年配の男の人を呼んだ。

長い髪、鋭い眼光、ちよつと怖い感じのお兄さんだ。

「紹介するよ。向こうで世話になった人で、ウェイバー・ベルベツトさんだ」

知っている名前。だけど、面影があるだけで見た目が全然違う。

「どうも」

「あ、こちらこそどうもです。えつと、私はこの子の保護者のようなもので、藤村大河と申します」

「聞き及んでおります」

「えつと、いつも士郎がお世話になつていよう、ありがとうござい
ます」

頭を下げると、ウェイバーは苦笑した。

「彼にはさほど……。そちらのお嬢さんには散々手を焼かされたが
ね」

「ちよつ、どういう意味ですか、プロフェッサー!」

「戯け、貴様とあのツインドリルがしかした馬鹿騒ぎ、忘れたとは言
わせんぞ」

「うっ……」

「遠坂……」

ウェイバーの言葉で小さく縮こまる遠坂と呼ばれた少女。彼女の
苗字には聞き覚えがある。

「もう、リンってばかっこわるーい」

「うるさいわよ、イリヤスフィール!」

「もう、遠坂先輩も大人げないですよ!」

「う、うう、私の味方はいないの!?!」

「居ないよ」

「居ません」

「居るわけない」

彼等の掛け合いに思わず吹き出してしまった。

「あはは、みんな変わらないわねー」

懐かしいやりとりだ。少し前まで、それが日常だった。もう戻つて
こないのかもしれないと思つていたけど、ちゃんと戻ってきてくれ

た。

安心した。

「えっと、ところで用事って?」

「ああ、それは……」

◇

こんな筈ではなかった。息を潜め、必勝の時を待っていた老獪は目の前の光景に呆然としている。

アサシンを差し向けて、アヴェンジャーを追跡した結果、思わぬ収穫があり、勝利を確実なものに出来たと確信していた。

漸く、五百年掛けたマキリの悲願を達成する事が出来ると思った。

「凶りおつたな……、アインツベルン」

憎々しげに間桐臓硯は暗黒を従える聖女を睨みつける。その為の部分^{パーツ}は辛うじて残されている。

腐敗する身体、溶けていく魂、その苦痛を一欠片でも相手に味あわせようと憎悪を向ける。

「……バーカ。この期に及んで、まだ分からないのかよ」

幼い少女が口汚く罵る。闇に染まる髪、一層赤みを増す瞳。その肌には奇妙な刺青が浮き上がる。

「耄碌したな、マキリ」

次の瞬間、彼女の髪は白かった。瞳は赤いままだが、肌は透き通るように白い。刺青など痕跡一つ存在しない。

「我が仇敵よ。汝には分かっていた筈だ。だからこそ、あの夜、あの場所^所に赴いたのだろう?」

その鈴の音のような声はマキリという名の老魔術師にとって、懐かしいものだった。

数百年を経てなお、心の中で些かも色褪せぬ乙女。アインツベルンの黄金の聖女。第三魔法を再現する為に創り出された始まりのホムンクルス。

二百年前に大聖杯を完成させる為、自らを礎とした天の杯^{ユステイーター}が、彼の焦がれて止まなかったあの日の瞳を向けている。

「……分からぬ」

本当に分からなかった。何故、あの夜、あの場所を訪れたのか、その事を思い出せない

「何故、貴様はよりにもよって、《そんなモノ》に……」

「見てみたかった」

少女の声はあどけないものに変わる。

「見てみたかったのよ」

また、声色が少しだけ変わる。少し大人びた声だ。

「あの子が全てを知った後に選ぶ選択を見届けたかったの」

「何故だ？」

マキリは問う。

「何故、それほどあの娘に入れ込む？」

「だって、あの子は否定したもの」

聖女は言う。

「《師匠を泣かせる悪いやつは全部わたしがやっつけるのです！》」

その彼女らしからぬ言葉遣いに老魔術師は困惑する。

「あの子の真似よ。あの子は私を連れだそうとしてくれた。あの子のように、《わたしはわたしの信じた道を行きたいのです！》って……、連れだそうとしてくれたのよ」

その髪が再び闇に染まる。

「そんな優しい子がどんな風に歪むか見てみたいと思ったわけよ。だから、この茶番劇に招待したわけ」

歪んだ笑み。

「……お前は何者だ？」

「とつくにござ存知なんだろう？ 既に《完成おわったした筈の物語》を畳もうとする生真面目共にちよっかいかけ物好き。そんなもの、《オレ》以外にいないと思うか？」

「この世全ての悪……」

「大正解」

アンリ・マユが指を鳴らす。すると、闇が広がり、同時に街に変化が起き始めた。

「なんだ、これは……」

目の前で倒れている間桐雁夜だったものが全く違う人間に作り変わっていく。

否、それは元に戻っただけの事。役者は役という名の仮面を剥ぎ取られた。

雁夜だった青年の真名は間桐慎二。この年の年号は2010年。爆破解体されたホテルは二十年前にも爆破された経緯を持つ冬木ハイアットホテル。

今は第四次聖杯戦争の真つ最中などではなく、それどころか第五次聖杯戦争の終結から十年後である事を臓硯は思い出した。

大聖杯を解体する為に戻って来た遠坂と衛宮の倅達。そして、時計塔にその名を馳せるロード・エルメロイⅡ世。

彼等が大聖杯の下へ向かった晩、臓硯もまたひっそりと大空洞に潜り込んでいた。五百年の悲願を台無しにされては堪らぬが故に。

争いは起こらなかつた。起こる前にソレが起きた。

脈動する大聖杯。天蓋にまで届く闇の柱が彼等を呑み込んだ。十年前、決着がつかないまま戦いは終わった。その時の魔力が消費されぬまま残っていたのだ。

「どうせ、黙ってたら破壊されるんだ。なら、最後にオレがオレ自身の願いを叶えたっていいだろ？」

悪魔は嗤う。

「だが、それもここまでだな。見ろよ、ジジイ」

悪魔の指さした先で暗黒の光と黄金の光が煌めいている。

「オレの中に刻まれた十三日に及ぶ戦い。その期間がまんま戦いの期限だった。それ以上先の事はオレも知らないからな。あれがその幕引きの闇だ」

そう言うのと、アンリ・マユは臓硯から視線を外し、歩き出した。

「どこへ行くつもりだ？」

「まだ、ちょっと用事があるんでな。お姫様を迎えに行くぜ」

そう言って、間桐邸を後にした彼はすぐに足を止める。

そこに不機嫌そうな顔の男が立っていたからだ。

「ファック。今の今まで……、種明かしをされるまで気付けないとは

な」

「あらら、御機嫌斜めか？ ロード・エルメロイ二世」

「……口を閉じろ。その顔、その声で貴様の下劣な性根から出る腐ったような言葉を吐くな」

「ヒツデー。それが一週間苦楽を共にした仲間に言うセリフか？」

「一週間、我々を嘲笑っていた性悪には相応しい言葉だと思うが？」

睨み合う二人。やがて、アンリ・マユの方が音を上げた。

「嫌な成長遂げやがって。ファックはこっちのセリフだっつーの。お前の相手なんかしてる暇はねーよ。こいつ等に遊んでもらえ」

そう言つて、アンリ・マユが指を鳴らすと彼等の周囲に無数の影が現れた。

「……ふーん。そんな悪霊や人形如きで僕の相手が勤まると思ってるんだ」

そう言つて、コンカラーがロード・エルメロイ二世の前に躍り出る。

「馬鹿にするなよ、征服王。中にはサーヴァント級も混じってる。つていうか、その侍は一応サーヴァントとして戦った実績の持ち主だ」

青い陣羽織を羽織る侍が口元に笑みを浮かべてコンカラーの前に立つ。

「雌狐の後は仔狸だ。まったく、因果なものよ」

侍は言う。

「だが、折角だ。存分に死合おうではないか」

「やれやれ……、本当に舐めてくれるね」

そう言つと、コンカラーは天に手を翳す。

ゼウス・ファンダー
「神の祝福」

神の祝福が彼を包み込む。

「んじや、自由にやってる。あばよー！」

その間にアンリ・マユはスタコラサツサと離脱した。

「あつ、ちよつと!! 変身中はー！ー」

コンカラーの叫びが掻き消える。白き雷が彼の姿を変化させていく。

現れ立つ巨漢にロード・エルメロイ二世は懐かしむと同時に悲しくなった。

「お前、あれがどうしてそうなるんだ？」

「……そうあからさまに嫌そうな顔をするでない。余はこっちの方がイケてると思うのだが？」

その漢の名は征服王・イスカンドル。主が少年から大人に変わったように、アレキサンダー少年は成熟し、その本来の力と姿を取り戻した。

「まあ、あつちにはアーチャーもおる。まずは任せるとしよう。先にこっちだ。こやつらを始末してからでなければ面倒な事になる」

そう言つて、イスカンドルはロード・エルメロイ二世の頭をわしやわしやと乱暴に撫でた。

「おい、何をする!!」

「ハツハツハ!! なんとなくだ!! それより、刮目せよ!! 我が最強宝具を!!」

刮目する必要などない。ロード・エルメロイ二世は心の中で呟いた。

何故なら、その最強の姿を彼はどうの昔に見ている。

アイオニオン・ヘタイロイ
「王の軍勢!!」

そして、世界が一変した。

第二十話「弟子零号」

嘗て視た光景そのままだ。偉大なる王に従う万夫不当の英雄達。対する者は無数のホムンクルスや亡霊達。

「……素晴らしい」

亡霊の一人が喜色を浮かべてつぶやく。その圧倒的な光景を前に笑う胆力にイスカンドルもまた喜んだ。

「貴様は他の亡霊共とは一味違うようだな。名は何と？」

「生憎、名乗れる名など持ってはおらんよ」

剣として振るうにはあまりにも長過ぎる刀身を持つ太刀を握り、飄々とした態度で侍は群体の先頭に立つ。

「だが、あまり舐めてくれるなよ、紅毛渡来の王よ」

「敵ながら天晴なヤツよ。たしか、この国に古来存在した傭兵、侍であつたな！ お主、余に仕える気はないか？」

「宮仕えも悪くないが、そういつた話はとりあえず死合つた後にしよう」

「好戦的なヤツだ。気に入った！ では、蹂躪して我がモノとする事にしよう！」

「いぎーーーーー、尋常に勝負！」

侍が動くと同時に戦闘が始まった。

結界内に取り込まれた敵の数は思いの外多い。

数だけならイスカンドルが率いる無数の軍勢に引けをとらない。

だが、質の方は段違いだ。

「蹂躪せよ!!」

イスカンドルの掛け声と共に動き出すヘタイロイ。

一方的とも思える戦いの中で、あの侍だけは異様に元気いっぱいだ。

対峙している兵士達も実に活き活きと戦っている。

「フハハハハハッ!! 見ておるか、坊主!! 我が勇姿、しかとその脳裏に刻んでおけ!!」

「はいはい……」

もう、とつくの昔に刻んだよ。

ウェイバー・ベルベツトは嘗て憧れ、今尚尊敬している王の勇姿を見つめ続ける。

未熟だった頃を追体験させた事には物申したい気分だが、この再会に關してだけは巻き込んでくれた邪神にも感謝しよう。

もう、見る事も、語り合う事も無い筈だった王に彼はひっそりと臣下の礼を捧げた。

時間にして数分。されど、ウェイバーにとって泣きたくなくなる程嬉しい時間が過ぎ去った……。

◇

生ある者がやがて死に至るように、始まりと終わりは同義である。

アインツベルンの千年にわたる妄執。

マキリの五百年にわたる悲願。

多くの魔術師と英雄達の祈り。

それら全てに決着がつかうとしている。

「……幕引きだ」

街の様相が変化しても、己の召喚者が姿を転じても、セイバーのサーヴァントは変わらない。

ただ、少しだけ残念そうだ。

「結局、お前だけだったな」

ここには歴戦の英雄達が集まっている。なのに、心行くまま戦えた相手はライダー一人。

アーチャーと宝具の撃ち合いを試みたかった。

ランサーやアヴェンジャーと武勇を競いたかった。

コンカラーの軍勢を打ち破りたかった。

アサシンにもその本領を存分に発揮してもらいたかった。

その悉くを凌駕し尽くし、最強の名を知らしめたかった。

「だが、良い。思いの外、楽しむ事が出来たからな」

「……良かったな」

「互いにあの娘には勝てなかったな」

「そうだな……」

片や、黄金の輝きを持つ双剣を變形させた弓を構える。
片や、暗黒の輝きを持つ槍を構える。

「さあアーサー、心して受け取るが良い!」

弓兵が弦を引き絞る。同時に弓の先に魔法陣が展開する。

今、セイバーが誇る最強の宝具が発動した。弦より放たれた一本の矢がライダーに向かう。それを彼女は当然の如く弾くが、弾かれたと同時に光へ転じて天空へ昇る。

代わりに衛星軌道上に浮ぶ七つの光が一本の巨大な光の剣と成つて降りて来る。

終末剣・エンキは上空で破裂すると巨大な魔法陣を展開した。一瞬後、魔法陣は空間を巻き込んで崩壊する。まるで、ガラスをハンマーで叩き割ったかのように崩れた空間の向こうから巨大な波が押し寄せてくる。

万物全てを洗い流そうと亜空の向こう側から押し寄せてくるナピシテムの大波。その絶望的な光景を前に暗黒の騎士は苛烈な笑みを浮かべる。

「アーサーこの程度か」

本来、アーサー・ペンドラゴンが持つ《聖槍》は世の裏側である神代と現実である人の世を繋ぎ止める《光の柱》である。

一度解かれれば、この物理法則によって成立している世界の均衡は一気に崩れ落ち、今世に幻想の法則が現出し、神代に逆戻りしてしまう禁断の宝具。

だが、ライダーの振り翳した《魔槍》はむしろ、《闇の柱》。

あらゆる色を世界から奪い去る純黒の光が迸る。

「吠えたな、名も無きこの世全ての悪を背負いし人間!!」

「アーサー万象を呑み込む悪性!!」

頭上を覆うは人類に対する神々の裁き。

抗うは、人類が堆積したあまねく悪性。

彼等は互いに、この世の全てを背負った者。評価規格外の一撃同士が交差する。

その光景を目撃した者全員に等しく《死》を予感させた一瞬。無限

にも等しい1秒の間に二人は武器を持ち替えた。

「……考える事は同じか」

ライダーは嗤った。

闇の柱は大波を消し飛ばした。だが、それだけだった。

評価規格外の宝具同士の激突は両者相打つ形で霧散した。

それは両者が共に予想していた通りの事。その直後の激突こそ英雄としての格が命運を分けた。

「ではな、騎士王」

刹那の剣戟を制したセイバーは敗北者ライダーに背を向ける。

「……最後まで、そう呼ぶのだな」

「見事、最後まで演じ切った貴様への最大の賛辞だったのだが、不服か？」

「ぬかせ、邪魔ばかりしおって……」

全ての元凶はセイバーだ。

如何に神霊でも、無防備な状態で彼の宝具の干渉を受ければ無事では済まない。

彼が大聖杯に干渉した時、アンリ・マユは小聖杯に逃げ込んだ。

そして、彼を戦いから排除する為に記録されたアルトリア・ペンドラゴンの能力を120%まで引き上げた状態で複写コピーし、分霊をライダーのサーヴァントとして現界させた。

「私の召喚を許した貴様の落ち度だ」

「以前の貴様なら自らの手を患ってまで大聖杯を元に戻そうなどとしなかった筈だ」

「それは召喚者の問題だな。皮は同じでも、中身が違えば引力の向きも変わる」

セイバーは結界によって守られた空間内で眠る時臣だった少女、遠坂凜を見る。

「あの娘が召喚者だったからこそ、我はこの姿で喚ばれただけの事」

「……本当に運が無いな、私は」

そう呟くと、ライダーは光の粒子になって消えた。

◇

大河は不思議な空間にいた。空には巨大なスクリーンがあり、そこでセイバーとライダーが戦っている。

目を覚ました時、彼女は既にそこにいた。アーチャーはいない。代わりに夢の中で言葉を交わしていた赤毛の少年が眠っている。

その向こう側に見知った少女が立っていた。

「ああ、ライダーが負けちゃった」

イリヤスフィールは溜息を零した。

「……みたいだね」

「これで殆ど素寒貧よ。まったく、やれやれってヤツね」

その姿を今度は彼女の母親であるアイリスフィールに変えて言う。

「……イリヤちゃん？」

「なんだ？」

全身に刺青が走り、髪が黒に染まった少女が応える。

「あなたは誰？」

大河の問いにイリヤスフィールが答えた。

「アンリ・マユ」

「……でも、アンリ・マユはライダーさんなんですよ？」

「ざっくりと説明すると、アレはオレの一部なわけよ」

姿を何度も変えながら彼女は言う。

「この街自体もそうだ。この街の住民も殆どがオレの一部。正真正銘の本物はマスターとサーヴァントだけさ。もっとも、一部のマスターとアーチャー、それにライダーはちよつと違うけどな」

「どういう事……？」

「ライダーは分かるだろ？ アイツはオレの一部だった。それに、アーチャーはそこで寝っ転がってる正義の味方だ。オレが招待したアンタ以外にあの場に居たのは六人だけで、一人足りなかったんだよ。だから、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトもオレの分霊で補ったわけ」

「あの場って……？」

「大聖杯の解体現場」

尚も首を傾げる大河にアイリスフィールの姿をしたアンリ・マユは

不満そうな表情を浮かべた。

「もう、ぜつちちゃんってば、昔より頭の回転遅くなってるわよー！」

「ぜ、ぜつちちゃん？」

目を丸くする大河にアンリ・マユは寂しそうな表情を浮かべた。

「……話を続けるわ」

アンリ・マユは言った。

「聖杯の解体に携わった人間は五人。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとウェイバー・ベルベット、遠坂凜、衛宮士郎、間桐慎二だ。それで、間桐桜は大聖杯の影響を受ける事が案じられて遠ざけられていたけど、臓硯の方は解体を阻止する為に忍び込んでいた。結果、臓硯はあの四人に手も足も出ず、大聖杯も為す統^{オレ}べなく解体される所だった。だから、最後にちよつとだけ悪足掻きをした」

「あなたは何がしたかったの？」

「……なんだろうね。最初の計画ではぜつちちゃんに聖杯戦争を体験してもらって、最後の一人になった所でネタばらしをするつもりだったんだ。多くの屍を超えて勝ち抜いたのに、実は殺した相手マスター全員が元生徒や知人だったって知った時の貴女の絶望を見たかったのよ。そして、最後に聖杯^{わたし}を使わせる筈だった」

「……でも、わたし達ずつと……」

「そう、遊んでばかり」

イリヤスフィールの顔でアンリ・マユは苦笑した。

「だって、楽しくなっちゃったんだもん」

泣きそうな笑みを浮かべるアンリ・マユ。

「あの英雄王^{バカ}のせいよ。いきなり城に乗り込んできて、あなたと遊ぶから一緒に来いだなんて……。そもそも、アイツが大聖杯に干渉なんてしなれば……」

アンリ・マユは微笑った。

「あの男、初めから全部知ってた。全部分かった。そもそも、この世界が作り物だって事も、私の祈りも……。全部。本当にむかつくわ」
「どういう事か、などと大河は聞かなかった。」

「セイバーさんは……。だから、あの宝具を……」

七日後に全てを滅ぼす凶悪無比の宝具。一週間、共に過ごした彼は罪のない人を悪戯に殺そうとする人じゃなかった。

彼があたの宝具を使った真相。それはこの世界が作り物で、この世界の住人も全て偽物だと分かっていたから。

「冗談じゃないわよ。あんな宝具を使われたら、それで終わっちゃうじゃない……。おかげで力の大半をライダーに注ぎ込む事になったわ。乖離剣よりマシだけど、結局根こそぎよ……。コンカラーにも余力を回したせいでこの世界の維持に回せるリソースも残ってない」

「……あなたの祈りって、なんですか？」

大河の問いにアンリ・マユが歪んだ笑みを浮かべた。

「貴女に絶望して欲しかった。貴女に……。嫌ってもらいたかった」

そのあまりにも哀しそうな顔を見て、不意に大河は遠い日の記憶を思い出した。

どうして忘れていたのか分からない。

彼女は以前、アンリ・マユと遭った事がある。それは運命の悪戯による数奇な出会い。本来、起こりえない奇跡による会合。

「……アイリ師匠」

それが出会った時の彼女の呼び名。不思議な空間で不思議な時を彼女と共に過ごした。

最後の時、彼女を外に連れだそうとしたけれど、その手を振り解かれてしまった。

どうして、忘れていたんだろう……。

「私は消えるわ。この戦いがどういう結末で終わっても、既に解体作業は終了している。この空間は外と異なる時間の流れの中にあるけれど、そう長くは保たない。だから、私を救おうとしてくれた唯一無二の存在である貴女に嫌って欲しかった。絶望して欲しかった……」

「どうして……」

「だって、耐えられないもの」

アンリ・マユは涙を零した。

「この世全ての悪を背負わされた時から私を救おうとする者なんて一人もいなかった。利用しようと企む人はいたけど、救うために外へ連

れだそうとしてくれた人はぜっちゃんだけだったわ。だから、未練が残ったの……」

「師匠……」

「なのに、全部台無し。だけど、どうしてかしら……」

地面が大きく揺れた。

「……安心して、ぜっちゃん。この世界が終わろうとしているだけよ。貴女は外の世界に戻される」

「師匠はどうなるんですか……?」

アンリ・マユは答えなかった。

かわりに穏やかな微笑みを浮かべる。

「ぜっちゃん。貴女と過ごした一週間。楽しかったわ」

「……ここから出ようよ。また、一緒にあそぼうよ!!」

「前にも言ったでしょ。それは無理なの」

崩れていく。世界そのものが……。

「待ってよ!! わたしは師匠と一緒にもつとー」

「ぜっちゃん。あの時も、今も……、ありがとう!」

地面が割れる。大河が慌てて手を伸ばすが、アンリ・マユからどんな体が離れていく。

「ヤ、ヤダ!! 一緒に、もつと……、一緒に!!」

「バイバイ。この娘の事、お願いね」

アンリ・マユの体が二つに割れる。片方はイリヤスフィールの姿。もう片方はアイリスフィールの姿。

アイリスフィールはイリヤを「よいしょ」と大河に投げた。

「うわっ!」

大河は慌ててキャッチしたが、そのまま倒れこんでしまった。

そして、気付けば見知った寺の境内にいた……。

最終話 「藤ねえルート」

稜線の向こう側から太陽が姿を現し、闇が晴れていく。山門の向こう、セイバーとライダーが激突した筈の戦場には戦前と変わらぬ穏やかな田園風景が広がっている。

まるで、全てが嘘偽りであったかのように、あの戦いの痕跡が欠片も残っていない。

「……師匠」

また、届かなかった。泣きそうな笑顔で見送る師匠^{アンリ・マユ}をまた置き去りにしてしまった。

大河はやり場のない感情の矛先を足元の石ころに向けて蹴っ飛ばした。

すると、唐突に割れた空間の狭間から姿を現したセイバーのおでこに石ころが命中。

「……おい、貴様」

般若の形相を浮かべるセイバー。その顔を見た瞬間、大河は駆け出していた。

「セイバーさん!!」

セイバーの後ろには鎖に巻かれた男女が転がっていた。

「士郎！ イリヤちゃん！ 遠坂さん！ 間桐くん！」

四人は呻き声をあげている。大河はなんとか鎖を解こうとするが、ビクともしなかった。

「阿呆。神獣をも縛る天の鎖を魔術師ですらない非力な人間に解けるものか」

「えっと、これも宝具なの？」

「そうだ。我が至高の逸品だぞ」

自慢気なセイバー。大河は「ふうん」と呟くと辺りを見回した。

「ウェイバーちゃんとコンカラーさんは？」

「……あそこだ」

興味を示さない大河に少しムツとしながら、セイバーは少し離れた場所で寝転がっている二人を指さした。

「元々、アンリ・マユによって構築された位相空間内で固有結界を使つた為、先に排出されたようだ」

「固有結界……？」

「術者の心象風景を具現化する魔術。アーチャーも使える。本来、固有結界を含めた《異世界》は《世界》による修正の対象となる。故にヤツは崩壊の瞬間、その《一秒間》だけ存在出来る異世界を造り上げた。内部の時間の流れだけを操作する事で修正を免れていたわけだ。だが、その中で更に固有結界を使われれば世界は違和感に気付いてしまう。抑止の力が動けば如何に神霊が築いた城塞だろうと瞬く間に崩壊してしまう」

セイバーは微笑む。

「その程度の事、ヤツは端から知っていた筈だ。その上で貴様にアーチャーを割り当て、ウェイバー・ベルベットにはコンカラーの召喚を許した。時臣^{リッ}に我を召喚させた事といい……、まったく素直ではないな」

「そつか……」

大河はセイバーの言葉の真意に気付いた。

「師匠は……、初めから脱出の鍵を持たせてくれていたんだね」

「貴様に絶望を与えようとしていた事も事実だ。その為に茶番の下準備を整えていたからな。だが、それは本意ではない。この世全ての悪という性質に乗っ取った《正しい目的》の為だった。ヤツの本当の目的は……」

「わたしと会う事……」

「そうだ。ヤツはこの世全ての悪と呼ばれた存在。だが、そうなる前はどこにでもいる普通の人間だった。人里離れた村で行われた因習。人間の持つ根源的な悪性を一人の人間に押し付ける事で自らを善であると肯定するもの。その生贄に選ばれてしまった不運な人間だ」

「……ひどいよ」

「タイガ」

セイバーは何処から取り出した小さな杯を大河に投げ渡した。

「うわつとと、なにこれ？」

「聖杯だ」

「……はえ?」

戸惑う大河にセイバーは微笑みかける。

「此度の戦いの勝者は貴様だ。ならば、聖杯に祈りを捧げる権利も貴様にある」

「……勝者って、わたしは……」

「我も……、ライダーも、コンカラーも誰も貴様に勝てなかった。紛れも無く、貴様が勝者だ」

「だって、わたしはゲームで勝っただけだよ!」

結局、聖杯戦争とは名ばかりのゲーム大会だった。ただただ楽しかっただけの時間。

辛い事も、怖い事も、なにもなかった。

「タイガ。言っておくが、殺し合う事だけが聖杯戦争ではない。聖杯を求め、争う闘争全てが聖杯戦争なのだ。そして、貴様は聖杯を求める者達がこぞって参加した闘争に勝利した。……まあ、それでも要らないと言うのなら処分してしまうが?」

大河は手の中に収まっている綺麗な杯に視線を落とす。

どんな願いも叶えられる万能の杯。それが手の中にある。

何を願ってもいい。億万長者にも、不老不死にも、何にでもなれる。

「ねえ、セイバーさん」

「なんだ?」

「これを使えば、どんな願いも叶うんだよね?」

「そうだ」

「……じゃあ、それなら……」

大河は杯を掲げる。

使い方なんて知らない。だから、ただ思いを籠めて呟いた。

「……師匠ともっと一緒にいたいよ。一人ぼっちは寂しいもの」

他にも願うべき事は山程ある。だけど、大河は選ぶ事もしなかった。思うままに願いを口にしました。

聖杯が光を放つ。多くの人、多くの時間、多くの犠牲を支払い作り上げられた万能の願望機がその真価を発揮する。

地下、崩壊し始めた空洞内に聖なる光が満ち溢れた。
空間一面に張り巡らされた聖女の魔術回路が中心部に収束して
いく。

本来、聖杯とはアインツベルンが第三魔法を再現する為に造り上げ
た装置だ。

大河の託した祈りは偶然にも聖杯の真価を最大限引き出すもの
だった。

魂の物質化。無形の呪詛であるアンリ・マユが実体化を開始する。

「もつと一緒に……、か」

実体化した少女は苦笑する。そして、その身は崩壊する洞窟から柳
洞寺の境内へ移動した。

「上手い言い回しね、ぜっちゃん」

大河はその少女を見て大きく目を見開いた。

姿形はイリヤスフィールと似ている。肌が褐色である事を除けば
同一人物かと思う程似ている。

「師匠……？」

「非力な貴女と一緒にいる為には私自身も非力になるしかない。そし
て、善良である貴女と一緒にいる為には……」

アンリ・マユは大河の頬を引っ張った。

「まんまと人間に戻してくれたわね、ぜっちゃん。この責任は取って
もらうからね」

本来、アンリ・マユに自我などない。その全てを生前奪われてし
まったからだ。

それでも、確かに彼、あるいは彼女は存在していた。

無形である魂は大河と共に過ごした時間の中で培ったものを主軸
に再構築され、生まれ変わった。

あるいは、それはアンリ・マユを悪に貶めた過去の人々と同じ事を
したのかもしれない。

だが、根本にあるものは変わらない。悪性に身を窺しても、再構築
されても……。

「おい、アンリ・マユ」

体を光の粒に変えながら、セイバーは問う。

「不服はあるか？」

「……全部見透かしたようなアンタの目。それだけね」

生意気な表情を浮かべるアンリ・マユにセイバーは苦笑する。

「最後まで可愛げのないヤツだ。だが、良い。それでこそ人間というものだ。精々、人として幸福に生きろ。それが我の裁定だ」

彼は言った。

《この聖杯戦争キセキに感謝する事だな、アンリ・マユよ。貴様の前には王オレがいる。我が人類の欲望を律してやる》

今、この世全ての悪を背負わされた哀れな子羊は人類の欲望あくいから解放された。

ここに王の裁定は成った。役目を終えた彼はもはや用は無いと言わんばかりに呆気なく、その姿を光に変えて消滅した。

「……セイバーさん」

人類最古の英雄王。彼の行動は終始、この結末に至るためのものだった。

「あなたは凄い人だわ……」

「すぎ過ぎよ。本当に腹が立つわ」

◇

戦いは終わりを告げた。

大聖杯無き後、ウエイバー・ベルベットに大英雄の現界を維持するだけの魔力を用意する事は出来なかった。

それ故に……、

「マスター！ フラットが言ってたんだけど、絶対領域マジシャン先生ってニツクネームなんだって？ 僕もこれからそう呼んでもー」

「いいわけあるか!! さっさと次の講義の準備を始めるぞ!! それから、あの馬鹿を後で部屋に来るよう言っておけ!!」

「わー、マスター・Vが怒ったー」

コンカラーは少年時代の姿に戻っていた。魔力の消費を極限まで抑える事ではにか現界を維持し、受肉の方法を探っている。

世界征服もいいが、それは彼の生涯を見届けた後にするつもりだ。既に少年時代とは比較にならない成長振り故に今後が楽しみで仕方がない。

「はっはっは、伝説の英雄を叱り飛ばすとは、さすがだな」

水銀のメイドを従える少女は自らが兄と崇める男をからかう。

大聖杯を停止させるといふ暴挙に出た彼に肅清の手が伸びかけたが、コンカラーの存在が彼の教え子達の尽力と合わさり事なきを得た。

多くの者から尊敬を集めるようになった彼の日常はコンカラーの存在によって更に面白おかしいものになっていく。

それはまた別のお話……。

◇

大聖杯解体の事後処理が終わり、衛宮士郎が冬木に戻って来たのは一ヶ月後の事だった。

彼にとって不安の種だったアンリ・マユと呼ばれた少女は相変わらず大河やイリヤスフィールと騒がしい日々を送っているようだ。

「イリヤちゃん！ クロエちゃん！ 士郎が帰って来たよー！」

肌が黒いからクロエと安直に懐けられた少女は士郎を見ると嫌そうな表情を浮かべた。

「正義の味方はわたしの敵なんだけどなー」

その在り方は確かに正義の味方の対極にある。

危険な存在だ。いつ、大河に牙を剥き、全人類に宣戦布告をするか分からない。

正義の味方として、殺すべき対象だ。

「ダメよ、クロエちゃん！ 士郎はわたしの大切な弟分なんだから！」

「はーい」

バカバカしい。士郎は起動しかけた魔術回路を静まらせた。

彼女は人間だ。生物学上も魔術的な視点から見ても、それは間違いない。

魔術回路もなく、肉体も脆弱で、十歳前後の少女並の運動能力しかない。

それに、この一ヶ月の間、どうしても大河を護衛出来る人間が居なかった時期がある。その間、彼女が大河に危害を加えた事は一度もない。

「……藤ねえ」

だけど、どうしても怖い。彼女の身に危険が及ぶ可能性が1%でも存在する事が恐ろしくてたまらない。

これはきつと、アーチャーのせいだ。あの泡沫の夢の中で士郎はアーチャーになっていた。彼の経験や記憶を自分のものとして感じていた。

大河と再開した時の感情。大河の身に危機が押し寄せた時の感情。

「相変わらず、元気だな」

彼女と過ごす時間を英霊・エミヤは全身全霊で喜んでいた。

それほど、彼女が彼にとつて大切な存在なのだと自覚させられた。

「もちろん、お姉ちゃんはいつだって元気いっぱいだよ！ それより、士郎！ もう一段落ついたんだよね？」

「ああ」

「なら、久しぶりに士郎の御飯を食べさせてよ！」

「はいはい。まったく、仕方がないな」

彼女の笑顔が曇らないか不安で堪らない。見ていない間に彼女の身に何か起きないか心配で堪らない。

藤村邸から衛宮邸に移動して、キッチンに向かう。冷蔵庫には食材が詰まっていた。

大河が用意したものだ。

「……バカだな、藤ねえ。こんなにいっぱい……」

彼女の真意は分かっている。

「俺は……」

材料を適当に見繕い、調理を進めていく。

気付けば彼女の好物ばかり山のように作ってしまった。

「出来たよ、みんな」

料理を並べ終えると、士郎は三人に声を掛けた。

「ねえ、士郎……」

大河は振り向かず、彼の名を呼ぶ。

「なんだ？」

彼女が言おうとしている言葉が脳裏に浮かぶ。
行かないでくれ。ここにいてくれ。

きつと、彼女もアーチャーの正体に気付いている。士郎が今後どのような道を歩んでいくのかも……。

だからこそ、引き止める。だからこそ、士郎は唇を噛み締めた。

「……ごめん、藤ねえ。」

「士郎……」

大河は言った。

「結婚しない？」

「いいよ」

この間、五秒。

そして、一ヶ月後、藤村大河は衛宮大河になった。

遠坂、間桐、アインツベルンの末裔が鬼の形相を浮かべて暴れまわる珍事などもあったが、衛宮士郎は妻を愛しながら彼女を支える為に消防署に就職し、世のため人のため、そして妻の為に頑張るのだった。

ジャンジャン!! END